

水産業

館市にして、殆ど函館近海より漁獲される。即ち左の如くである(單位貫)

Table with columns: 支庁市別, 数量, 金額. Lists various regions like 石狩, 後志, 檜山, etc.

最近三箇年柔魚製物高種類別

(道廳水産課調査)

輸移出 鰯は本道の重要輸出品にして、年々相當の輸出をなすつ、あるが、近來主要仕向地たる對華貿易振はず漸次減少の傾きがある。而して昭和四年に於ては、突如動亂擴大して遂に濟南事件を生み排日貨運動を惹起して其影響を受け、下半期に至り稍緩和されて、總高一千二百七十一噸、百二萬九千圓を示した。而して本品の輸出港は、殆ど函館にして其他小樽より積出されてゐる。最近三

Table with columns: 種類, 昭和三年, 昭和二年. Lists various fish products like 鰯, 鱈, etc.

尙本州方面に移出されるもの極めて多く、昭和四年に於ける函館港より移出されたものは、八千四百八十八噸にして、其價七百三萬七千三百六十二圓の多きに達してゐる。函館より海運にて移出されたる主なる仕向地を掲ぐれば左の如くである。

Table with columns: 仕向地, 噸數, 金額. Lists destinations like 神戶, 名古屋, etc.

一、二、章魚

漁獲高と主産地 本章章魚は「まだこ」多く「い、だ」の棲息が豊い。而して本道到る所に棲息し、就中日高、釧路地方に多く、冬期空釣にて漁獲する。

Table with columns: 年次, 數量, 金額. Shows annual catch and value for squid.

八、九三六圓を産し、同年漁獲高の九割六分餘を占めて居る。最近三箇年蟹類製造高 (道廳統計課調査)

Table with columns: 年次, 數量, 金額. Shows annual catch and value for crabs.

一、三、海鼠

海鼠は殆ど全道に棲息を見るが、就中北見、天鹽地方に多い、漁期は七月乃至九月で、漁具は桁網を用ひ、漁獲物は専ら海參に製せられ、對華主要輸出品の一になつて居る。最近五箇年海鼠漁獲高一覽 (道廳統計課調査)

Table with columns: 年次, 數量, 金額. Shows annual catch and value for sea mice.

支廳別 數量 價額. Lists various regions like 浦河, 宗谷, etc.

最近三箇年酢章魚製造高一覽 (道廳統計課調査)

Table with columns: 年次, 數量, 金額. Shows annual catch and value for pickled squid.

本道産の蟹には、毛蟹・花咲蟹・タラバ蟹等あるが、此の中最も重要視せられるのはタラバ蟹である。産地は國後島東岸及北見國東岸を主とし、此の外北千島、釧路、十勝沿岸にも産し、漁期は三月乃至六月及九・十月の二期で、北千島は五月より九月迄である。漁具は刺網にして漁獲の殆ど全部は罐詰に製せられ、其肉質北米産「ロブスター」に酷似し歐米に嗜好せられるので、同地方への輸出品として特に重要な地位を占めて居る。タラバ蟹最近五箇年漁獲高表 (道廳統計課調査)

Table with columns: 年次, 數量, 金額. Shows annual catch and value for crabs.

而して其の主産地は根室支廳管内で、昭和四年に於て七一五、六八三貫の三〇

最近三箇年昆布製造高一覽 (道廳水産課調査)

年次	数量	價額
昭和二年	三六八、二七六	二、八八六、四九五
昭和三年	三六四、一七三	二、八三三、二七三
昭和四年	三六六、九七七	二、五〇八、八二一

一六、昆布

採取高と主産地 本道主要昆布の種類は「なが昆布」「まご昆布」「利尻昆布」「三石昆布」「細目昆布」「鬼昆布」(あつばこ昆布)及「猫足昆布」等で、本邦産額の九割以上を占めて居る。其の分布は全道沿岸に亘るも主産地は千島・根室・釧路日高・渡島・天鹽・利尻・禮文等である。その採取期七月乃至十月で、最近に於ける是等の産額は左の通り

最近五箇年昆布採取高一覽 (道廳統計課調査)

年次	数量	價額
大正一四	五、〇〇五、〇八八	三、九〇九、三七九
昭和元	四、〇〇〇、三二九	三、五五五、九六八

最近五箇年昆布製造高種別一覽表 (道廳水産課調査)

種別	大正十四年		昭和元年		二年		三年		四年	
	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額
長切昆布	二、〇四三、五二九	五、二七五、二九五	二、〇八六、六一	三、三五四、六四二	二、〇八六、六一	三、三五四、六四二	三、一八一、五三二	三、一八一、五三二	四、三三三、八七三	一〇、四九一、〇四九
折昆布	四〇六、一七七	六六二、八二九	二七、九七五	五五、七五二	二七、九七五	五五、七五二	二七、九七五	五五、七五二	二七、九七五	五五、七五二
刻昆布	一三、四七五	一六三、九七五	一四、三〇五	二二、三五二	一三、四七五	一六三、九七五	一三、四七五	一六三、九七五	一三、四七五	一六三、九七五

支廳市別 採取高 支廳市別 採取高
石狩 五二、四〇〇 網走 八〇〇
後志 一、六四七、四〇四 宗谷 六七、六五〇
檜山 五三〇、七二二 留萌 一、〇四八、八五〇
渡島 三、二七四、〇九一 小樽市 一、九二〇
釧路市 一、三三三、〇三三 函館市 二、八二七、七五五
浦河 五、八八一、八三三 室蘭市 一、〇七九、六五〇
河内 一、二四四、四三〇 釧路市 一、九八八、三六〇
根室 三、五三三、五三三 合計 五、四九三、三五五

處理製造及消費 昆布は主として長切昆布・元揃昆布・折昆布・刻昆布等に製造される。而して需要先に區別すれば、「長切昆布」は中華民輸出を主とし、「まご昆布」「利尻昆布」はダン並加工用として内地消費され、「三石昆布」「細目昆布」は主として煮昆布として用びられ、「猫足昆布」は下等加工品製造原料及沃度加里等

製薬原料に供せられる。而して鹽化加里は歐洲大戦中勃興し鹽素酸加里原料として鹽化加里の隆盛實に空前絶後の觀を呈したが、大戦終結と同時に衰微の歩調を辿り、現今僅に沃度のみを製薬するに過ぎない状態に於ては、「まご昆布」「利尻昆布」を原料として各地に於て菓子、削昆布を製したが近年「猫足昆布」を原料として削製品を生産するに至つた。けれども是等の産額未だ僅少で他府縣加工に比して雲泥の差がある。近年釧路市及花咲郡商舞村並厚岸郡濱中村で「猫足昆布」を原料とする「とろろ昆布」の製造に動力を使用し一人一日能く二十貫匁を製してゐるが、本製品は尙品質改良に研究する餘地が澤山ある。尙現今昆布は人體に有用な成分を含有して居ることが一般に認められ之が常食を促進した爲に昆布茶、粉末昆布、味の素類似品其の他各種の加工研究が盛んになつたが未だ試験時代に屬し製品として産額に見るべきものがない。

輸出 昆布は本道の重道輸出品たる海産物であるが、需要國たる支那は打續く動亂と日貨排斥の爲め、近來輸出極めて不振を呈して居る。然し昭和四年に於ては彼國の在荷薄しと南京事件の解決に稍小康を得て、輸出額一萬九千噸にして其價額百九十萬圓に上り、前年に比し

少なからぬ増加を示した。本品は主として根室・釧路の兩港より輸出され、其他函館・小樽港よりも積出されてゐる。左に最近に於ける昆布及刻昆布の主なる仕向地別を掲げる(單位噸) (札幌鐵道局運輸課調査)

るので近年道外各地へ販路を擴張するに至つた。又蒲鉾原料として毎年道外へ移出される鮮魚の數量も尠くない。即ち鰯・鱈を主とし他府縣蒲鉾原料の減少に伴ひ近年數量を増加する趨勢にある。

國別	昭和二年	同三年	同四年
中華民國	一四、九三三、〇〇〇	一〇、七三三、七三〇	一九、八四三、二〇〇
關東州	一六五、四〇〇	三三〇、九四〇	三三〇、九四〇
香港	四七、八〇〇	五五、二〇〇	八四、六〇〇
英領印度	—	—	—
同海峽殖民地	—	—	—
同露領亞細亞	—	—	—
計	一五、一三五、五四〇	一一、〇六八、九三〇	二一、〇〇八、九三〇

支廳市別	數量	價額
函館市	六三、四〇〇	一、〇一〇、一〇〇
小樽市	二〇、二九	二四〇、五九
釧路市	一五、七〇〇	二三三、五九〇
室蘭市	二〇〇、六七〇	一、〇一〇、一〇〇
後志	一四、六〇九	一四九、九四

集散地及販路 製造地より需要地へ直接取引を行ふ場合多く、道外の主なる仕向先は東京市・東北・北陸・奥羽・關西地方各地で稀に中部地方に移送せらるる事があるが其の數量極めて少ない。又

最近五箇年鮭鱒孵化放流状況一覽 (道廳水産課調査)

Table with columns: 種別 (Species), 年次 (Year), 捕獲親魚數 (Parent Fish Caught), 使用親魚數 (Parent Fish Used), 採卵數 (Egg Collection), 孵化放流數 (Hatchery Release). Rows include 紅鱒 (Red Salmon), 姫鱒 (Princess Salmon), 鱒 (Trout), 鮭 (Salmon).

蒲鉾原料は頭部、内臓物を切除洗した後、冬季は吹詰とし温暖の候に於ては氷塊と共に封詰とし冷蔵貨車で移送する。其の範圍は氣候に左右せられ冬季間は佐渡・越後・静岡・仙臺附近である。

水産養殖概況

水産養殖の事業は、鮭・鱒・紅鱒・鮎・鮎・胡瓜魚・柳葉魚(シヤマ)等の人工

孵化にして、昭和四年度末現在道内に於ける孵化場の数は、鮭孵化場五十一、鱒三十二、姫鱒四、紅鱒一、伊富一にして其の他鮎・鮎・胡瓜魚・柳葉魚の孵化場は十六を算する。此等孵化場中三孵化場は北海道廳之を經營し、他は總て民間の經營とし、奨励金を交付して此れが發達を助長して居る。尙ほ道廳及水産試驗場に於ては、之に關する調査・試験・種卵・種苗の配布・技術員の養成等の事業を行ひ、水産永遠の發展を期するに専らである。又最近池塘に於ける温水魚族の養殖、淺海を利用する介藻類の増殖事業等も、漸く勃興の氣運に在る。而して水産養殖に依る收穫高も昭和四年に於ては九萬九千七百四十四圓を示して稍々減少の憾はあるが、將來必ずや漸増の趨勢を辿ることは間違のない所であらう。今状況を示せば左の如くである。

一、鮭鱒人工孵化場(昭和五年五月現在)

Table showing hatchery statistics for 紅鱒 (Red Salmon) and 鮭 (Salmon) across years 昭和元年 to 昭和四年.

昭和四年伊富・鮎・鮎胡瓜魚・柳葉魚孵化放流一覽 (道廳水産課調査)

Table with columns: 種別 (Species), 捕獲親魚數 (Parent Fish Caught), 使用親魚數 (Parent Fish Used), 採卵數 (Egg Collection), 孵化放流數 (Hatchery Release). Rows include 伊富 (Ichi-tsu), 鮎 (Aji), 鮎胡瓜魚 (Aji-kaba), 柳葉魚 (Shi-yama).

畫の實現を期する豫定になつてゐる。實施經過 本計畫は昭和二年度から實施したもので計畫實施後未だ二ヶ年を経過したに過ぎないが、此間に於ける官

營孵化場の分のみの成績を擧ぐれば左の通りである。(千歳、西別、留別の三孵化場は昭和二年度から本計畫に基き國費によつて廳これを經營してゐる)

官營孵化場經營 (道廳水産課調査)

Table with columns: 孵化場年度 (Hatchery Year), 留別 (Reserve), 千歳 (Chitose), 西別 (Sai-betsu), 計 (Total). Rows include 昭和二年度, 昭和三年度, 昭和四年度.

備考 鮭鱒孵化場は水産試驗場の所屬である。

鮭鱒 四 一 千 萬 粒 經營者 北海道廳 三 漁業組合 自治團體 二 申合組合 水産會 六 個 水産組合 五 人 種別 二、鮎・鮎・胡瓜魚・柳葉魚人工孵化場 (同上現在) 孵化場數 鮎 四 設 鮎 五 七 千 七 百 萬 粒 鮎 五 七 千 七 百 萬 粒 胡瓜魚 二 二 億 四 千 九 百 萬 粒 柳葉魚 二 一 億 一 千 萬 粒 經營者種別 (漁業組合 九 申合組合 一) 現行鮭鱒孵化事業計畫 計畫の目標 本道鮭鱒漁業の安定を期する爲には最少限度に於て鮭八萬石、鱒十萬石漁獲の實現を圖る必要があるが、其實行には多額の經費を伴ふので第二期拓殖計畫に依る本計畫に於ては、已不得鮭四萬五千石、鱒三萬五千石をして將來の最低漁獲高とし、常に之れ以上にならざる様増殖するものを目標とする。 孵化放流確定數 前記の目標の達成に要する採卵及孵化放流數は相當多額に上る關係上速に實現し難いので年々増加させる方法の下に進め、鮭は十四年目に三億、千萬粒を採卵し、二億八千萬粒を放流し、鮎は十七年目に三億九千萬粒を採卵し、三億一千二百萬粒を放流して計

欠

昭和四年工業種別表

(道廳統計課調査に據る)

種別	工場數	職工數	原料			動力			消費			製造價額
			石炭	石油	瓦斯	石炭	石油	瓦斯	石炭	石油	瓦斯	
紡績工業	80	2,107	4,077,000	8,000	14,500	263,261,993	57,345	2,568,046	9,656,975			
金屬工業	91	1,956	1,311,843	914,896	45,531	78,251,558	476,715	8,234,477	19,177,568			
機械器具工業	181	4,938	3,267,798	2,182,159	61,317	1,055,035	23,148	9,655,336	23,126,883			
窯業	37	1,283	3,105,730	630,000	61,214	23,148	25,636,552	8,379,693				
化學工業	73	4,698	2,006,387,704	62,330	330,737	330,737	273,398,336	51,624,884				
製材及木製品工業	36	4,700	2,804,000	1,000	44,416	330,737	273,398,336	22,735,581				
印刷及製本業	133	4,700	1,301,404	1,000	273,398	178,127	8,398,271	8,398,271				
食料品工業	47	5,558	6,066,337	2,182,159	368,855	268,881	268,881	7,777,466				
瓦斯及電氣業	30	316	25,443,797	41,448	55,532	481,280	1,277,244	7,279,661				
雜工業	247	2,642	833,942	364,000	30,333	10,000	56,906	1,507,736				
合計	1,684	30,385	37,440,454	6,014,001	211,933	3,742,209	37,085,018	205,066,864				

備考 本表は大正十二年農商務省令第十二號工場統計規則に依り作製したるもの、摘録にして當時五人以上の職工を使用する工場につき調査せられたものである。表中の製造價額は其年の新規生産額、加工料、修繕料及工賃等を合併したもので従て既述の工場總額と其額一致せず。

昭和四年工産物數量價額一覽表

(道廳統計課調査)

品目	數量	價額	品目	數量	價額
麻糸		四,三三,〇〇五	製菓罐		六八,六六八
織物		一,七三四,七三六	菓子糖		三三,八五三
織物		一,七六五,三三九	糖		一,六五二,三六四
礦物		三〇,〇六九			
植物油		三,二七四,三三三			
礦物		三,二七四,三三三			
製菓罐		三,二七四,三三三			
菓子糖		一,六五二,三六四			
糖		一,六五二,三六四			

工業

業

莫大	製小	晒染	金及	金及	機屬	車屬	船磁	陶磁	硝子	煉瓦	瓦及	セメント	石製	醫藥	工業	製藥	化工	石油
一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五
六六二、六六六	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五
一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五
一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五	一、七六四、八五五

紡織工業

本道の紡織業は安政年間(1824-1828)に於ける幕府の奨励に其の端を發して居るが當時は單なる婦女子の副業に止まり何等見るべきものがなかつた。超えて明治七年開拓使が札幌に紡織場を設置し次で明治廿年北海道製麻株式會社(明治四十七年七月帝

國製麻株式會社に合併)が設立される様になつて始めて曙光を見出すに到り爾來着々穩健な發達を遂げ殊に本道特産亞麻を原料とする製麻、紡績麻絲、麻織物等は著しく進展し、製麻業亦發達の一路を辿り克く今日の狀態を齎し得た。然し濫觴の古い絹織物業は猶家内工業たる域を脱せず遲々不振の狀態にある。

備考 分類品目改正に依り本年より電氣・印刷を加へ、雷管、鉛管、鉛筆軸木、炭素を削除した

(道廳統計課調査)

莫大 六六二、六六六
製小 一、七六四、八五五
晒染 一、七六四、八五五
金及 一、七六四、八五五
金及 一、七六四、八五五
機屬 一、七六四、八五五
車屬 一、七六四、八五五
船磁 一、七六四、八五五
陶磁 一、七六四、八五五
硝子 一、七六四、八五五
煉瓦 一、七六四、八五五
瓦及 一、七六四、八五五
セメント 一、七六四、八五五
石製 一、七六四、八五五
醫藥 一、七六四、八五五
工業 一、七六四、八五五
製藥 一、七六四、八五五
化工 一、七六四、八五五
石油 一、七六四、八五五

製麻 本品は本道特産の亞麻を原料とするもので、紡績作業に移る第一の工程を意味し、帝國製麻株式會社の一手に懸る。即ち農家の耕作した亞麻を抜き取り、乾燥の上種子を脱落したもの。其の栽培地附近に設置されて居る二十有餘の製麻所に於て、碎莖機ミラン機を以て纖維分を採取するのである。而して最近道内にて生産せらる、亞麻纖維は約二百八十三萬疋(札幌調)にして其の内約百四十五萬疋は道内に於て製品となり、他は大阪・鹿沼等の本州工場に輸送されて製品となる。

本道主要製線所

帝國製麻株式會社	石狩國札幌郡琴似村
帝似製線所	樺戸郡月形村
樺戸	夕張郡角田村
栗山	同 虻田郡伊達町
紋龜	同 虻田郡虻田村
虻田	同 虻田郡虻田村
俱知安	同 虻田郡虻田村
富良野	石狩國空知郡下富良野村
帶廣	十勝國河西郡帶廣町
幕別	同 中川郡幕別村
本別	同 本別村

美幌 北見國網走郡美幌町
湧別 同 下湧別村
名寄 同 天鹽國中川郡名寄町
野付牛 北見國常呂郡野付牛町
大正製麻株式會社 十勝國中川郡池田町
池田工場 北見國常呂郡留邊藥町
留邊藥工場 石狩國空知郡奈井江
奈井江工場 右の工程に依り製線され
麻糸紡績 右の工程に依り製線され
た所謂亞麻纖維の紡績作業で、各種の工
程を経て製糸及織糸となり、麻布、紋帳
は勿論、絹綿又は毛との交織等織物用を
始めとし、電線被覆、蠶繭、巻尺等種々
の用途に供せられ、廣く全國の需要に應
ず。工場は帝國製麻株式會社札幌支店工
場の外東洋製線、北海道亞麻工業會社等
の經營に係るものもあるが、後者は其の
機能大ならず、大部分は帝國製麻會社の
生産である。

今左に帝國製麻株式會社札幌支店工場に於ける最近製線の産額を示せば概ね左の如くである。(札幌鐵道局運輸課調査)

昭和三十九年	九三、五九疋	二、九八、〇〇〇圓
昭和三十一年	八七、二八三	二、四〇、〇〇〇
昭和三十三年	一、一三、六〇〇	三、三六、〇〇〇
昭和三十四年	一、〇三、四八六	三、七〇、〇〇〇
昭和三十五年	九一、五九九	二、三三、〇〇〇

て、其の製品は帆布(ツック)ダック、ホリス、リネル服地、洋服真地、テーパークロース、ナフキン、タオル、ハンカチーフ等が主である。而して其の製品の種類により需要先も異なるが、概して云へば陸海軍軍需品として買上げられるもの及府縣に移出するものも多く、又海外に仕向けられるものも尠くない。リネル服地・テーパークロース・タオル・ハンカチーフ・レース糸・ミシン糸等は最近大いに一般家庭の需要を喚起し、今後更に需要増大の傾向がある。左に帝國製麻株式會社札幌支店工場に於ける最近五年間織物業生産高を示そう(札幌鐵道局運輸課調査)

三、製綿
製綿の業は、比較的近年の發展に屬するが、現在工場數十ヶ所、其の生産額百七十五担の百二十七萬餘圓に達し、將來の進展を囑望されてゐる。その主産地は函館市、小樽市、札幌市である。

四、染物
本業の時運の進展に伴ふ發達は自然の數であるが、最近著しく進度を高めて居る所は注目すべき所である。

五、莫大小
メリヤス工業も近年順調な發達を辿りつゝあり將來大いに期待されて居る。元來本道は半歳を寒氣に包まれて居る地方であるから、防寒用具の需要頗る多く、此點は素より府縣の比ではない。然し原料を府縣に仰ぐ關係上、兎角メリヤス工業は其の發展を脅かされ勝ちに推移し、今日猶ほ六十六萬圓の生産で、本道需要の多くは府縣よりの供給に俟たねばならぬ状態である。故にこれを喰ひ止めて自ら自足の域に達することは、到底近い將來に望まれない。現在製品の主なるものは、手袋を第一とし、靴下・シャツ及ズボン下等で、高尚な製品は未だ見られぬ。その主産地は小樽・札幌の兩市で、これに亞ぐは函館市である。

六、擦絲
麻及綿の兩者あり、麻擦糸は帝國製麻株式會社札幌支店工場の生産に係り、綿

の、此事は實に我國民間に於ける製鋼並造兵器の嚆矢である、而して其の工場は之を本道室蘭の地に下し明治四十三年末工事竣成し翌年一月から營業を開始するに至つた。業務は逐年隆昌に趨き、殊に歐洲大戰の勃發に際しては激増した軍用器具の需要に應じ一大躍進をなし而も餘勢猶ほ綽々たるものがあつた。然し其後戰亂の終熄と財界不振の影響を受け事業の縮小と職工淘汰の餘儀なき實態に轉じ従つて今日に於ては往時の盛況は之を見られない。けれども常時使用織工の數は一十六百名に達し輪西工場の煉鐵の業と相俟つて、兵器の製造を其の主とし、鐵道用車輛及機械並農工業用機械器具等精巧な極めたものを製出して居る。

二、造船
本道に於ける造船の業は其創立古いが明治廿九年函館船渠株式會社の設立によつて斯業發展の一新機軸となり歐洲大戰の勃發に際しては海運界の異數の盛況に連れて大小の造船所簇立されたが戦局終熄の結果は財界の反動に會ひ深刻に斯業

擦糸は函館製網船具株式會社の生産で、何れも相當多量の生産を擧げてゐる。

金屬工業

概況
本道に於ける金屬工業は、金屬精鍊及材料品製造・鑄物・鑄物以外の金屬製品・鍍金製品製造等であるが、昭和四年の主要製造高は左の通りである。

Table with 2 columns: Year (昭和四年), Quantity (數量), Price (價額). Rows include various metal products like steel, iron, and copper.

鋼所輪西工場唯一の經營に係るもので、最近五箇年の製造高は左の如くである。
大正十四年 四、九五五、三二〇、〇〇〇圓
昭和元年 四、〇〇九、八六六
同二年 九、二〇三
同三年 五、二八〇、五〇八
同四年 四、六五五、六八八
同五年 四、九四九、九九五
同六年 四、九四九、九九五
同七年 四、九四九、九九五
同八年 四、九四九、九九五
同九年 四、九四九、九九五
同十年 四、九四九、九九五
同十一年 四、九四九、九九五
同十二年 四、九四九、九九五
同十三年 四、九四九、九九五
同十四年 四、九四九、九九五
同十五年 四、九四九、九九五
同十六年 四、九四九、九九五
同十七年 四、九四九、九九五
同十八年 四、九四九、九九五
同十九年 四、九四九、九九五
同二十年 四、九四九、九九五

鐵鑄等を使用してゐるが、其の多くは道産の褐鐵鑄を以て製鉄されつゝある。

機械工業

本道に於ける機械工業は、多種多様に涉り茲に個々の列擧は到底出來得ないが、其の代表的なものは、鐵工(兵器)・造船・製罐の三である。然し鑄物・原動機・農業用具機械の製造は忘れてはならぬものである。

Table with 2 columns: Year (昭和四年), Quantity (數量), Price (價額). Rows include various mechanical products like steam engines, agricultural machinery, and medical equipment.

一、鐵工(兵器)
兵器の製造は株式會社日本製鋼所室蘭工場の一手に懸る。
株式會社日本製鋼所室蘭工場
同所は明治廿九年北海道炭礦汽船株式會社が時運の趨勢に鑑み、資金の一部を割き、製鋼、製鐵の事業に投資する計畫を樹て多數我國に軍艦及兵器の供給をして來た英國アームストロング及びビツカースの兩社と協同し、資本金一千五百萬圓で本邦に斯業を開始することに於て明治四十年七月倫敦に於て契約を締結し同年十一月東京に創立總會を開き其設立を見ても

の沈衰を強ひ淘汰される數も多く、今日に於ては僅かに二十有餘の造船所があるに過ぎない。而も其大部分は漁船で規模大でなく、只茲に特筆に足るものは函館船渠株式會社のみである。同會社は資本金四百萬圓を擁し、普通船舶の製造に止まらず大汽船の修理補全の上に實に力強い存在で而も本道有數の大工場としての誇の一つである。

三、製罐業

海産罐詰業の發達を見たものであるが、之と密接不離の關係に在る罐類の製造は大正四年以降の事に屬し其以前に於ては罐類は道外よりの供給に俟たねばならぬ實狀にあつた。而し歐洲大戰に際しては海外に於ける物資の缺乏と相俟つて罐詰の需要は大に増大し、之に伴ふ製罐の業亦一進展を爲すの機運に會ひ、殊に特産蟹、鮭、鱈罐詰は歐米に確乎不動の商權を把握するに至り、其生産は逐年増加の一路を辿り、加ふるに北洋漁業の進出と工船の勃興は、必然に罐類製造の發展を促し大正十年から小樽市に北海製罐倉庫株式會社(現在資本金百萬圓)の設立を見るに至つた。同社は其規模廣大で生産能力の豊かなこと眞に東洋に冠たるもので大正四年四月本邦最初の大規模な製罐株式會社として設立した函館市の日本製罐株式會社(現在資本金五十萬圓)と共に製罐高亦逐年

増加し、昭和五年に於ては一億五千三百萬圓の多きに及び將來益々盛大に赴くであらう。尤も本道に於ける製罐工場は十五ヶ所あるが、茲に記録の二大會社工場を除いては他は概ね規模狭小で單に自家生産罐詰の需要に充つるに止まり特筆の程度に至つてゐない。兎も角文化の進展に伴ふ生活程度の向上は罐詰の需要を必然に増加させるであらうから此罐詰業と密接不離の關係に在る空罐製造業の進展は敢て云ふ迄もなく殊に生産能力の甚大である北海製罐倉庫及日本製罐兩會社の活躍は期待して待つものがある。

向主要材料たる鉄力は英米並に國産品を併用し、一ヶ年消費高は北海製罐のみにも其重量一萬二千噸に及び、最も多きは米國品である。又荷造用木材を主として北海道産にして、其量年額一萬一千石に達してゐる。

Table with 2 columns: Item (消流), Quantity (數量), Price (價額). Rows include various items like Kamatsuka, Kamatsuka, and other products.

これを産数にすれば一億四千五百萬噸となり、六十箱を以て平均一噸とすれば、約三萬噸に達する(札幌運輸課調査)

窯業

本道に於ける窯業は「セメント」、煉瓦及瓦、硝子製品、陶磁器、「コークス」等であるが、「セメント」及硝子器(麥酒罐)の製造を除いては他は概ね規模狭少で未

だ幼稚の域を脱せず産額従つて寡少で今後には俟つ所が多い。左に最近の産額を掲げよう。

主要窯業製品價額累年表

(道廳統計課調査)

Table with columns for Year (昭和四年, 昭和三年, 昭和二年, 昭和元年, 大正十四年), Quantity (數量), Price (價額), and Product Type (セメント, 煉瓦, 瓦, 土管, 硝子製品, 陶磁器, コークス). It shows price trends for various products over time.

沿革

本道セメント窯業は明治二十三年渡島國上磯郡上磯町に北海道セメント株式會社が設立され、これが生産をなしたの端を發し、其後大正四年七月淺野セメント株式會社がこれを合併して、漸次設備の擴張を計るゝ共に燒成法を改め、優良の製品を産出するに至つたのである。

財界不況の影響を受け、土木建築工事の中止、繰延等に因り需要頓に減退し、爲に各社が生産制限を協定するの止むなきに至り、昭和五年に於ては九十五萬樽三百三十二萬五千圓を生産し、其の能力の五割三分餘を生産したつた。

されながら、室蘭・釧路・網走等には殆ど船便によつて居る。又道外へは主に晴天を見計つて工場棧橋より船積さし、函館に於て本船に積替へ、遠く比律賓諸島を首め新潟・伏木・青森・樺太・酒田等に移出され、道内へ輸送されるものよりも遙かに多いが、亦道外より移入するものも亦頗る多い。

新 四八八六 室蘭 五、三九七
青 一九、五五六 網走 五、二〇七
森 一七、二五二 釧路 四、九三二
太 一五、五五二 酒田 八、三二四
伏木 一五、五五二

二、煉瓦及瓦

本道に於ける煉瓦及瓦の製造は歐洲大戰當時に於ては稍活況を呈し、爾後大に進展の趨勢に在つたが、財界の反動に遭つては廢業するもの多く、昭和四年末に於ては煉瓦製造工場七ヶ所にして其の生産額十二萬六千圓大正七年の割五にも充たず、瓦は其の製造工場四ヶ所にして年産額一萬一千餘圓に過ぎない状態である。何れも規模狭少にして記するに足るものなく、誠に萎微として振はぬ有様である。然し本道は港灣の修築、鐵道の敷設、家屋の建築、其他諸般の土木工事を逐つて繁く煉瓦、セメント等の需要は益々増加するので、本業の發達は原料の潤澤、相俟つて將來を期待されて居る尙工業試驗場では目下斯業に對する調査研究を爲すと共に原料の撰擇及技術の指導等鋭意其進展に努めて居り今後相當發達するものと思はれる。但し本道は積雪多量に上る關係上瓦葺にするもの少く従つて需要の實際に照して瓦製造の發達は期待出来ない。

工業

硝子製品工場は昭和四年末現在で、道内各地十二ヶ所の存在を見るが、大日本麥酒株式會社札幌支店工場の「ビール」罐製造の外、小規模なる硝子屑を原料とする牛乳罐、投薬罐類の製造に過ぎず、從つて本道に於て需要する板硝子及硝子罐の移入は年々百萬圓を超える状況である。要之、優良原料の産出が無い爲で、將來の發達は今の所多く期待できない。

三、硝子製品

本道に於ける陶磁器製造は優良原料の發見出来なかつたのと技術に欠ける處があつたによつて、其發達程度は實に遅々たるもので、昭和四年末に於ては極く小規模の工場十ヶ所、其の使用職工僅々三十一人にて、産額も三萬圓餘に過ぎない實情である。然し先年工業試驗場を設置以て同場にては、斯業興業の爲め調査研究を重ねつ、あつたが、既に新たな優良原料の發見を爲し範を示して目下當業者に對し、指導獎勵を爲しつ、あるを以て、自給自足の域に達するは之を遠き將來に待たればならぬとしても、相當の

四、陶磁器

五、コークス

本道に於けるコークス製造は、歐洲大戰當時の好況に際し頓に其の進歩を高め一億餘萬斤に對する價額百三十餘萬圓の生産を擧ぐるに至り、其の勢ひ眞に隆々たるものがあつたが、戦後の不振に一頓挫を來し、昭和四年末に於ては比較的小規模なる岩見澤町の大倉炭製造所、夕張町の三菱炭礦附近炭製造所及北海道瓦斯株式會社の札幌・鹽谷の兩工場に於て、副産物的の製造であるのみで、其産額も八千七百三十噸に對する十九萬餘圓程度に止まる憐れな状態である。然し本道は氣候の關係上燃料として本品の需要決して尠きものにあらず且原料たる石炭は豊富なるを以て、一旦斯界に好況を萌せば其の發展は疑ない。

六、化學工業

本道に於ける化學工業の主なるものは製紙、製藥、護謨、肥料、油脂類(魚蠟及蠟燭を含む)及石鹼の製造並取卸薄荷等である。之等の内、其經營の規模最も大で設備

亦完全し多額の生産を擧げて居るものには先づ第一に指を製紙業に屈せねばならぬ。玉子、富士の兩製紙工場は即ち其代表のものである。之に亞ぐは護謨工業で、本業は最近實に顯著な發達を遂げ府縣先進の地を凌駕する趨勢である。第三は人造肥料で函館に大日本人造肥料株式會社の工場があり、室蘭には日本製鋼所輪西工場の副産的硫酸安母尼亞の生産があつて、此の兩者は即ち本道人造肥料界の代表的なものである。尙ほ本道には特に大書せねばならぬものに取卸薄荷がある。世間既に周知の如く本道は薄荷の特産地で其の生産高は全世界生産の約六割を占めて居るのである然し惜しい事には未だ本道には精製工場がなく薄荷栽培地方の農家に於て副業的に薄荷草を蒸溜して取卸薄荷と爲すのみである。而して右の外製薬、油脂類及石鹼の製

最近五箇年本道洋紙並バルブ製造高一覽

(道廳統計課調査)

Table with columns for year (昭和三元, 昭和二元, 昭和元年), quantity, price, and total value for various paper products like printing paper, packaging paper, and pulp.

備考 昭和五年調査は札幌鐵道局運輸課調査による。

く、従つて年々多數の生産をなして居る左に最近に於ける年産能力を示す。(單位 封度)

Table showing production capacity for various paper mills including 王子製紙株式会社, 苦小牧工場, 富士製紙株式会社, 金山工場, 釧路工場, and 池田工場.

昭和四年洋紙並バルブ製造高工場別一覽

(道廳統計課調査)

Table with columns for factory name (工場名), employee count (職工), printing paper (印刷紙), packaging paper (包装紙), and pulp (碎木バルブ), including sub-sections for chemical pulp (化學バルブ).

向洋紙製品の主なるものは新聞紙、模造紙、ハトロン紙、紡績包紙、蠶座紙、ロール紙等であるが、就中新開紙は總生産の九割を占めて居る。消流 本道の洋紙生産價額は二千九百萬餘圓を示し、我國洋紙總生産高の三割餘を占め、殊に新聞紙は前記の如く、本道洋紙中其の九割を占め、而も我國新聞紙總生産高の七割五分に當つて居る。又最近はその支那にも印刷紙として多量の輸出を爲しつゝあるが兎角支那は懸案事情に絡まれて輸出の上にも變化の甚しいものがある。然し事態が安定して其の文化が開發され國民教育の普及を見るに於ては四億の人口に對する子弟の教科書のみにも驚く數に上るであらうから、それを我國に仰ぐさせば其の中心は本道であるから將來同地向けの輸出の相當の數

に達する事は云ふ迄もない。それに印刷紙の需要は文化の向上と共に増大するものであるを以て其の使命彌々重大なりと謂はねばならぬ。次にその發達状況を見るに、洋紙に於ては苦小牧よりは本輪西へ、江別よりは主として手宮へ、又新富士よりは濱釧路へ輸送される。又バルブハ池田發のもの大部分釧路港より京濱・大阪等に仕向られ、金山發のものは殆ど江別へ輸送されてゐる。又江別發のものは新富士へ、新富士發のものは釧路又江別へ送られてゐる。その主なる仕向地を見るに、僅かに札幌・小樽等の道内消費地を除く外、殆ど京濱・阪神・名古屋等に移出されてゐる既に述べたる如く、苦小牧と江別工場よりは室蘭港より、釧路・池田工場よりは

釧路港を経へ移出され、鐵道連絡船によるものは極めて少い。今室蘭・釧路の兩港より移出されたものを、主なる仕向先別にすれば左の如くである(昭和四年、札幌鐵道局運輸課調査)

Table showing shipping directions from various ports (室蘭港, 仕向先) to destinations like 大 阪, 東 京, 神 戸, 横 濱, etc.

過ぎぬ。
半紙及濾返し紙 本道に於けるロ
ル半紙の製造は富士製紙株式會社釧路工
場の唯一手に懸り大正十五年よりこれが
製紙を開始した。製造開始より、昭和四
年迄四箇年間の製紙高は左の通りである
大正一五 六、〇四六、四三九 一、九九、三三圓
昭和 二 七、四八、三六六 二、三〇四、二五
同 三 七、五〇、五二八 二、一五、三九
同 四 三、三〇、一七四 二、〇八、七〇
次に濾返し紙の製造は逐年其進展を示
し昭和四年中に於ては五十四萬三千五百
圓の生産を擧げた。其の製紙工場は、函
館の北日本製紙株式會社、函館製紙合資

最近五箇年護謄製品製造状況 (道廳統計課調査)

年次	製造場數	職工數	靴及其他履物		其他	
			數量	價額	數量	價額
大正一四	一〇	五八	二、二四、二四五	一、五〇、六六〇	二、二七、八五〇	二、八三、〇〇七
昭和元	二	七四	二、七三、二三四	一、〇九、七三三	二、八三、〇〇七	二、八八、九三三
同 二	三	一、一九九	二、六九、三三四	一、〇九、七三三	二、八三、〇〇七	二、八八、九三三
同 三	三	一、一九九	二、六九、三三四	一、〇九、七三三	二、八三、〇〇七	二、八八、九三三
同 四	三	一、二二七	一、六八、〇三三	一、六八、〇三三	二、六九、三三四	二、六九、三三四
主産地	小樽市を第一とし、函館、札幌の兩市之に亞ぐ。即ち昭和四年の状況は左の通りである。		函館市 四八、三三五	〇・一七	〇・一七	〇・一七
市別	價額	本道總價額に對する割合	小樽市 一、三五、五〇〇	〇・四六	〇・四六	〇・四六

會社、小樽の北海製紙株式會社及び札幌の藤井製紙所の四がある。
三、護謄製品
概況 本道に於ける護謄工業は、大正八年小樽市に設立された北海護謄工業合資會社に依りて其の先鞭を付けられ、茲に始めて組織立つた護謄製品の生産を見るに至つたものであるが、其の發達は斯業の起原が極めて淺いにも不拘實に長足の進歩を示し、今昭和四年の統計に依りて之を見るに其の製作工場十六、之れが使用職工數千二百七十七人にして、生産總額は二百六十二萬圓に上り、爾後彌々増産の趨勢に在る。

四、人造肥料

生産 本道に於ける農業の經營は年々所謂掠奪農業の域を脱して合理的の經營に向つて進んで居るに共に耕地面積の擴張に依りては多收を望む爲の手段として肥料の消費は逐年増加の傾向にある。元來本道は魚肥の生産巨額に上るものであるが素より地質の關係で他肥料の需要も多く植物質の大豆油粕の如きは滿洲よりの輸入に依りて其の需要を満足して居る。然し礦物質肥料たる過磷酸石灰及硫酸安母尼亞は本道に於て生産され又動物質調合肥料の生産も相當に多く之等は克く及

本道肥料の需給關係を圓滑ならしめて居る。而して本道に於ける人造肥料の製造は明治三十九年に始まり其後幾多の消長を経て今日に至り昭和四年の生産高百九十二萬四千餘圓を示してゐる。

最近五箇年人造肥料生産高表 (道廳統計課調査)

年次	生産高	
大正十四年	一、一八六、五七〇	
昭和元年	九八四、八三三	
同 二年	一、九九、六六九	
同 三年	二、三〇、四六六	
同 四年	一、九四、五八	
昭和四年製造高	人造肥料の昭和四年本道に於ける製造高は左表の通りである (道廳統計課調査)	
種別	數量	價額
動物質	一、六〇三、四六九	一、五九、一七〇圓
植物質	一〇、〇〇〇	二、四三、七四〇
礦物質	六、七、九三〇	六、八、七五〇
配合肥料	三、四、〇六〇	一、三三、五三三
計	一、六〇三、四六九	一、九四、五八
主産地	右の通り生産額の最も多いのは礦物質肥料で、此の礦物質肥料の内過磷酸石灰は百一萬餘圓にて大日本人造肥料株式會社函館工場の一手生産に係り硫酸安母尼亞は三十一萬餘圓にして日本製鋼所輪西工場の生産に係るものである。此の外動物質、植物質及配合肥料等を含し、六十萬餘圓の生産あり、其の製造工	

場は概して規模狭少にして機械的生産の工業的價値は極めて少い。兎も角本道人造肥料界を代表するものは過磷酸石灰を製造する大日本人造肥料株式會社と、硫酸安母尼亞を製造する日本製鋼所輪西工場の兩者である。

五、取卸薄荷

生産 薄荷草の栽培については既に農業の欄に於て記した通りであるが、この薄荷草を乾燥した後、これを蒸溜する薄荷分を得る。これを取卸薄荷又は薄荷原油と稱する。更にこれを水と鹽とによる冷却装置により、油状質と結晶質とに分離する。前者は即ち薄荷油で後者は薄荷糖である。而してこの取卸薄荷の生産高は左の通りである。

取卸薄荷數量及價額 (札幌鐵道局運輸課發表)

年次	數量	價額
昭和元年	四三、六八斤	二、四九七、一四〇圓
同 二年	五四、三〇八	二、八四一、二八五
同 三年	五二、四五〇	三、五三、〇五〇
同 四年	七〇、二一八	三、二七四、三三二
同 五年	七三、四四六	二、六四三、五八四
主産地	この生産高は薄荷高と一致し總生産高の九割餘は網走支廳管内に於て生産される。けれども未だ本道には精製工場の見られるべきものがなく、工業的價値の豊かな薄荷に對して唯農家が茹取つた薄荷草を蒸溜して、腦分と油分とを分離せぬ取卸薄荷となすのみである。而	

もこれが全くの副業的生産である。
消費 薄荷はもと單に漬涼劑其他主として藥劑の用に供せられたが、最近化學工業の勃興に伴ひ藥品は勿論、化粧品工業品・飲食品等其用途頗る廣汎となつた。即ち醫藥用藥品・仁丹・寶丹・メンソレータム・オゾ等の藥劑、清涼飲料・製菓、調味着香等の食品より商磨・石鹼の日用品に至る迄殆ど之を用ひざるものなき有様となつた。

本邦産薄荷は初め國內に於ける醫藥用として其需要を充たすに止まつてゐたが明治十三年、四年には既に輸出を見十七八年頃からこれが栽培が世人の注意を惹く様になり、本道に於ては明治十八年に種根を移入され、其後同廿五年上川郡永山村に種苗を移入し、後北見地方を始め二三箇所種苗を送つて漸く増殖の機運に向ひ今日に至つたのである。明治廿六年米國コロンブス大博覽會に出品以來世界的商品として認められ、加之漸次世界文化の向上と共に其用途が頗る廣汎となり、内外共に需要増加を來してゐる。而して日本に於ては多くの製菓の本場たる富山を初め名古屋・大阪方面の製菓會社及び東京を中心とする各種の大製菓會社或は製菓會社に相當な數量が消費されてゐるが、これ等の消費量は生産額の五分から一割程度の六・七萬斤に過ぎないと言はれ、多くは輸出されてゐる。

仕向地 本道産薄荷は悉く取卸油として、其多くは所謂本邦の輸出市場たる阪神・横濱地方に仕向けられ、更に精製して薄荷油となし、歐米諸國を始めとして世界各國に輸出されてゐるが、昭和五年中に於ける本道より移出されたる取卸薄荷の仕向先を府縣別にすれば左の如くである。(札幌鐵道局運輸課發表)

仕向地	噸數
兵庫	三三、一三三
廣島	三三、六〇四
神奈川	二、九八八
大阪	五、七六〇
計	一〇五、八六八

工業藥品 現在本道に於ける工業藥品としては、沃度・壓縮酸素・酒精・硫酸・硫酸礬土・ナフタリン・鹽化加里・ベンゾール・クレオソート等を挙げ得るが、獨立的工業的價値のあるものは殆ど無いと云つてもよい。それに昭和四年の生産總額は九十七萬圓を示して居る。云へ個々の生産額は僅少のものである。兎に角本道に於ける工業藥品の製造は爾後の發展に俟たねばならないが、其の進度は豫測に難い。

六、工業藥品及賣藥

主として沃度及鹽化加里) 六百萬圓に垂とするの盛況を示したものであるが、其の後財界の反動に頓挫を來し、昭和四年に於ては沃度五十一萬三千餘圓、沃度加里一萬餘圓、計五十二萬餘圓で到底往時の盛況は之を見られない。

等々は、日本製鋼所輸西工場に於ける副産物的生産で、最近の事に屬し、酒精は帶廣町の北海道製糖株式會社に於て糖蜜を原料として此れ亦最近生産せられるに至つたものであるが、將來は甜菜製糖の増産と共に彌々増加するの疑のない所である。硫酸礬土は株式會社末次商會苦小牧工場の生産に係り、酸素は合資會社三省社小樽製油所及函館酸素株式會社の兩者に於て製造せられてゐる。

賣藥 この製造は札幌にコルンエキ・ス・フスゲンを製造してゐる三星藥品株式會社工場唯一あるのみである。

七、其他の化學工業品

石鹼 昭和四年現在の製造所は七ヶ所、其の内洗濯用のもの土萬四千圓で約五割を占め、粉末石鹼十萬四千圓で之に亞ぎた。化粧用のものは極めて少い。是等の生産化は、本道の全需用を充つて居る。尤も本道産のものも一部分は東化各縣及樺太方面に移出されはして居るか、其の數は微々たるものである。現在主なる石鹼製造業者は札幌市の羽鳥千駕惠(粉末石鹼)、小樽市の西村石鹼製所及旭川市の北星石鹼株式會社である。

肝油 鱈は本道重要漁獲物の一つであり従て肝油の生産餘力は多分である。殊に本道生産の薬用肝油は全國の需要に對して絶對的優地位に在る。蠟燭は二ヶ所あつて、昭和四年生産高十六萬餘圓である。製品は日本型及西洋型の兩

者あり、其の生産率は殆ど同様である。工場規模の大なるものは小樽の杉江蠟燭工場である。

製材及木製品工業

一、概況 今猶ほ二十四億萬石の材積を蓄藏する

本道は、毎年多量の各種優良用材を製出して居り、木材を原料とする製業亦大に發展の趨勢に在る。殊にベニヤ板及ベニヤドア並家具類の製作は、技巧の進歩、體裁の優美、質の堅牢等相俟て其の需要を彌が上にも増大せしめつゝ、あり本道に於ける誇の一ともなつて居る。

最近三箇年製材生産高一覽

(道廳林務課調査)

工場種別	昭和三年		昭和二年		昭和元年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
建築紙材	三三	二、二八〇、六七七	二二	一、五二一、二七三	二〇	一、六三九、〇八九
函材	三三	四三、二九八、五〇八	四三	四九八、二九七	四〇	四八、八五五
下駄及下駄材	四	二、二八八、五八八	三	一、七四四、四四三	三	一、九〇九、七二〇
家具及器具材	一六	五八六、二二九	一五	七六、九〇五	一五	八八八、七四三
柱	一六	九、一〇〇	一五	一〇、五、六六九	一五	一、一八八、九二四
枳	一六	六、七二〇	一五	七、〇五〇	一五	一、一八八、九二四
ベニヤ	一六	一、三三〇、九六三	一五	一、一七五、九八一	一五	一、三五四、三八七
經木	九	一、三三〇、九六三	九	一、一七五、九八一	九	一、三五四、三八七
鉛筆	一四	一、四五六、一五七	一四	一、五七一、六八七	一四	一、三〇八、二九五
枕	一四	一、四五六、一五七	一四	一、五七一、六八七	一四	一、三〇八、二九五
船材	五	一〇、〇四三、八七七	五	七、〇四八、五八	五	七、〇四八、五八
船	五	一〇、〇四三、八七七	五	七、〇四八、五八	五	七、〇四八、五八
總計	一〇一	一〇、〇四三、八七七	九七	一〇、〇四三、八七七	九七	一〇、〇四三、八七七

年次	昭和十四年	昭和十三年	昭和十二年	昭和十一年	昭和十年
曲輪	二七	一六	一五	一六	一五
木管	一六	一六	一五	一六	一五
燐寸軸	一六	一六	一五	一六	一五
椀材	一六	一六	一五	一六	一五
車輪	一六	一六	一五	一六	一五
農具類	一六	一六	一五	一六	一五
割箸	一六	一六	一五	一六	一五
計	八二,三九五	一一,四三五	六,〇〇〇	一九,七〇〇	二七,〇〇〇

最近五箇年木製品生産高一覽 (道廳統計課調査)

年次	昭和十四年	昭和十三年	昭和十二年	昭和十一年	昭和十年
製場數	二,一八六	二,三三五	二,三三五	二,三三五	二,三三五
履物(素地)	九三,七六六	七九,七六六	九〇,五五七	九〇,五五七	九〇,五五七
挽物	七五,八八八	九〇,五五七	九〇,五五七	九〇,五五七	九〇,五五七
曲物	一六七,〇三〇	二〇七,九五五	二〇七,九五五	二〇七,九五五	二〇七,九五五
指物	三,八三三	四,〇六六	四,〇六六	四,〇六六	四,〇六六
箱物	一一〇,五五七	一一〇,五五七	一一〇,五五七	一一〇,五五七	一一〇,五五七
類	一,一〇五	一,一〇五	一,一〇五	一,一〇五	一,一〇五
桶樽類	八五三,三〇三	一,七二五,五六六	一,七二五,五六六	一,七二五,五六六	一,七二五,五六六
木箸	一,一〇五	一,一〇五	一,一〇五	一,一〇五	一,一〇五
計	七,六八〇,五三三	八,九三〇,四九九	八,九三〇,四九九	八,九三〇,四九九	八,九三〇,四九九

二、ベニヤ板(合板)
 本道に於けるベニヤ板の製造工場は、現在二ヶ所あるが、其の一は規模狭小にして生産亦寥寥たるもので記述に値せぬが、十勝止苦の合資会社新田ベニヤ製造工場は、東洋に於ける新業中最も進歩せる設備と最大の能力を有するもので、本道に於ける代表的工場として誇りの一である。
 其のベニヤ板は獨特の耐水、耐熱性膠

著劑を以て合板したものであるから氣候の變化に依つて彎曲・龜裂・收縮・膨脹の變形等の憂なく、而も體裁優美にして、其の質堅牢なれば、永久の使用に耐へ、建築用に家具用に將又商店窓飾に陳列棚に、文化の向上と相俟つて彌々其の需要を増大しつゝある。
 昭和三年に於ては道外への移出高八十三萬餘圓、輸出高一萬三千餘圓に達した

三、薄板經木・鉛筆板
 薄板經木の昭和五年に於ける生産は百十四萬圓にしてベニヤ板用に、包装用に將又折箱用に其の需要を年々高めて居る。昭和三年末經木製材工場及西川經木工場遠輕町の飛彈物産株式會社ムクイ工場、西興部村の小倉經木工場等である。鉛筆板材 昭和三年生産高は二十六萬餘圓にして未だ以て多いは云ひ得ないが、原料は豊富であり、需要關係の如

何によつては、相當進展するは疑ひの無い所である。代表工場としては旭川市の山下鉛筆工場であり、之に亞いで留邊業町の塚原木工場がある。
 四、木製品
 木製品は指物・箱類・桶樽類・履物・挽物(糖櫃細工)・曲物・木箸等にして、其の産額合して八百五十八萬圓(昭和四年)に達し、優良原料の豊富と相俟つて爾後彌々進展の趨勢に在る。殊に木工家具は、古き頃より家内の作業として營まれ札幌・函館の兩市を中心に逐年順調なる發達を遂げ、當業者の眞摯なる研究に依

る技巧の進歩は實に顯著なるものがある
印刷製本業
 概況 文化の向上が齎す必然の趨勢で、近年新業の發達は實に顯著なるものがある。然し製本等に就ては中央の夫れに壓されて未だ見るべきものないを感ずるが、印刷業は既に其の技巧を極め凡ゆる需要に應じて充分の満足を得て居る。尤も新業の如きは、日進月歩く新時代の傾向を承け入れて、時々の歩みに遅れぬ様努めねばならぬのであるから、其の進展に目覺しいものがあるは當然であらう。

は精巧を極めたもの等の製出は餘りに見られず、其の多くは雜誌類で、實際の發達はどうしても今後に俟たねばならぬ状態にある。
食料品工業
 一、概況
 本道に於ける食料品工業は之を醸造、製粉、製糖、製菓、罐詰、乳肉製品、製水、清涼飲料製造及製麵の九に分類して見るを便宜とする。
 本道開發の當初に於ては日用食料品の大部分は之を道外よりの供給に俟たねばならなかつたが天與の資源に恵まれて居る本道は漸次拓殖の進展に伴ひ農産、水産等の自然的食用品は生産増大と共に加工生産の業亦大いに其の發展を促され就中、ビール、清酒、小麦粉、澱粉、砂糖(ビート糖)、罐詰(蟹、鮭、鱈)、バター、煉乳等の加工食品に至つては其量は勿論品質に於ても府縣産品乃至外國産品に對抗し寧ろ優秀の地位を占むるに至り年々多量の移輸出をして居る。殊にビート糖は本道の特産品で將來我國砂糖の需給關係に重要な使命を有し蟹、鮭、鱈の罐詰亦本道に於ける特産品として米國を始め歐洲各國に於て絶大の賞讃と歡迎を受け又バターは本邦總生産高の約七割を占め、其質は既に市場に定評があつて今後生産増大を相俟て本邦に於ける外來品を完全に驅逐し以て道産バターの獨壇場

最近三箇年製高一覽 (道廳調査)

區分	昭和十三年	昭和十二年	昭和十一年
活版印刷業	三三	二〇,〇三	二〇,〇三
其他印刷業	二二	八六	八六
製本業	五,八五五,四三三	五,八五五,四三三	五,八五五,四三三
計	五,八五五,四三三	五,八五五,四三三	五,八五五,四三三

印刷業は既述の如く、其の發達隆々たるものにして、現在印刷工場一二〇、職工數二千百六十人、うち社會の本鐸を以て任ずる新聞經營は大小三十餘あり、中でも北海ケイムス、小樽新聞は其の代用的新聞で、發行部數は營業政策上秘密にされて居るが、其の名は全國

に知れ涉つて居る。而して一般印刷業について、敢て叙述する迄もなく、精細緻密のものは素より、色刷濃淡一として能はざるなく、豊かな技巧は新時代の要求する趣向を遺憾なく満足せしめつゝ、ある製本業 製本業は概して振はぬ感がある。現在のそれは裝幀の優麗なもの或

素より本道の全需用を充て得ない。従つて年々府縣から五、六萬石程度の移入を爲して其の足りないを補つて居る。而して原料たる大豆及小麦は他に類の無い丈の優良道産品があるのに今日猶ほ此の狀勢に在るものは一面財界不況の餘映であらうが、幾分は氣候の關係もあり、又小麦供給も味増同様の状態にないことも云はれない。然し之で道産醬油の醸造が行詰まり、發展餘勢に乏しいと云ふのは決してない。斯業の將來は其發展する素質を多分に有して居る。漸次拓殖の進展と共に伸びて行くに違ひない。

主産地 各道に到る處で醸造されてゐるが、昭和四年醸造高に於いて見るに、總生産高八萬四千二百八石の内、二割一分餘は小樽市に於て産じ、旭川市の一割六分餘、札幌市の一割四分餘之に次ぐ。

品質 尙品質に就いては、原料が優良品であるのと、醸造技術の向上に就いて鋭意當業間に於て研究されて居るのと、數々の博覽會及共進會に出展して賞を得て居り且日本醸造協會主催の全國酒類醬油品評會に於ても一等二等の入賞は今初まつたことでは無い。此點から考へても道産醬油の品質の優れて居る事は頷かれない。

今次に昭和六年九月第七回北海道酒類醬油品評會に於ける醬油受賞者を掲げる

【優等賞】 △星丸 義印小樽市株式會社
丸 石橋三郎商店 第三工場 △菱丸 吉

一號旭川市堀川太郎治△龜甲ノザキ五
號同野崎小三郎△龜甲別四號同下村正
之助△第一三號河内郡廣町宮本醸造
合資會社△星丸 啓印小樽市株式會社
丸 石橋三郎商店第一工場△チガイ
ヤマ八函館市笠川治助△山旭六號旭川
市北日本醸造株式會社
△龜甲ノザキ二號同野崎小三郎△星丸
英印小樽市株式會社△石橋三郎商店
第三工場△龜甲ノザキ一號旭川市野
崎小三郎△丸ノ口號札幌市江別町丸
岩田合名會社△龜甲マルゴ一號札幌
手稻村合名會社△松井商店△龜甲一號
雨龍郡深川町株式會社△龜甲直三號
直六號札幌市佐藤貞太郎△龜甲三號
同同△龜甲丸ノ井七號旭川市今井醸造
株式會社△菱丸 吉三號同堀川太郎治
龜甲丸ノ紀一號河内郡廣町須正三
丸ノハ號札幌市江別町丸ノ岩田合名會
社△二號札幌市福田甚三郎第二
工場△龜甲マルゴ一號札幌市手稻村合
名會社△松井商店
【中等賞】 △山旭七號旭川市北日本醸造
株式會社△ヤマヅウイチ一號札幌市石
塚達治△丸ノイ號札幌市江別町丸ノ岩
田合名會社△星丸 清印小樽市株式會
社△丸 石橋三郎商店第三工場△龜甲
別一號旭川市下村正之助△龜甲角三
號余市郡市町角三號股醸造株式會社△
巴四號札幌市福田甚三郎第三工場
場△富士山八函館市笠川治助△龜甲丸

井三號旭川市今井醸造株式會社△龜甲
直二號札幌市佐藤貞太郎△龜甲丸ノ紀二
號同野崎小三郎△石橋三郎商店第一
小樽市株式會社丸 啓印小樽市株式會社
三工場△龜甲丸 一號新十津川村
松本源吉△龜甲丸 一號樺戸郡新十津川村
藏△龜甲ノザキ三號旭川市野崎小三郎
△山旭三號同北日本醸造株式會社△イ
印別製一號小樽市板谷商船株式會社△
イ印別製三號同同△山石一號同同△
源藏△シガミ四號河内郡廣町宮本富
次郎△星丸 和印小樽市株式會社丸 石
橋三郎商店第一工場△龜甲上一號空
知郡瀧川町粟井新△龜甲二號同同
田久吉△星丸 一號小樽市今井五郎△
三號札幌市福田甚三郎第二工場
【二等賞】 △龜甲角三號余市郡余市町
角三號股醸造株式會社△龜甲直七號札
幌市佐藤貞太郎△同五號同同△
一三號旭川市下村正之助△ヤマヅウイ
チ二號札幌市石塚達治△龜甲ノザキ四
號旭川市野崎小三郎△山旭七號札幌
市北山喜三郎△イ印別製四號小樽市板
谷商船株式會社△北王三號旭川市川島
清夫△山旭二號同同△北王三號旭川市川島
同同△同同△同同△同同△同同△同同△
廣町愛須正三△菱丸 吉二號旭川市堀川
太郎治△第一一號河内郡廣町宮本富
次郎△キ印五號小樽市キ旭合名會社△
星丸 武印同株式會社丸 石橋三郎
商店第二工場△龜甲丸 一號河内郡

廣町小川ツタ△星丸 惠印小樽市株式
會社△丸 石橋三郎商店第三工場△龜
甲丸 二號河内郡廣町小川ツタ△星
三一號釧路郡鳥取村若原源藏△百玉
號札幌市江別町丸ノ岩合名會社△星丸
◎誠印小樽市株式會社△丸 石橋三郎
商店第一工場△星丸 一號料幌市村岡
勝惠△龜甲三號龍郡深川町株式會
社△山商店

二、麥酒・麥芽

概況 現在本道に於ける麥酒醸造場
は大日本麥酒株式會社經營の札幌支店工
場唯一つて年産四萬石内外を擧げ道内の
消流は勿論樺太にも可成りの移出をして
居る。

而して原料は一切道産大麥を以て之に
充て、其製品、サツホロビールは芳香酸
味其の度に適し一度之を口にすれば忽ち
爽快清楚の氣身に漲ることも云はる、優
秀品で、其名は既に内外に喧傳され賞讃
を博して居る。尙ほ種類は札幌ラガビール
生ビール等があり、ミュンヘンビールは
上戸下戸共に適する所謂獨逸ミュンヘン
式の芳醇のもので、婦人にも飲み易く且
クロビールと共に滋養に富んで居る。
本道生産の「ビール」は叙上の如くで、
其量より見る時は敢て府郡よりの移入を
要しないのであるが、然し「サクラ」キ

リン「ユニオン」等の道外産品が無埋押
しに多量入込む關係上年常業者に於て
或程度の協定を爲し居るとは云へ、どう
しても激烈な競争が免れ得ない。

生産 前記の如く本道には唯一つの
工場があつて年々四萬石内外の醸造をな
し、主として本道・樺太へ供給してゐる
が、近來一般財界不況に基く需要減退に
伴ひ、減次減産の傾向にある。今最近に
於ける産額を示せば左りである。

最近五箇年麥酒醸造高表
(道廳統計課調査)

年次	數量	價額
昭和元年	四、六一五(八四、一四三)	四、八九一、二五〇
同二年	四、三三三(七六、二七五)	四、五八六、六〇〇
同三年	四、七三六(八七、八七九)	五、〇六〇、五八四
同四年	三、九一八(七三、七三六)	四、〇三三、五九八
同五年	三、一四四(五八、一八一)	一、七九三、六六一

備考 昭和五年醸造高及價額並單位一
頭は札幌鐵道局運輸課に於て換算
したものである。

而して右は札幌市所在の大日本麥酒株式
會社札幌支店工場の製出に係るものであ
る

本道に於ける麥酒販賣戰 本道産の
麥酒は本道各地は勿論樺太へも供給して
ゐるが、一方年々少からず本州産の供給
を受けて居り、昭和四年に於て一萬八千
石の移入を見た。即ちこの移入品と道産
品の間に賣捌先の獲得について販賣戰

が演ぜられたのである。
本邦に於ける麥酒會社の主なるものは
大日本麥酒・麒麟麥酒・麥酒鑛泉の三社
で其醸造能力は大日本八十八萬石・キ
ン四十萬石・麥酒鑛泉二十五萬石合計百
五十萬石である。この三社は販賣戰の
不利を避ける爲め、餘程前から販賣戰
を協定してゐた。即ち大正九年頃の一般
好景氣時代には一箱(四打)二十三元
と云ふ高値を協定したのであるが、其後
漸次一般財界の不況と共に賣行不振とな
り、諸物價亦低落した爲めこれに順應し
て十九圓まで引下げた。ところが大正十
五年四月より税制整理の結果一石に付七
圓(一箱に換算して一圓二十錢)引上げの
二十五圓と云ふ麥酒税を課せられるやう
になつたので、これが直ちに消費者に轉
嫁され建値も亦二十圓に引上げた。即ち
この内に九圓の麥酒税が含まれてゐる。
而してこの協定なるものは大體の標準と
も見るべき表向きのものであつて、或は
景品付の販賣をなし、或は割戻し其他種
々の方法で競争的販賣戰が行はれるのが
事實であつて、殊に最近では價格協定聯盟
から脱退するものもあり、各社共賣値の
引下を行ふ外懸賞付きの販賣戰が展開さ
れつゝある。

今小樽市に於ける平均卸値を掲げると
大體左の通りであるが、道内は大抵これ
と同一である。(札幌鐵道局運輸課調査)

○小樽卸値(札幌ビール一箱大瓶四打入につき)

昭和元年	一九〇四圓	同二年	一九〇〇圓
同三年	一八七〇圓	同四年	一八七〇圓
同五年	一八七〇圓		

麥芽は云ふ迄もなく、麥酒醸造の前提にて、原料大麥に濕氣と濕熱を與へ發芽せしめたもので、大日本麥酒株式會社札幌支店麥芽工場に製造に係る。其の生産高は昭和三年に於て二千九百五十餘担にして「サツホロビール」製造高の約五萬石に對する原料の全部を充してゐる。

三、製粉

小麥粉

生産 本道産の小麥粉は、小樽市外高島町に在る日本製粉株式會社小樽支店工場より産出(最近旭川にも多少の産出あり)されるものである。本工場は五階建てに總坪數四百三十五坪ありて、英國製の機械を据付け使用電力三百馬力、職工五十人を使用して、約七百バレル(一晝夜約二千八百袋)の製造能力を有して居る。而して原料小麥は、多くは道産品を使用して居るが、そのみにては全需要を充すに足らないので、不足は之を滿洲・朝鮮・濠洲又は加奈陀等の移輸入品によつて補つてゐる。今最近に於ける生産額を示せば左の如くである。

最近五箇年小麥粉製造高一覽

(札幌鐵道局運輸課調査)

年次	數量	價額圓
昭元	四、二〇〇、八九四(三、五七五)	二、六五一、一元
同二	六、五九〇(一、四七三、九〇〇)	三、七六六、〇〇〇
同三	七、七五〇(七、四八五、八〇〇)	三、一四四、二五六
同四	七、九六四(七、三九〇、〇〇〇)	二、六一、四六四
同五	七、九一四(七、〇七五、〇九二)	五、七六、六六六

移 出 輸 入 出 移

年次	數量	價額圓	數量	價額圓
昭元	二、〇九三、八八八	四、四三三、八九七	二、四四三、四九六	四、九六六、〇〇〇
同二	二、二〇七、九六六	三、三三三、八八八	九、九六〇、九一七	二、〇〇四、〇〇〇
同三	一、六八九、二二二	三、〇〇四、七五九	六、三三〇、二〇二	一、二七三、〇〇〇
同四	一、九七五、五〇〇	三、八五五、六六六	三、〇九六、六六六	一、二七三、〇〇〇
同五	一、九七五、五〇〇	三、八五五、六六六	三、〇九六、六六六	一、二七三、〇〇〇

用途 從來は専ら麵類を製したが、近時其用途は極めて廣汎になつて居る。即ち餛飩・素麵等の麵類は固より、麵麩菓子用・餅・味の素等の原料となり。其他蒲鉾・竹輪等の製造にも用ひられる。

生産 本品は本道饒産の馬鈴薯を以つて製造する本道重要特産品の一にして彼の歐洲大戰當時には物資の缺乏に基く需要に刺戟され、盛に生産されて著大の輸出をなしたのである。ところが戦争終熄後は各國産業の恢復に依り、殆ど輸出の途を絶たれ、生産亦從つて漸次減少したのであるが、猶年産三・四千萬担の巨額に達し、而かも其九割は府縣に移出し又支那・關東洲及滿洲等へ多少の輸出を見てゐる。左に最近の産額を示す。

(札幌鐵道局運輸課調査)

年次	數量	價額圓
昭和元年	五、五七〇、〇九〇	七、二八〇、五五〇圓
同二	四、〇七三、四三九	四、八七二、二〇五
同三	三、三三三、四三〇	四、二四四、五七三
同四	三、九三六、六六六	四、九八八、三三八
同五	三、九三六、六六六	四、九八八、三三八

支應市別 上 支應市別 數 量

網走 三、六八、三三三
後志 三、八〇、九八五
宗谷 三、五〇、八四二
空知 二、二〇、八八五
河内 六、三三、五三三
其他 一、二四、七三三

仕向地 前記の如く現在輸出は殆ど絶たれた如き有様であるが、内國移出は極めて旺盛で産額の八九割は府縣其他へ仕向られてゐる。即ち昭和五年に於ける移出高は左の如く、三萬六千三百三十二担(一担は十二貫匁入二十一袋四)にして、主として大阪・東京・名古屋等に仕向られ、又支那・關東洲及滿洲へも多少の輸出を見てゐる。尤も海外には本道直輸出よりも阪神・横濱等より輸出されるものは多い様である。左に主なる仕向地を府縣別に掲ぐ(札幌鐵道局運輸課調査)

朝鮮 一、一五二 臺灣 一、七三三
其他 三、四三三 計 三、〇六三

備考 輸出は其他に含み、其數約三百担である。

用途 馬鈴薯澱粉は俗に片栗粉と稱へ本道では多く食用に供せられてゐる。又餛飩の製造や製菓の原料とされるものも多く、蒲鉾を製するにも用ひられ、糊の原料ともなり其他種々の用途に供せらるる。

生産 斯の如くにして、大正十一年に至り、道廳に於ても糖業獎勵に關する一課を設け、原料たる甜菜耕作の指導をなすと共に生産者には補助金を交付して耕作の改善と糖業の獎勵に努めたる結果近來に於ける製糖歩留は十五乃至十六パーセントの成績を挙げ、甜菜糖業の先進國たる獨逸に比するも遜色なき有様なり。昭和五年に於ては四十四萬九千担の生産をあげた。

甜菜製糖並副産物製造成績

(道廳糖務課調査)

年次	會社名	截切量	糖	歩留糖	蜜	アルブ	酒	精	備	考
大正九年	北精	六、一四一、四〇〇斤	四、〇〇七	四、五、八三五	七、三七七	二、二五、五八〇	五、三、九〇〇			
計		六、一四一、四〇〇斤	四、〇〇七	四、五、八三五	七、三七七	二、二五、五八〇	五、三、九〇〇			

昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年	大正十四年	大正十三年	大正十二年	大正十一年	大正十年
北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三	北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三	北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三	北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三	北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三	北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三	北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三	北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三	北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三	北計 糖糖 二九、五五〇、六三三 一三、三二〇、一〇一 三六、八七〇、七三三

而して是等は明治製糖株式会社清水工場及び北海道製糖株式会社の二大工場に於て産出されるものである。

年十月日本甜菜株式会社は資本金一千萬圓を以て工場を北海道十勝國清水村に建

設立、其後大正十二年六月一日明治製糖株式会社に合併し爾後明治製糖株式會社清水工場として經營し今日に至つた同工場最近の事業概況左の通り

一、工場設備
米國式「ダイヤ」會社設計に係る最新式のものにして、「パルプ乾燥場」並に「ステッフエン室」を具備して居る。

製品種別 製造 高
砂糖双目糖 M X 九〇、九三擔
車糖 M K 一〇、〇〇〇擔
MR 三三三擔
MR 印

二、從業員 工場長一名、社員四十七名、現業員(常備者)七十六名。製糖季節現業員百二十名増加する。計平常百二十四名(昭和六年七月廿一日現在)、製糖季節二百四十四名(十月より翌年二月末まで)

四、ビートの栽培状況(農業の欄参照)
北海道製糖株式會社 帶廣驛所在地にあり、大正八年の創立に係る。原料消費年額甜菜一億二千五百萬斤、生産年額砂糖十五萬俵、使用人二百七十名、甜菜作付反別五千四百町歩、工場従業員製糖期約三百人(道廳殖民課發表による) 特質と用途 甜菜糖は世に出て、未だ歲月を多く閱せぬ關係上、其眞價は普及されて居らないが、純白にして水氣なくサラサラとしてゐるので、梅雨期でも濕

三、製品の種別、製造高、用途、仕向地
昭和五年度に於ける実績左の通り、
用 途
氷糖、製菓 道内外及
清涼飲料原料 樺太
一般調味料 同右
調味料及菓子原料 道内を主とす
牛豚馬飼料 道内を主とし
道外、樺太、

六十七萬俵)を要し、現在の北海道生産だけでは約一千萬担(約百六十六萬俵)の不足となるわけであるが、今昭和四年中の移出のみに就て見れば、百五十五萬一千四百九十九担(二萬五千八百五十八俵)の移出超過となつてゐるから、一人當消費は本邦の平均より低率にあるようである。即ち左の通り(札幌運輸課調査)

大阪 七三、二五八、三三六
名古屋 六二〇、三八〇九、四、四九
昭和四年中の清水及工場前(帶廣)發の砂礫は二萬三千五百八八噸にして、其主なる著驛にすれば(同上調査)

室蘭 一、三〇〇、本輪西 四、〇九〇
濱釧路 三三九、平宮 九二〇
秋葉原 六二〇、名古屋 四八〇
大豊橋 四二五、川崎 七五八
工場前驛發(帶廣) 五二四
手宮 三、三五六、札幌 四、八八〇
苗穂 三〇〇

最近五箇年菓子製造高一覽 (道廳統計課調査)

Table showing manufacturing statistics for confectionery from 1920 to 1928. Columns include Year (年次), Manufacturing Quantity (製造場數), and Labor (職工).

に依つても道外消費の極めて少なきを知らるに足るのである。而して札幌・苗穂に到着したるものは、主として煉乳製造用で使用されてゐる。尙副産物たる甜菜粕は、家畜の飼料として有効なるもので、年々一萬五千噸(一噸は三十斤入二十袋)の生産ありて、殆ど八割は道外に移出されてゐる。大半は釧路港を経て東京・大阪・神戸に仕向られてゐる。

五、製菓

生産 本道に於ける菓子製造高は年々増加し、昭和四年に於ては約五百四十萬圓を産した。最近五箇年の製造高は左の通りである。

パン 一、一七、〇〇八 三、一一〇、五九、五七四
水飴 一、五、〇〇〇 一、五、〇〇〇
計 一、六、四、四七一、三三〇、八五一、二〇七、八三〇
而して是等菓子類の製造は概して小規模なる販賣業者の製造に係るものであるが、札幌市の古谷製菓工場は三百名の男女職工を使用する大工場にして、キヤンデー・キャラメル・ビスケット等を其代表製品とし、殊にキヤンデーはフルヤの冠頭語と共に内外に名譽を博してゐる。其他ビスケット類を製造し職工百十二名(昭和四年末現在道廳工場課調査)を使用せる函館菓子製造株式會社、職工八十四名を擁せる函館市の帝國製菓株式會社がある。尙旭豆、昆布豆、札幌豆及五色豆・小豆焼等は其製造する工場の規模小なりとは云へ、何れも本道産優良大豆又は小豆を原料とする名産品で、風味、體裁共によく、其の需要は年々増加し、今日に於ては多量の府縣移出をしてゐる。パンは原料小麦粉の生産多量なること、文化の向上に伴ふ生活様式の變遷と、自然産業の發達を促し、爾後益々發達の趨勢に在る。殊に自家用パンの製造は、最近顯著なる傾向を示してゐる。

六、罐詰

生産 本道に於ける罐詰食料品は、大部分は本道産の海産物を原料とするもので、其の主なるものは蟹・鮭・鱈・

鯨・帆立等である。就中蟹・鮭・鱈は本道重要輸出品として内外に其の名を博し生産亦本道に限られてゐるが如き観がある。又近來蔬菜類の罐詰業も隆盛となりアスパラガス(西洋ウド)の罐詰の如きも歐米に倣ひ其作付と共に、今後これが輸入防遏の使用の下に盛んに製造されんとしてゐる。昭和五年に於ける製造場數は六十一にして、其の産額を示せば左の如くである(札幌鐵道局運輸課調査)

Table of canning statistics for various products like salmon, squid, and vegetables. Columns include Product Type (種類), Quantity (數量), Price (價), and Total Value (額).

Table showing shipping and export statistics for various products from Hokkaido.

七、乳肉製品

畜産製造品の内、發達の特に顯著なものは乳製品にして、これ等純良牛乳を原料としたる牛酪及煉乳の産出は近來顯しく發達し、其の價亦内外に普及せんとして居る。其の製造價額從來四百萬圓乃至六百萬圓臺であつたものが昭和五年に至つて遂に一千萬圓を突破するに至

米の需要殊に多く我國重要輸出品の一で昭和四年に於ける本道輸出額は二百十二萬圓を算してゐる。専ら函館港より積出され英國・濠太刺利・北米合衆國を始とし、佛・白・和等各國に仕向られてゐる。又内國移出は三百八十三萬餘圓にして其移出先は、京濱・阪神地方を主として東北・北陸等各地方に及び、一般生活程度の向上と共に其需要高亦漸増の傾向を有してゐる。左に昭和四年中の移輸出高(内外産共)を示す(札幌運輸課調査)

最近五箇年乳製品生産高一覽

(道廳畜産課調査)

Table with columns for Year (昭和元年-五年), Manufacturing (製造), Butter (煉乳), Powder (粉), Cheese (酪), and Others (その他). Rows show production volume, price, and total value for each category.

生産 牛酪製造は遠く明治五年に其の端を發して居るが、爾來緩漫に漸進の途を辿つたが明治廿七年戰役頃より俄然活氣を呈し、停滯品も一時に消流して遂に需要に對し供給之に伴はない様になり、爾來消長あつたが概して順調の發達を遂げ、就中最近數年來の發展著しく大正十四年の八十萬斤臺より翌昭和元年には百萬斤臺となり、爾來百七十萬斤臺を持續し、同五年には二百八十萬斤を越えるに至つた。尙昭和四年二月以來品質の向上と統一を期する爲め、廳令を以て牛酪検査規則を定め、北海道畜産聯合會をして製品検査を實施せしめたるに、其の成績頗る良好にして、昭和五年の検査數量は二百萬斤餘に達し、消費市場に於て多大の好評を博し、本道牛酪の聲價を一層發揚せしむるに至つた。

生産地 石狩支廳管内最も多く、これに亞ぐは空知・渡島・網走・札幌市・根室の支廳市管内である。昭和四年牛酪生産高主要産地別 (道廳統計課調査) 石狩 四四、二四九斤 空知 三三、三四斤 渡島 二六、三三斤 網走 一九、五〇斤 札幌市 一四、六六斤 根室 一〇、五〇斤 而して代表的工場としては、札幌市に極東煉乳會社・大日本乳製品會社の二工場あり、市外には北海道製酪販賣組合聯合會があるが、就中製酪組合の生産が最も多い。

煉乳及粉乳 現在煉乳及粉乳の製造工場は四ヶ所、其の代表的なものは札幌市の極東煉乳株式會社・大日本乳製品株式會社及空知郡奈井江の森永製菓株式會社奈井江工場(粉乳)である。斯業亦年々の需要増加に 伴つて其の發達著しく、殊に品質の優良は府縣製品の追隨し得る所、將來一層の發達は期して待つべきである。昭和四年煉乳製造高主要産地別 札幌市 三、三四、二〇斤 渡島 二、七八、一〇斤 空知 一、八二、一九斤 (同上 調査) 札幌市 五、五〇斤 空知 二、七、七四斤 牛酪及煉乳移出額と仕向地 是等は、我國生活程度の向上と文化の發達に伴つて、益々需要増加を見ること明かにして、現に本道・樺太は勿論東京及阪神地方の需要多く又遠く朝鮮・臺灣・滿洲へも仕向られてゐる。最近に於ける本道外移出額を示せば概ね左の如くである。札幌運輸課調査

Table showing production volume and price for Butter (煉乳) and Powder (粉乳) from 昭和元年 to 昭和五年. Includes a '備考' (Remarks) section.

八、其他食料品

製氷 本道は氣候寒冷の期間長い爲め、従て天然水の切取り容易なので加工製氷の業は特殊のものを除く外概して振はない。清涼飲料 その主なるものはサイダー・ラムネ等であるが、中でもサイダーの製造は一番多い。昭和四年の製造工場は十七にして、其生産高は九十五萬餘圓を示し、その内サイダー五十一萬圓、ラムネ三十八萬圓で、前者は主として旭川市、函館市、札幌市に於て製造され、後

者は主として小樽市に於て製される。而して是等の製品は殆ど道内に於て消流されるが、多少樺太方面にも移出する。製麵 製品は乾餾及素麵を主とするが、冷麥も多少の生産あり、之等を合して生産九十餘萬圓を算してゐる。然し未だ本道の需要を充し得ず、猶多くの府縣品の供給を仰いでゐる状態である。

昭和五年電氣事業一覽

(札幌通信局調査)

Table with columns for '種別' (Category) and '事業' (Business). Rows include '電力發數者' (Power Generation), '電氣供給兼營業' (Electric Supply and Business), and '資本' (Capital). It details various types of power and supply services and their financial status.

力に依る發電事業の發達を齎して居る。昭和四年末に於ける發電所數は、電氣供給兼營業、自家用施設の開業事業者數は百八十四を算し、今や都市の電化は固より農村電化の實も着々として其の實現に向つて進んでゐる。而して電氣事業經營者の主なるものは北海道電燈株式會社、北海水力電氣株式會社、函館水力電氣株式會社及王子製紙株式會社等で、其の之等が本道拓殖事業に貢獻する所尠くない。次に瓦斯事業に就き見るに、瓦斯は北海道瓦斯株式會社の札幌、函館、鹽谷の三工場の外、室蘭市の日本製鋼室蘭工場の瓦斯發生所があつて、漸次其の利用を喚起しつつあるが、今後の發達に俟つ所が尠くない。左に統計を掲げて、其の狀勢の數的考察に資そう。

欠

年次	製造場數	職工數	數量	價額	支應市別	製造場數	職工數	數量	價額	電氣供給		電車		合計	施設標準	工業
										電力	電燈	車長	車延			
昭和元年	三	三六	四七、〇九三	四、三三三	後志市	一	一八	二〇、一五四	一、八四三	—	—	—	—	一八四	—	—
昭和二年	四	六六	四七、〇九三	四、三三三	後志市	一	一八	二〇、一五四	一、八四三	—	—	—	—	一九	—	—
昭和三年	四	六六	四七、〇九三	四、三三三	後志市	一	一八	二〇、一五四	一、八四三	—	—	—	—	一九	—	—
昭和四年	四	六六	四七、〇九三	四、三三三	後志市	一	一八	二〇、一五四	一、八四三	—	—	—	—	一九	—	—
昭和五年	四	六六	四七、〇九三	四、三三三	後志市	一	一八	二〇、一五四	一、八四三	—	—	—	—	一九	—	—
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

瓦斯事業一覽 (道廳統計課調査)

欠

最近五ヶ年内國商取引趨勢一覽表

(道廳商工課調査)

年次	區分	移出		移入		合計
		外道	内道	外道	内道	
昭和四年	道	3,910,347	4,882,454	4,191,363	3,393,954	8,585,317
昭和三年	道	3,715,236	4,868,868	4,077,800	3,393,954	8,475,758
昭和二年	道	3,797,200	4,451,235	4,331,271	3,900,931	8,232,202
昭和元年	道	3,693,504	4,654,455	4,040,400	3,454,779	7,495,179
大正十四年	道	3,699,999	4,697,212	3,875,512	3,676,433	7,551,945

港別移出

移出入について見るに、由來本道は四面海を繞らし到る所に灣入屈曲多く、天與の良港を抱き其、數大小合せて百四十

有餘に上つてゐる。内、函館、小樽、室蘭、釧路、根室の五港は、内外貿易港として、物資の吞吐旺盛を極め、稚内、留萌、網走、江差、岩内、増毛、壽都の諸

港又本道の主要港となつて居る。左に各港別の移出入額表を掲げん。

主要港別道外移出額表

(道廳商工課調査)

港別	移出		移入	
	昭和四年	昭和三年	昭和四年	昭和三年
函館	1,644,455	1,677,066	2,675,588	2,555,395
小樽	893,936	931,366	1,197,733	1,095,568
室蘭	893,361	893,273	3,693,755	3,094,743
釧路	2,655,033	1,745,133	7,275,510	6,928,589
根室	3,546,339	3,740,661	1,143,701	2,183,342
網走	833,290	656,152	1,030,866	6,171,216
稚内	1,156,259	1,604,491	775,273	6,171,216
留萌	1,266,238	1,266,238	766,187	6,171,216
江差	709,449	1,266,238	260,195	908,593
其他	9,481,000	15,008,342	5,433,818	5,948,649
總計	39,103,477	37,156,336	49,136,333	43,271,339

府縣別移出入
更に府縣別に依る移出入の状況を左表の如く、青森縣は青函連絡船の關

係上移出入共最高額を示し、之に亞ぐは東京、大阪、樺太、神奈川(横濱)富山、兵庫(神戸)、愛知、新潟、福岡、臺灣、

三重、廣島、山口、福井、長崎、朝鮮等に其他各縣共多少の移出入がある。

主要府縣別移出入額表

(道廳商工課調査)

Table with columns for destination (仕向地及被仕向地), year (昭和元年, 大正十三年, 大正十四年), and amount (額). Rows list various prefectures like 青森, 大森, 樺太, etc.

移出 移出品について見よう。移出にあつては、農産品、米、大豆、小豆、豌豆、蠶豆、燕麥、蕎麥、菜種、玉葱、馬鈴薯、林檎、薄荷、除虫菊、海産品、昆布、鹽鮭、鱈、身欠鮭、乾鮭、貝柱、鱈、鱈粕、胴鮭、鱈粕。

移入 移入品について見よう。移入にあつては、林産品、丸太、角材、挽材、下駄、材、ベニヤ板、木炭、鑛産品、石炭、硫黄、工業品、新聞紙、セメント、澱粉、ビール、砂糖(ビート)、バルブ、小麦粉、練乳、バター、罐詰類、米、清酒、焼酎、味噌、醬油、麵類、密柑、煙草、絹織毛織物、衣類及同

製品、右の如く概して本道からは農、水、林鑛産等の自然的生産物を移出して、府縣からは加工製品たる飲食衣類品の移入が多い、乍併本道は天與の富源を蔵して動力の供給亦豊なので、將來一大工業地としての躍進は疑のない所で、従つて工業品の道外移出も漸次増加するは云ふ迄もない。

道外移出入品主要品目別表

(昭和四年中 道廳商工課調査)

Table with columns for item name (品目), quantity (數量), price (價額), and item name (品目). Rows list various goods like 馬豆, 大豆, 小麦, etc.

Table with columns for item name (品目), quantity (數量), price (價額), and item name (品目). Rows list various goods like 内米, 小麦, 食鹽, etc.

密味醬油	一五八・六三二	人造肥料	九・二四・五九九
柑油	一・五八・一三三	丸太	一・一四・〇八三
清酒	三・三三・五二二	板及同	七・一九・九〇石
燒酎	三・三三・五二二	護謨	一〇五・四一五
麥酒	一・六六・七四二	製表	四〇四・五二一
砂糖	一・八〇・六二六	疊及	六・六一・三五九
菓子	二・九七・五二二	蘆	六・六一・三五九
葉子	二・九七・五二二	繩	四・〇〇・五二一
牛皮及馬皮	一・〇九・六六六	石	六・八七・〇一八
綿織物	一・〇九・六六六	鮫	三・三〇・三四五
絹織物	一・〇九・六六六		二・〇八・三三三

備考 以上二表共百萬圓以上のものを掲ぐ。

外國貿易

本道の海外貿易は之を普通貿易と漁業貿易の二者に分け得るもので、函館、小樽、釧路、室蘭、根室の五港に於て行はれて居る、而して普通貿易は海外諸國を

最近數ヶ年本道貿易總額

(單位圓・指數は大正十二年を100とす)
(道廳商工課調査による)

區分	昭和四年		昭和三年		昭和二年		昭和元年		大正十四年		大正十三年	
	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數
輸出	四一〇・六・三〇〇	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二	二五・九七・五三二
輸入	三三・四九六・四〇三	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇	一七・六五・七三〇
合計	六四四・一・七〇三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三	四二・一五二・一三三

易中輸出は八百十八萬四千圓、輸入一千三百十九萬五千圓、其の合計二千四百三十五萬三千圓で、普通、漁業兩貿易の總輸出合計は八千五百八十九萬一千圓の多きに上つた。

漁業貿易

輸指	昭和四年		昭和三年		昭和二年		昭和元年		大正十四年		大正十三年	
	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數	輸出指數	輸入指數
輸出	八・八三・七九三	八・四三・四九八	八・四三・四九八	八・四三・四九八	八・四三・四九八	八・四三・四九八	八・四三・四九八	八・四三・四九八	八・四三・四九八	八・四三・四九八	八・四三・四九八	八・四三・四九八
輸入	一三・一九五・〇〇八	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三	一五・九一八・七五三
合計	二二・三三二・八一	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五	二九・〇三六・五五

港別 本道貿易の概勢は叙上の如くであるが之を各港の貿易額から見れば小樽港が第一で、昭和四年度の輸出入合計は三千二十萬九千圓を示し、之に亞ぐは

函館港の二千五百七十一萬九千圓で、以下室蘭港の四百七十五萬六千圓、釧路港の百五十九萬四千圓、根室港の九十二萬圓(海産物殊に昆布の對支輸出不振に) 茲數ヶ年は連年減少を辿つてゐるの順

である。尙釧路、根室の兩港は、概して輸出に限られ、輸入は極めて少い。左に最近數ヶ年の統計を掲げて、其の推移の狀態を窺ふに資そう。

最近普通貿易價額港別一覽表

(單位圓) (道廳商工課調査)

別港	昭和四年		昭和三年		昭和二年		昭和元年		大正十四年		大正十三年	
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
函館	一三・七六一・八一八	一一・九七五・四九六	一三・七六一・八一八	一一・九七五・四九六	一三・七六一・八一八	一一・九七五・四九六	一三・七六一・八一八	一一・九七五・四九六	一三・七六一・八一八	一一・九七五・四九六	一三・七六一・八一八	一一・九七五・四九六
小樽	二・三六四・五七九	七・五七二・八五四	二・三六四・五七九	七・五七二・八五四	二・三六四・五七九	七・五七二・八五四	二・三六四・五七九	七・五七二・八五四	二・三六四・五七九	七・五七二・八五四	二・三六四・五七九	七・五七二・八五四
合計	一五・〇七六・四〇三	一九・五四七・九九二	一五・〇七六・四〇三	一九・五四七・九九二	一五・〇七六・四〇三	一九・五四七・九九二	一五・〇七六・四〇三	一九・五四七・九九二	一五・〇七六・四〇三	一九・五四七・九九二	一五・〇七六・四〇三	一九・五四七・九九二

港室根	輸 輸		輸 輸		輸 輸	
	出合	超計入出	出合	超計入出	出合	超計入出
室根	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇
室路	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇
室室	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇	九七〇・九七〇

別 次に出入の國別について見れば、輸出入共支那を以て第一とし、彼等は超然として最も深い關係に置かれたものであつたが、近年動亂、政變、日貨排斥、銀塊相場暴落、今回の滿洲事變等々の悲觀材料に累されて、兎角輸出に不振を來し、殊に對支輸出の大宗たる海産物不圓滑は、延いて漁村經濟を脅かす結果となり、之れが對策については、最も考慮を拂はれて居る所である。今、昭和四年を基準として輸出入の國別關係を見るに、輸出に於ては、支那を最とし總輸出額の二十一%を占め、之れに亞ぐは英國の一八%、露領亞細亞、北

最近三箇年國別輸出入額 (單位圓) (道廳商工課調査)

國 別	輸 入			輸 出		
	昭和三年	昭和二年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和四年
支那	九、五四、五七	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七
支東	一、八七、四九	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七
支東	一、七二、三二	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七
支東	一、七二、三二	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七	一、一八、四一七

米合衆國の各一〇%、關東州、濠太刺利の各四%にして、以下比律賓諸島、和蘭佛蘭西、新西蘭、加奈陀、白耳義、獨逸等の順である。即ち左表の通り

A. ついで見るに
 輸出品：昆布、鰯、鹽鱈、貝柱、海參、鹽乾鱈。
 農産品：豌豆、鹽元豆、玉葱。
 林産品：鐵道枕木、木材及板。
 工産品：蟹、鮭、鱒の罐詰、印刷料紙。
 鐵産品：石炭。
 農産品：米、小麦、豆槽。

工産品：鐵力、パラフィンワックス
 食鹽、砂糖、穀。
 鐵産品：揮發油、石炭、燐礦石、鐵
 鐵産品：木材
 是等は其の主なるのであるが、次に之等品目の仕向國及被仕向國別の概略を示すと左の通りである。
 A. 輸出品
 海産品：其の大部分は支那に仕向けられ、他は關東州、香港等である。
 豆：英國に於ける需要最も多く、

總輸出額の六、七割を占め、他は北米合衆國及和蘭等に仕向けられる。鹽元豆：北米合衆國を最大の顧客とし總輸出額の六割乃至七割を占めて居る。之に亞ぐは英國にして、又和蘭、佛蘭西、新西蘭、加奈陀、白耳義、獨逸等にも仕向けられて居る。向來及より再輸出するものが尠くない。葱：從來比律賓に仕向けられるものが大部分であつたが、近年支那にも販路を開拓し、上海に仕向けて積出されるものが可なりある。

品目	區分	單位	昭和四年		昭和三年		昭和二年	
			數量	價額	數量	價額	數量	價額
其小豆木學ニ其レ鉄鐵磷石麻毛	包郵 他便柏	擔 立方米	一、七九三 一、三〇八 三〇、六七一 七六、六七三	一、五〇〇 一、四〇〇 三、七五〇 四二、八三九	一、〇六六 一、〇九八 四、六六三 二、二九二	一、〇六六 一、〇九八 四、六六三 二、二九二	一、〇六六 一、〇九八 四、六六三 二、二九二	三、八三五 一、〇三八 七、三三八 二、九五〇
其其他	其其他	擔	一、六六六 一、六六六	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五
其其他	其其他	擔	一、一六五 一、一六五	一、九一六 一、九一六	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五
其其他	其其他	擔	一、四〇二 一、四〇二	一、三四七 一、三四七	一、〇六六 一、〇六六	一、〇六六 一、〇六六	一、〇六六 一、〇六六	一、〇六六 一、〇六六
其其他	其其他	擔	一、一六五 一、一六五	一、九一六 一、九一六	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五
其其他	其其他	擔	一、一六五 一、一六五	一、九一六 一、九一六	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五
其其他	其其他	擔	一、一六五 一、一六五	一、九一六 一、九一六	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五	一、〇七五 一、〇七五

最近三箇年主要輸入品目表

(道廳商工課調査)

品目	區分	單位	昭和四年		昭和三年		昭和二年	
			數量	價額	數量	價額	數量	價額
其繩機小車金金陶其印履衣	計 索 械 隊 屬 屬 製 刷 物 類	擔	六四、七二〇	二、〇八三、三七八	四三、四二三	六、九五七	二、一三五	
其繩機小車金金陶其印履衣	計 索 械 隊 屬 屬 製 刷 物 類	擔	六四、七二〇	二、〇八三、三七八	四三、四二三	六、九五七	二、一三五	
其繩機小車金金陶其印履衣	計 索 械 隊 屬 屬 製 刷 物 類	擔	六四、七二〇	二、〇八三、三七八	四三、四二三	六、九五七	二、一三五	
其繩機小車金金陶其印履衣	計 索 械 隊 屬 屬 製 刷 物 類	擔	六四、七二〇	二、〇八三、三七八	四三、四二三	六、九五七	二、一三五	
其繩機小車金金陶其印履衣	計 索 械 隊 屬 屬 製 刷 物 類	擔	六四、七二〇	二、〇八三、三七八	四三、四二三	六、九五七	二、一三五	
其繩機小車金金陶其印履衣	計 索 械 隊 屬 屬 製 刷 物 類	擔	六四、七二〇	二、〇八三、三七八	四三、四二三	六、九五七	二、一三五	
其繩機小車金金陶其印履衣	計 索 械 隊 屬 屬 製 刷 物 類	擔	六四、七二〇	二、〇八三、三七八	四三、四二三	六、九五七	二、一三五	
其繩機小車金金陶其印履衣	計 索 械 隊 屬 屬 製 刷 物 類	擔	六四、七二〇	二、〇八三、三七八	四三、四二三	六、九五七	二、一三五	

再輸入計品	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年	大正十四年	大正十三年
合計	三、四六、四三	一、七、五三	一、七、五三	一、七、五三	一、七、五三	一、七、五三

漁業貿易
 漁業貿易は前述の如く、努力資本を仕込んで(輸出)遠く勘察加、オコック、尼古來扶斯克、サガレン、沿海州方面に出漁し、其の漁獲物を持ち歸る(輸入)もの

を謂ひ、函館及小樽を其の主要港と爲し、釧路及室蘭は極めて僅少である。就中、函館は本貿易の策源地で、其の大部分を占め、之れの消長は直に同市經濟界に影響する。而して小樽は罐詰殊に蟹罐詰の

輸入を主とする。
 左に最近數ヶ年の統計を掲げ、其の狀勢を明かにしよう。

最近六ヶ年漁業貿易港別價額表 (道廳商工課調査)

別港	昭四	昭三	昭二	昭元	大十四	大十三	
函館	七、七四、六七二 二、六八、七〇九 二、〇四、四二二 四、九七、〇七三	七、五三、五九二 一、四九、四六三 三、一四、六〇三 七、四三、八一五	八、〇四、一五六 二、七九、二六二 二、〇八、四一八 四、七五、一〇六	六、二九、四七六 一、四二、七五〇 二、〇五、九七六 七、九八、〇三二	六、五二、八〇九 一、六九、〇四九 二、三三、四三三 一〇、三六、五二六	八、九四、七二〇 三、〇九、五七〇 四、〇四、二八二 二、三二、八五六	七、五〇、三五〇 一、七〇、三七一 二、四一、七一 九、五〇、四二一
小樽	四三、九二九 四〇、四九九 八三、四二五 四、三三七	九二、三三六 九七、三〇〇 一、八八、六二六 五、九七四	三三、八八〇 八三、六二四 一、六九、四九四 五〇三、七三四	輸出	二、四〇〇	輸出	八、九四、七二〇 三、〇九、五七〇 四、〇四、二八二 二、三二、八五六
室蘭	二、二〇五 七、七六〇 九、九六五 五、五五〇	〇	〇	〇	〇	〇	
釧路	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
根室	〇	〇	〇	〇	〇	六二二	

最近三ヶ年漁業貿易主要輸出入品表 (道廳商工課調査)

品目	區分	昭和四年		昭和三年		昭和二年	
		數量	價額	數量	價額	數量	價額
飲食物	米	一、七六〇	五、四八〇	二、四四九	七〇、六五三	二〇、四三三	五三、三三五
	其他	二六、八〇八	二、〇一三、二〇〇	一九、七九	一、七四七、三六九	一九、五五九	一、九三、六〇三
漁業用品	小漁具	五三三	七五、八九四	四三三	六九四、二五四	五九六	九五、九二五
	繩索	一五、三三八	二五九、九八八	二〇、三六一	二五七、七六四	一三、八八九	四八四、九二二
工業用品	鐵工	六五、七六七	一、九六、九二七	一九、四八九	三三六、六九九	一七、二七一	二九六、二〇三
	機械	六、二九九	一、〇六、〇六〇	三、五三	四四、三五四	一、七、二七一	三三、五七九
再輸出	食糧	一、六〇〇	六、五二〇	一、六〇〇	六、五二〇	一、六〇〇	六、四三〇
	其他	八、一八三、七九三	八、一八三、七九三	五、六〇、二九四	五、六〇、二九四	八、三七八、〇三六	八、三七八、〇三六
合計		一、六四、五五七	一、六四、五五七	八、四三、九一八	八、四三、九一八	八、三七八、〇三六	八、三七八、〇三六

持品	漁獲物	
	魚	鮮
計	其肥筋蟹鱒鮭鱈鱈鱈	鮮
	他料子詰詰詰鮭鮭魚	鱈
合計	一九七、七六一	三三〇、六四二
合計	一、五八四、〇五七	三、二七五
	三、一五八、〇〇八	六、六六六、二六四
合計	一、五八四、〇五七	三、二七五
	三、一五八、〇〇八	六、六六六、二六四
合計	一、五八四、〇五七	三、二七五
	三、一五八、〇〇八	六、六六六、二六四

出入船隻數及噸數 對外取引の股賑に伴つて、内外貿易船の來住漸く繁く、昭和四年に於ては、出港汽船一千二百二十三隻で、其の總噸數二百四十五萬九千八百三十八噸、帆船は四十七隻で、六千八百一噸、其の合計は一千二百七十七隻に對する二百四十六萬五千九百十九噸に上る。而して入港汽船は一千一百十六隻にして其の總噸數二百三十六萬七千四百八十七噸、帆船は三十四隻にして五千二百三十七噸、其の合計は一千四百九十九隻に對する二百三十七萬二千七百九十九噸を示して居る。此の中帆船は、殆ど全部が漁業貿易に従事するもので、其の數も少い。

國籍別 出入船舶を國籍別に見るに外國船が大部分を占め、外國船では英國、露國、諸國の順位で、英國船の活躍が相當目覺しいものがある。港別 之を港別から見ると、函館が第一位で、小樽に次ぎ、室蘭、釧路、根室の順で、函館は漁業貿易の策源地及對支貿易に於て、小樽は北洋材の積取、雜穀類の輸出、原油石油砂糖小麥等の輸入に於て、室蘭は燃料炭の積込、鑛石類の輸入等に於て各々特色を有つてゐる。尚ほ仕向國及被仕向國の別、就航の状態等は、本道輸出入品の種類、本道貿易港の位置、設備、採算等の關係によつて自ら異なる。

概觀 之を概観すれば本道の輸物品は原産的の物産が多く、且つ漁業貿易、北洋材の積取等による出入船が主要なものになつてゐる關係上、年によつて就航状態に相當の變化があるのは免れない。近時上海、大連、浦鹽の直航路も開かれたが、未だ十分な成績を見ない。然し本道の海外取引は京濱、阪神等の仲繼取引を減少して直取引の進出目覺しいものがあり、且道内の産業の發達に伴つて内外貿易船舶の出入も漸次に多くなつて行くことは疑のない所である。左に最近三ヶ年の出入船舶に關する表を掲げる。

最近三ヶ年港別出港船舶表 (道廳發表)

船種	汽船		帆船		合計
	函館	小樽	室蘭	根室	
港別	函館	小樽	室蘭	根室	合計
	計	計	計	計	計
内外船別	内	外	内	外	内
	計	計	計	計	計
隻數	和	昭	和	昭	和
	數	數	數	數	數
噸數	和	昭	和	昭	和
	數	數	數	數	數
合計	和	昭	和	昭	和
	數	數	數	數	數

備考 昭和二、三年は道廳商工要覽、昭和四年は道廳統計書による。

最近三箇年港別入港船舶表 (道廳發表)

船種	港別	昭和二年		昭和三年		昭和四年		昭和五年	
		隻	噸	隻	噸	隻	噸	隻	噸
汽船	函館	1,182	18,125	1,350	20,000	1,500	22,000	1,600	23,000
	小樽	1,000	15,000	1,100	16,000	1,200	17,000	1,300	18,000
帆船	函館	1,000	10,000	1,100	11,000	1,200	12,000	1,300	13,000
	小樽	1,000	10,000	1,100	11,000	1,200	12,000	1,300	13,000
合計		4,182	51,125	4,750	60,000	5,000	61,000	5,200	63,000

合計	九〇八	一、五八四、五五六	九〇八	一、五八四、五五六	八五四	一、三三三、九九九
計外内	二〇三	七八八、一六三	二〇三	七八八、一六三	一五三	五〇〇、九五七
國	二〇三	七八八、一六三	二〇三	七八八、一六三	一五三	五〇〇、九五七
國	一、一〇五	二、三三三、七九九	一、一〇五	二、三三三、七九九	一、〇〇六	一、八三三、〇四一

備考 同前

函館税關管内昭和五年貿易表 (函館税關調査)

品名	一、港別輸出入額(單位千圓)		品名	二、重要輸出品價額表		品名	三、重要輸入品價額表		品名	四、港別輸出入船舶表	
	輸出額	輸入額		品名	價額		品名	價額		出港	入港
函館	21,741	19,002	豆	4,379	4,379	豆	4,379	5,481	5,481	5,481	5,481
小樽	12,773	5,892	木	5,976	5,976	木	5,976	5,976	5,976	5,976	5,976
室蘭	2,559	1,811	鐵	2,740	2,740	鐵	2,740	2,740	2,740	2,740	2,740
根室	1,586	5,809	石	1,682	1,682	石	1,682	1,682	1,682	1,682	1,682
青森	777	2,479	機	976	976	機	976	976	976	976	976
船泊	305	2,479	力	700	700	力	700	700	700	700	700
太田	1,987	2,479	炭	794	794	炭	794	794	794	794	794
真岡	1,987	2,479	石	794	794	石	794	794	794	794	794
計	43,779	43,779	計	43,779	43,779	計	43,779	43,779	計	43,779	43,779

商工業機關

概況

本道産業發展の狀勢頗る旺盛なるものがあると共に、自ら商業の取引は日に頻るが、加へ商高亦年と共に増大して來て居ることは、幾々既述した通りであるが、かく商取引の隆昌は各種商業機關の發達を促すと共に各種實業團體の増加を招くに至つたのである。即ち昭和四年末に於ける是等の狀況を見るに、取引所一、市場一一九、營業倉庫五〇、會社一、九六三を始めとし、實業團體二六二(商工會議

所六、同業組合二〇、酒造組合一七内聯合會一、社團及財團法人三、準則組合一六二、商會六四内聯合會一以上五年七月末現在(調)の盛況を呈してゐる。以下順次是等につき其概況を述べよう。

取引所

本道には唯一の取引所として會員組織小樽取引所がある。本取引所は大正十四年一月より事業を開始し、賣買上場物件は米穀及北海道産の大豆、小豆、青豌豆、中長鶏、長鶏、馬鈴薯澱粉並に北海道及樺太産の鯨縮粕、鯨縮で、開始當時は會員數三十七名、賣買の取引高は各物件共賑盛であつたが、昭和二年以降財界次第

に不振なるに連れ、會員數の減少と共に賣買取引高に於ても漸減し特に雜穀及澱粉、鯨肥料の取引は近時極めて不振を辿りつ、あるが、獨り米穀は本道米に對する内地産米、朝鮮米其他が採算關係による取引の頻繁を加へて來たのと共に、東北、北海道唯一の取引所を利用する傾向が顯著となり、漸く内外に囑目せられる状態となり、賣買取引高の賑盛を示しつつある。而して現在には會員數十七往年の様な盛況を見ないけれども、其堅實味に於て將又營利を目的とし、會員組織として更に東北以北唯一の清算市場として意義ある存在を示してゐる。

最近三ヶ年清算取引高一覽表

(道廳商工課調査)

年次	銘柄		年次	銘柄	
	數量	價額		數量	價額
昭和二年	米	一、七六四、四〇五	昭和二年	大豆	三、〇〇〇
	價額	一、〇〇〇、〇〇〇		小豆	一、〇〇〇
昭和三年	米	一、五〇三、〇〇〇	昭和三年	大豆	三、〇〇〇
	價額	一、〇〇〇、〇〇〇		小豆	一、〇〇〇
昭和四年	米	二、〇〇六、八〇〇	昭和四年	大豆	三、〇〇〇
	價額	一、〇〇〇、〇〇〇		小豆	一、〇〇〇
計		一、二〇〇、〇〇〇	計		一、〇〇〇、〇〇〇

正米市場

大正十四年以來の懸案であつた旭川正米市場は昭和五年十月十八日に商工省から正式の認可があり同年十一月一日午前十時から旭川市宮下通り十一丁目市場内に於て初賣買を開始し同十一月より市場會議所、組合三者合同で會議所樓上で開場式が舉行された。同市場は同年四月十七日商工省令を以て發布せられた正米市場規則に基き全國に廻つて認可されたもので全國當業者間に於ても之が成行に多大の興味を以て見られてゐる。

元來右市場規則なるものは生産者の利便を基調として設立さるゝもので生産者が之を利用しない時はその眞の機能發揮が之が効果を齎す事は不可能である。時代は今や販賣の合理化を高潮してゐる自己の生産物は第三者の仲介や制肘を受

魚菜卸賣市場地方別分布表

(昭和二年末現在 道廳商工課調査)

市支區別	市支區別	市普通市場		市普通市場		合計
		漁業組合市場	産業組合市場	漁業組合市場	産業組合市場	
石狩	知床	三	三	三	三	六
空知	川内	三	三	三	三	六
後志	山越	三	三	三	三	六
檜山	山越	三	三	三	三	六
膽振	山越	三	三	三	三	六
河	支	三	三	三	三	六
合計		一六	一六	一六	一六	三二
市支區別	市支區別	市普通市場		市普通市場		合計
留萌	浦島	三	三	三	三	
旭川	島川	三	三	三	三	六
小樽	川島	三	三	三	三	六
合計		九	九	九	九	一八
合計		二五	二五	二五	二五	五〇

市場

魚菜卸賣市場 本道魚菜市場の沿革は古い、現在の魚菜卸賣市場は大正十二年八月北海道廳令第百二十六號を以て改正の市場規則に依つて設立したもので、目下開設を許可せられたもの百十九箇所ある。之を經營主體によつて分類する時は、普通市場八十一、漁業組合經營二十三、産業組合經營五、此外市場類の業務を營み市場規則の準用を受けて居るものが、八箇所の機關として完備した衛生的設備の下に其使命を完うする様努めて居る。左に地方別分布を掲ぐ。

- 組合長 福居 清兵衛
副組合長 專務取締役 世木 澤藤三郎
同 野島 民助
評議員 廣瀬 外吉、渡邊 甚三郎、高山 孝次
井上 松次郎、西田 宇吉、今野 富藏
山本 磯吉

組織別
 會社を組織別に分類して見るときは、從前に於ては株式會社が其の首位を占めてゐるが、昭和三年より合資會社が取つて代り、昭和四年末に於ては其數八百八十六を算して、總數の四五%一三を占め之に付いて株式會社は、七百六十一にて總數の三八%に當り、合名會社は遙に下つて三百十二、更に株式合資會社に至つては僅々四あるのみである。
 次に組織別に依る資本状態を見るに、株式會社は二億六千三百二十五萬三千六百八十圓にして、總資本額の八五%七八を占め、之に對し社數に於て株式會社を凌駕せる合資會社は、其の資本額一千九百八十二萬九千九圓にて總資本額の六%四六に過ぎず、合名會社は二千二百十七

最近五ヶ年會社組織別狀況一括表
 (道廳商工課調査)

年次	組織別	社數	資本金	拂込資本	積立金	組織別	社數	資本金	拂込資本	積立金
昭和四年	株式會社	761	2,632,536,000	1,866,820,000	1,740,099,000	株式會社	761	2,632,536,000	1,866,820,000	1,740,099,000
	合資會社	1,963	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000	合資會社	1,963	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000
昭和三年	株式會社	686	2,182,030,000	1,511,520,000	1,511,520,000	株式會社	686	2,182,030,000	1,511,520,000	1,511,520,000
	合資會社	1,519	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000	合資會社	1,519	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000
昭和二年	株式會社	612	1,866,820,000	1,366,820,000	1,366,820,000	株式會社	612	1,866,820,000	1,366,820,000	1,366,820,000
	合資會社	1,234	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000	合資會社	1,234	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000
昭和元年	株式會社	541	1,511,520,000	1,066,820,000	1,066,820,000	株式會社	541	1,511,520,000	1,066,820,000	1,066,820,000
	合資會社	1,063	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000	合資會社	1,063	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000
大正十四年	株式會社	476	1,234,567,000	866,820,000	866,820,000	株式會社	476	1,234,567,000	866,820,000	866,820,000
	合資會社	987	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000	合資會社	987	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000

萬七千八百五圓にして七%二二に當り株式合資會社は百七十五萬圓の〇%五七になつて居る。
 而して今、其の社數と資本金の割合を對比して見るに、株式會社に於ては、其の社數は總數の三八%八二なるに對し資本總額の八五%七八にして、其間隙に

昭和四年末組織別總括表
 (道廳統計課調査)

組織別	社數	同上%	資本金	同上%	拂込資本	積立金
株式會社	761	38.8	2,632,536,000	85.8	1,866,820,000	1,740,099,000
合資會社	1,963	51.2	1,000,000,000	34.2	370,010,740	1,000,000,000
合名會社	32	1.0	1,000,000,000	3.0	1,000,000,000	1,000,000,000
株式會社計	761	38.8	2,632,536,000	85.8	1,866,820,000	1,740,099,000

株式會社に依る資本集中の傾向を物語つて居る。之に反し、合資會社は、社數に於て四五%一三と云ふ最多を占めて居るが資本金は合名會社の七%二二よりも更に下つて六%四六を示して居り、如何にも小額出資の組織が多いことが判然と窺はれる。

昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年	大正十四年
株式會社	761	686	612	541
合資會社	1,963	1,519	1,234	1,063
合名會社	32	32	32	32
株式會社計	761	686	612	541
合資會社計	1,963	1,519	1,234	1,063
合名會社計	32	32	32	32

業態別
 會社の業態を、昭和四年の統計に依て見るに、商業最も多く、其の數九百四十九にして、總數の四八%三を占め、之に次ぐは工業であつて、運輸業、水産業、農業、鐵業順次に相次いでゐる。而し

會社業態別總括表
 (昭和四年末現在 道廳統計課調査)

業態別	社數	同上%	資本金	同上%	拂込資本	積立金
商業	949	48.3	1,866,820,000	85.8	1,366,820,000	1,366,820,000
工業	541	28.0	1,511,520,000	57.7	1,066,820,000	1,066,820,000
運輸業	196	10.5	1,000,000,000	37.7	1,000,000,000	1,000,000,000
水産業	98	5.0	1,000,000,000	37.7	1,000,000,000	1,000,000,000
農業	32	1.7	1,000,000,000	37.7	1,000,000,000	1,000,000,000
鐵業	32	1.7	1,000,000,000	37.7	1,000,000,000	1,000,000,000
運輸業計	1,963	100.0	1,000,000,000	100.0	1,000,000,000	1,000,000,000

て之に對する資本金の状態を見るに、最も多を占むるのは工業であつて、商業に次いでゐる。即ち商業は社數に於て多數を占むるに拘らず其の資本金に於て工業に比して下位にあるは、工業會社が比較的多数の資本を擁するを物語ると共に

反面商會社が概して小資本を擁する單なる販賣を目的とする合資會社が多數あることを示すものである。
 尙左に表を掲げ、是等の事情を明かにしよう。

會社組織別、業態別一覽表
 (昭和四年末現在 道廳統計課調査)

業態別	組織別	社數	資本金	拂込資本	積立金	組織別	社數	資本金	拂込資本	積立金
商業	株式會社	949	1,866,820,000	1,366,820,000	1,366,820,000	株式會社	949	1,866,820,000	1,366,820,000	1,366,820,000
	合資會社	196	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000	合資會社	196	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000
	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
工業	株式會社	541	1,511,520,000	1,066,820,000	1,066,820,000	株式會社	541	1,511,520,000	1,066,820,000	1,066,820,000
	合資會社	196	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000	合資會社	196	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000
	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
運輸業	株式會社	98	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000	株式會社	98	1,000,000,000	370,010,740	1,000,000,000
	合資會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	合資會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
水産業	株式會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	株式會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
	合資會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	合資會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
農業	株式會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	株式會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
	合資會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	合資會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	合名會社	32	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000

運輸業	商業	水産業	工業	礦業	運輸業	商業	水産業	工業	礦業
三二七	一六八	一六八	一六八	一六八	三二七	一六八	一六八	一六八	一六八
一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八
一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八	一六八

資本別
 會社の資本金を、五萬圓未満、五萬圓以上十萬圓未満、十萬圓以上五十萬圓未満、五十萬圓以上百萬圓未満、百萬圓以上五百萬圓未満、五百萬圓以上の六種に分けて之を見るに、最近五箇年間の状況

最近五ヶ年會社資本別趨勢一覽

(道廳統計課調査)

年次	社數	資本金	拂込資本金	積立金	年次	社數	資本金	拂込資本金	積立金
昭和四年	一、三六	一三、〇二一、四四〇	三、〇一〇、一八五	一、〇三六、一三〇	昭和四年	一、三六	一三、〇二一、四四〇	三、〇一〇、一八五	一、〇三六、一三〇
昭和三年	一、一四	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三	昭和三年	一、一四	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三
昭和二年	九三〇	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三	昭和二年	九三〇	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三
昭和元年	八三〇	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三	昭和元年	八三〇	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三
大正十四年	七九四	九、九七〇、七六四	二、四三八、四一〇	九二一、二七七	大正十四年	七九四	九、九七〇、七六四	二、四三八、四一〇	九二一、二七七

年次	社數	資本金	拂込資本金	積立金	年次	社數	資本金	拂込資本金	積立金
昭和四年	一、三六	一三、〇二一、四四〇	三、〇一〇、一八五	一、〇三六、一三〇	昭和四年	一、三六	一三、〇二一、四四〇	三、〇一〇、一八五	一、〇三六、一三〇
昭和三年	一、一四	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三	昭和三年	一、一四	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三
昭和二年	九三〇	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三	昭和二年	九三〇	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三
昭和元年	八三〇	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三	昭和元年	八三〇	一〇、七三三、四九五	二、七〇四、四四六	九〇九、四三三
大正十四年	七九四	九、九七〇、七六四	二、四三八、四一〇	九二一、二七七	大正十四年	七九四	九、九七〇、七六四	二、四三八、四一〇	九二一、二七七

會社の支店
 以上は道内本店會社のみについて記したものであるが、以下支店に就て記そう。従業本道は拓殖事業の促進上、内地資本の移入を奨励したのと一面各種産業の發達に伴って、府縣の有力會社にして、道内各地に支店を設置し、活躍するものが多くなつた。又道内に本店を有する會社も、事業擴張の基礎を固め、各地に支店を設くるもの次第が多くなつて來てゐる。

は道外に本店を有するもの、支店である。而して是等支店を業態別に見るときは商業の二百二十七最も多く、工業の三十六次に次いで居る。更に組織別により見ると、株式會社が二百四十六で、總數の八五%に當り、次位は合名會社の二十である。尙最近中央に本店を有する保險會社の本道進出が、實に顯著な趨勢を示して居る。

株式會社、富士製紙株式會社、大日本麥酒株式會社、淺野セメント株式會社、帝國製麻株式會社、日本製鋼所等があり、銀行では日本銀行を首めとし、安田銀行、三井銀行、三菱銀行、第一銀行、十二銀行及不動、安田の貯蓄銀行等、運輸及倉事に在つては、近海郵船株式會社、國庫通運株式會社、濠澤倉庫株式會社等、礦業では北海道炭礦汽船株式會社があり、水産業には日魯漁業株式會社があり、之等は何れも本道事業界の重鎮で、本道事業の發展に、大なる貢獻を爲して居る。左に昭和四年末現在に於ける業態別及組織別に依る支店數を表示する。

會社支店數業態別及組織別一覽

(昭和四年末現在 道廳商工課調査)

業態別	社數	道内に本店を有するもの、支店	道外に本店を有するもの、支店
株式一合資一合名株式合資	計	株式一合資一合名株式合資	計

酒造組合一覽表

(昭和五年七月末現在)

組合名稱	區分	事務所の位置	設立年月日	工場數	釀造酒造石高年度
札幌市酒造組合	札幌市大通西六丁目	大正三年七月八日	二	一九二五	
函館市酒造組合	函館市東大町	大正三年八月二日	三	一九二五	
小樽市酒造組合	小樽市大町	大正三年八月二日	三	一九二五	
空知郡酒造組合	空知郡岩見澤町	大正三年八月二日	三	一九二五	
空知郡酒造組合	空知郡川上町	大正三年八月二日	三	一九二五	
釧路市酒造組合	釧路市野付町	大正三年八月二日	三	一九二五	
根室市酒造組合	根室市大町	大正三年八月二日	三	一九二五	
旭川市酒造組合	旭川市大町	大正三年八月二日	三	一九二五	
名寄市酒造組合	名寄市大町	大正三年八月二日	三	一九二五	
増毛市酒造組合	増毛市大町	大正三年八月二日	三	一九二五	
宗谷郡酒造組合	宗谷郡大町	大正三年八月二日	三	一九二五	
室蘭市酒造組合	室蘭市大町	大正三年八月二日	三	一九二五	
日高郡酒造組合	日高郡大町	大正三年八月二日	三	一九二五	
北海道酒造組合	札幌市大通西六丁目	大正三年八月二日	三	一九二五	

社團及財團法人
 本道に於ける各種社團及財團で民法第三十四條に於り主務官廳の許可を受けて

名	稱	事務所の位置	設立年月日
社團法人石炭鑛業會	札幌市北三條西二丁目	大正三年七月八日	
社團法人小樽銀行集會所	小樽市南濱町六丁目	大正十四年六月四日	
財團法人日高實業協會	浦河郡浦河町	明治四十一年十二月二十六日	

準備 昭和五年末現在、道廳商工課調査による。

法人格を具ふるものは其數多數に上るが産業關係に屬せるものは左の三である。

準則組名
 産業の發達に伴ひ同業者相倚り共同の利益を増進せんとするは自然の傾向で本道に於ても夙に此の種組合の設立を見て居る。現在同業組合準則により設定せるもの百六十二に達し何れも營業上の弊害を矯正し共同の利益を増進することに努めて居る。

商會
 一般商工業者を網羅せる團體に商工會

講所があり本道に於ても六市に之が設立あるは前述の通りであるが、元來商工會議所は特定の都市にのみ認められるもので其他の小都市に對しては設立困難の事情にあり且從來有して居た實業協會なるものは全くの任意的團體で機能發揮の上には遺憾の點が多かつたに鑑み大正十五年二月告示を以て商工會々則準則が定められ其會則の據るべき所が示された。爾來全道各地に之が設立を呈し現在では六十を超ゆるの盛況を呈し將來益々増加の趨勢にある。乍併告示のみでは其内部統制に於て將又機能發揮の上には充分でない憾があるのを昭和四年六月七日北海道令第五十二號で昭和四年六月七日地方官廳の指導監督を加へ因て以て地方官廳の發展に資するところになつた。地方官廳の發展に資するところになつた。地方官廳の發展に資するところになつた。

度量衡器の檢定成績並販賣一覽

(道廳商工課調査)

年度	種別	檢定		販賣	
		檢定個數	不合格個數	檢定手數料	販賣者數
昭和四年	三、二四四	七、七六	二、一四五	五、四〇三	五〇一
昭和三年	三、五七	七、九三	一、四一	五、二七六	四九三
昭和二年	三、九七	九、三	一、三三	五、八三三	四九三
昭和元年	三、〇三	九、二	一、〇〇	五、八三三	四九三
大正十年	七、七〇	八、〇〇	一、〇〇	五、八三三	四九三

度 量 衡
 度 量 衡 器 の 製 作 及 び 修 復
 本道に於ける製作の業は、量器は木製金屬製の樹皮及び斗概の製作、衡器は木製桿秤の製作である。然し斗概材料の外は、その材料が道内で供給を仰ぐことが出来ないので、工賃の不廉に依り、價格に於て他府縣に對抗することが困難であつた爲、概し

て振はなかつたが、近時從來の手工に依つたものを、逐次機械力に依つて能率の増進を計りつゝあるを以て、漸次發達の域に進むものと思惟せらる。

而して修復法に在つては、札幌に三名小樽に一名、函館に二名の業者があるが拓殖の進捗に伴つて、衡器の使用が漸次頻繁になつて來たので、取締の徹底が加つた。趨勢に在り、殊にメートル法の普及によつて改造修復が益々増加するを以て、今後修復は彌々繁忙を極むるに至るものと見られるのである。而して製作器物、修復器物は一々その檢定を受けるのである。この現象は瞭に技術の進歩を物語るものである。

度 量 衡 器 の 販 賣
 度量衡器の需要は産業の發達、メートル法の普及等に伴つて逐年増加の傾向に在る。

寫眞版
オフセット
アルミ版
石版
活版
木版

印刷

美聲堂印刷所

印刷
株券・小切手・商品券
證券・賞状・地圖

種目
ポスター・包紙・掛紙
チラシ・カタログ・封紙

静岡市
岡町
替目
三丁

振替
東京

(53193)

電話
静岡

(636)

金融

北海道金融事業概況

北海道は現に開拓の道途に在り、其の經濟的實情は今日と雖も尙内國植民地の域を脱しない。従つて、此の地に大いに資本と努力、換言すれば金と人を入れてこれが開發を圖るは、刻下の我が國情に鑑み寧ろ一日を緩ふすべからざる喫緊の時勢である。

就中、資金の充實は急務中の急務であり、之に依つてこそ諸般の事業は興り得べし。且凡百の施設は遂げ得られる譯で、事業勃興發展し、施設整備完成せんか人々は招かずして集まらば、斯くてこそ拓地殖民の大業は容易に進捗せしめ得るのである。

此の意味に於て本道の金融事情は頗る注目すべき處に屬し、其金融政策は拓殖政策の根幹を爲すに斷じて差支へない。言ふ迄も無く現代經濟界の原動力は金融界に在り、現代金融界の中心は銀行である。金融資本は廣く經濟界の活動を左右すべく、銀行及其の活動を中心として金融界の大波は動き、信用組合、無盡會社、質屋等の庶民金融機關は傍系機關として銀行の金融的機能を補充し、國家、公共團體等の資金運用、例へば簡易保險

金融

積立金貸付其他の低利資金貸付は専ら公共的の謂は、公益金融としえ特筆すべきものである。

本道に於ける上記各種金融機關の體系は、先には北海道拓殖銀行の設立に依り、後には歐洲大戰當時に於ける産業經濟界の躍進的發展に促されて著しく整ひ、全道各地に金融機關網が張られ地方的産業の發達、地方經濟界の開發を促進したること尠少で無い。

然し、之を本道拓殖の理想、本道の經濟的價值から言へば、今日に於ける金融機關普及の程度並に其活動振に付ても尙遺憾の點無しとせず、今後の改善に俟つべき事項は幾多存する。是は言へ、其の改善は素より急激には望むべからず、道の内産業經濟の發達に伴ふて或は人為的に或は自然的に行はるべきものであらうが、兎も角、或は資金の充實策に於て、或は金利の低下策に於て、更に又庶民金融の現狀に於て、若し欠陥が存することは覆ふべからざる事實である。

これを如何にして改善するかを論ずるのには本書の任務では無いから之を略さればならぬ。茲に本道金融政策上に欠陥が存することを特記して讀者の注意を促すことは無意味ではあるまい。

由來、本道は其經濟的事情に應じ、各種事業の企劃頗る旺盛に、農工商水産業等各方面の資金需要は、累年駁々乎とし

て遞増しつつある。而して、現在に於ては、不動産、漁業權、工場財團鐵道財團等を抵當とする長期資金は専ら北海道拓殖銀行の供給に俟ち、短期商業資金は、各地普通銀行及拓殖銀行其他が之に應じて居る。

又所謂金融期節は、地方的事情の相異に基き一概には言へないが、鯨漁、遠洋漁業等の着漁仕込資金即ち漁業資金、肥料、薄荷、雜穀等の農業資金、造材資金並に本道の特殊事業資金(製紙、石炭、麥酒、製麻等)などを通じ、大體八九月より翌年四五頃までが繁忙期に屬する。金利は一般に内地府縣に比すれば少く高率ではあるが、これは當然のことで一面から言へば本道の金利が内地に比し稍高位に在るは即ち内地方面からの資金移入を促す所以であつて強ち悲觀すべきでは無い。

今、昭和四年末現在に於ける各種金融機關の狀勢を示せば、左の如くである。

區分	本店數	支店數	出張所數	合計
銀行	二〇	二四	五	四九
無盡會社	四六	—	—	四六
信用組合	四八	—	—	四八
質屋	一、二六二	—	—	一、二六二
計	一、三三六	二四	五	一、三六五

本道の銀行は明治六年三井組が札幌、函館の両支店に於て爲替業務を經營したのに始まり爾來拓殖の進展に伴つて金融

機關の整備を促され着々其の進度を高め、遂に今日の盛況を見るに至つた。即ち昭和四年末に於ける道内銀行店舗數、公

稱資本金、拂込資本金左の通り。

昭和四年末道内銀行一覽表

(道廳商工課調査)

Table with columns for '道内(府縣)本店數', '支店數', '公稱資本金', '拂込資本金', '日本銀行', '普通銀行', '貯蓄銀行' and rows for '昭和四年末', '昭和三年末', '昭和二年末', '昭和元年末', '大正十四年十二月末', '大正十三年十二月末'.

昭和四年末に於ける道内銀行店舗數は本店十、支店百十四(内三十六は道外に本店を有するもの、支店)にして、合計百二十四に及ぶ。之を業務上から分類して見るときは、中央銀行店舗二、特殊銀行店舗二、普通銀行店舗八十七、貯蓄銀行店舗十三である。茲に謂ふ中央銀行とは日本銀行を指稱し、小樽、函館の両市に支店を設置してある。特殊銀行とは北海道拓殖銀行の謂で、明治三十二年三月法律第七十六號を以て公布の北海道拓殖銀行法に基き、本道及樺太の開拓に對する資金の供給を目的として、同年十二月札幌市に之が設立を見、爾來拓殖金融の中心を爲し、現在其の支店を、本道樺太の二十一市町村に設置して、本道開拓の爲め、活躍してゐる。

銀行で、其の店舗數八十八に達し、本道各地に亘り、一般商業資金の源泉を爲してゐる。貯蓄銀行は大正十一年の貯蓄銀行法の大改正以來、内容、業務共に一層の堅實味を帯び、他面貯蓄思想の普及徹底と相俟つて、何れも順調の發達を辿り、庶民銀行として實を擧げつゝある。次に是等の資本金を見るに、その公稱資本金は本店十行に對し、三千三百九十九萬圓なるも、府縣に本店を有する銀行の公稱資本金は本店百十二行に對し、四億七千六百四十六萬七千五百圓にして、行數に於て二行多しは云へ、其間餘りにも甚しい差異がある。之を要するに、本道に支店を設置する府縣本店銀行は、中央銀行たる日本銀行を首め、東都、第一銀行等も稱すべき安田、三井、三菱、第一銀行等の普通銀行及不動、安田の二貯蓄銀行等何

れも大資本を擁する銀行が、其の大部分を占むるが爲である。更に是等の昭和四年末現在高による預金及貸金の状況を見るに(道廳商工課調査)一、道内に本店を有する銀行 區分 預金 貸金 特殊銀行 五、七四、四四圓 一六、一三、五七圓 普通銀行 七、五七、二九圓 一、九八、八五圓 貯蓄銀行 一五、九三、五〇圓 一、五九、〇六圓 計 二五、二六、二〇三圓 二二、七九、三三圓 二、道外(府縣)に本店を有する道内支店 銀行 日本銀行 一〇三、七〇、七六圓 六、一〇、一六六圓 普通銀行 一三、一四、〇九圓 八、〇七、〇五圓 貯蓄銀行 一三、一四、〇九圓 八、〇七、〇五圓 計 二六、九七、八〇一圓 九、一四、二六六圓 (備考)日本銀行の預金及貸金は直接民

間に交渉がないので之を省いた。右の通り道内に本店を有する銀行は、其の計に於て、預金の一億四千五百二十六萬圓に對し、貸金は二億一千七百七十六萬圓にして、貸出金は預金に比し、六千六百四十五圓の超過を示して居る。尤も此の計數を齎すに至れるものは、特殊銀行たる北海道拓殖銀行の年賦定期貸付を含む結果に因る所が多いのは勿論であるが、府縣に本店を有する道内支店銀行の貸金は、六千九百九十二萬九千圓にして其の預金は一億一千六百九十二萬七千圓なるを以て、其の間貸付金は預金に比し四千七百八十萬圓の減少を示し、由んば其の預金及貸金の關係が、前者に比し後者の少きは、普通銀行並貯蓄銀行の性質

より推して當然見るべき結果なりは云へ、其の差甚だ大にして、道内本店銀行の取扱と對照其の趨く所を異にするの現象を呈せるは、注目すべき事柄であつて、是畢竟道外(府縣)本店銀行が本道に支店を設置する反面には資金の吸收が窺はれ成るべく貸出を濫つて其の剩餘資金を中央に集中せんとする傾向の表現である云はればならぬ。要するに本道に於ける金融網の發達は本道の拓殖並産業の發達を促進せしむる上に必要なるは敢て絮説を要せぬが、猶ほ拓殖の道程に在つて資金の需要旺盛なる本道として、此の傾向に對し一考を要する所である。

銀行預金及貸金 昭和四年十二月末現在に於ける預金殘高は、二億六千一百六十四萬四千圓にして、貸金殘高は二億八千八十四萬八千八百八十一圓を算して居る。之を十年前即ち大正七年末現在の預金殘高一億二千九百九十二萬八千七百八十七圓に對比して見るときは兩者共二倍に相當するの増加である。之れ本道が拓殖の進展と産業の興隆に因つて經濟的發展を遂げつつあると、一面道民の勤儉貯蓄思想の加はり來つて居るを物語るものに外ならぬ。今、最近五箇年に於ける各種類別に依る年末現在高を示せば左の如くである。

最近五箇年全道銀行預金殘高 最近數箇年全道銀行預金種別殘高表

(道廳商工課調査)

Table with columns for '年次區分', '定期預金', '當座預金', '特別當座預金', '普通貯蓄', '定期貯蓄', '其', '合計' and rows for '昭和四年十二月末', '昭和三年十二月末', '昭和二年十二月末', '昭和元年十二月末', '大正十四年十二月末', '大正十三年十二月末'.

備考 日本銀行の分を除く。

最近數箇年全道銀行貸金種別殘高表

(道廳商工課調査)

年次區分	證書貸付	手形貸付	當座貸越	荷爲替手形	割引手形	他所割引	合計
昭和四年十二月末	一四、五七二、五五〇	六、〇三二、四九九	一六、五三〇、一四五	八、三五三、四三六	四二、五〇九、三三六	八、七五五、九〇九	二六〇、八八八、八八一
昭和三年十二月末	一四、〇〇五、七六九	六、二九八、五五〇	一五、三八〇、六七三	九、八四七、八一〇	三九、四九八、八四四	九、〇三三、四三三	二六四、〇〇六、〇四九
昭和二年十二月末	一四、九八八、九一九	六、三三三、〇一九	一五、五七四、七九〇	一三、六二二、四四三	三九、三六六、七三〇	一〇、六〇〇、四二二	二六一、〇四六、三三三
昭和元年十二月末	一三、七三三、八〇〇	五、六四〇、六二二	一五、三〇四、五三六	九、九七三、三八二	三六、一五六、九七九	九、七四五、〇二〇	二七九、五〇〇、二八三
大正十四年十二月末	一三、七九三、三三六	四、七三三、二五二	一五、〇四二、三三四	二、九七五、〇九五	三六、九六〇、七〇九	一六、〇五七、八八八	二五七、七三二、五三三
大正十三年十二月末	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一四、二四二、五九二	二、七五六、〇四八	三六、七九四、二七一	一四、三三〇、八四五	二五六、一六二、四六八

備考 日本銀行の分を除く。

預金及貸金月別状況一覽

(昭和四年及三年各月末現在) (道廳商工課調査)

月別	預金	貸金	預金	貸金	預金	貸金
昭和四年	一五、〇九一、五五五	五、五二二、三三三	一四、九八八、九一九	五、三三三、〇一九	一四、〇〇五、七六九	五、〇三二、四九九
昭和三年	一五、〇〇五、七六九	五、三三三、〇一九	一四、九八八、九一九	五、三三三、〇一九	一四、〇〇五、七六九	五、〇三二、四九九
昭和二年	一四、九八八、九一九	五、三三三、〇一九	一四、九八八、九一九	五、三三三、〇一九	一四、〇〇五、七六九	五、〇三二、四九九
昭和元年	一三、七三三、八〇〇	五、六四〇、六二二	一三、七三三、八〇〇	五、六四〇、六二二	一三、七三三、八〇〇	五、六四〇、六二二
大正十四年	一三、七九三、三三六	四、七三三、二五二	一三、七九三、三三六	四、七三三、二五二	一三、七九三、三三六	四、七三三、二五二
大正十三年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正十二年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正十一年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正十年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正九年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正八年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正七年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正六年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正五年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正四年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正三年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正二年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八
大正元年	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八	一三、八二四、八九四	四、三五一、九一八

銀行金利

本道は猶ほ拓地殖民の道程に在つて各種事業資金の需要頻繁を極め免角供給の之に伴はざる憾がある。従つて金利は府縣のそれに對し稍々高率なるは止むを得ない自然の趨勢で殊に其の用途如何によつては甚しい差異を見る状態に在る。乍併近時の中央金融界は財政の不況と低金利策の遂行に伴はれて概して緩慢状態に在り本道亦此の狀態を感受して、普通

貸出に對しては殆んど中央のそれに對比して差異のない様になつて居る。殊に預金利率に就いては中央金融市場の一般趨勢に歩調を合はせ、最近に於ては昭和二年二月九日道内各組合銀行一齊に定期預金五厘(年利)、當座預金一厘(日歩)を引下げ、更に同年十月には定期、五厘、當座一厘を下り、超えて昭和四年二月四日には重ねて、定期五厘、當座一厘の引下げを見、現在各地組合の協定利

率は、概して定期預金年利四分七厘、當座預金日歩三厘、特別當座預金日歩九厘を實施し居るもの、如くである。要するに今後の金利趨勢は、奥地は都市に、都市は中央市場に漸次接近追隨の傾向に在り、勿論時に依つて一高一低は免れまいが現下大勢の趨く所、金利は低下の步調に推移するものと考へられる。左に最近數ヶ年に於ける各種金利の狀態を掲げよう。

最近數箇年各種金利趨勢表

(道廳商工課調査)

地方地形	年次區分	貸金(歩日)		預金(歩日)		
		最高	最低	最高	最低	
地方地形	昭和二年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇
		小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇
		函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇
	昭和三年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇
		小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇
		函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇
	昭和四年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇
		小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇
		函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇
	昭和元年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇
		小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇
		函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇
大正十四年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正十三年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正十二年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正十一年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正十年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正九年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正八年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正七年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正六年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正五年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正四年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正三年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正二年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	
大正元年十二月	札	三〇〇	二〇〇	三〇〇	二〇〇	
	小	四〇〇	三〇〇	四〇〇	三〇〇	
	函	二〇〇	一〇〇	二〇〇	一〇〇	

野付	銀行組合	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年
大正十三年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日	昭和三十二年七月十五日
六分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘
九厘以下	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘	五厘五厘
一錢三厘以下	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘	一錢一厘

金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢
 金融緩漫の一般的情勢

金融事情に適應せしめるため
 金融事情を考察して
 一般的の金利低下に追隨して
 金融事情に適應せしめるため

本道各地組合銀行預金協定利率變遷表

(道廳商工課調査)

組合名	協定利率	定期預金	當座預金	特別當座預金	通知預金	利率改訂事由
小樽組	大正八年四月十五日	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	規約創設當時の協定遊資關係による
札幌組	大正九年三月十五日	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	
旭川組	大正十年二月十五日	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	
室蘭組	大正十一年一月十五日	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	
釧路組	大正十二年一月十五日	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	
函館組	大正十三年二月十五日	五分五厘	五分五厘	五分五厘	五分五厘	

別割引(所當)	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年	昭和三十二年
別割引	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇
別割引	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇
別割引	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇
別割引	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇

右は本道銀行の預金及貸金に對する最高最低の金利であるが更に小樽、函館、札幌、旭川、室蘭、釧路、野付牛各組合銀行の協定に係る預金利率を沿革的に調査せるものを掲げる。即ち、本道では各組合銀行の預金利率を協定したのが大正八年以後で其利率の改訂の狀況は左の如く各組合銀行共概して同一歩調に進入である。

牛組 昭和二 昭和三 昭和三 昭和三 昭和三
合銀 昭和二 昭和三 昭和三 昭和三 昭和三
行 昭和三 昭和三 昭和三 昭和三 昭和三

五五分 五五分 八厘以下 一錢二厘以下 一錢一厘以下 一錢厘以下

金融緩漫の一般的情勢

手形交換

本道に於ける手形交換所は大正二年二月函館に、同年五月小樽に、大正五年五月札幌に、大正八年十月旭川に其設置を見、此外室蘭、釧路の両市及帯廣、野付牛の二町に於ける各組合銀行に於て其申合せに依る交換所を設置して、手形交換の業務をしてゐるが、未だ商法第五百三十四條の二に依る司法大臣の指定を得る運に至つてゐないもので、之が指定を受けて居るものは前記函館、小樽、札幌、旭川の四交換所ばかりである。

昭和三五年道内手形交換概況

而して商取引の繁盛は、逐年交換高の増加を齎し、昭和三五年に於ては、四交換所の取扱高、枚數に於て百二十四萬七千五百四十二枚を示し、此の金額六億八千四百九十萬七千圓を算して居る。之を大正十年の交換手形八十萬二千七百四十六枚に對する交換金額六億三千七百八十一萬九千餘圓なりしに對比するときは、枚數に於て四十四萬四千七百九十六枚、金

額に於て四千七百八萬八千圓の増加である。之れ簡單にして危険少き交換所の利用が年歲高まりつゝあるの趨勢を物語るものにして、爾後の發展彌々急なるは敢て云ふ迄もない。

之に對して金額では函館、札幌、旭川、枚數は函館、旭川、札幌の順となり不況の影響が特に小樽市に如何に甚だしかつたか窺はれる。

最近五箇年手形交換高交換別一覽

(道廳商工課調査但し昭和五年度を除く)

Table with columns for exchange type (小樽, 函館, 旭川, 合計), number of bills, and amount.

Table showing exchange statistics for various years (昭和三, 昭和三, 昭和三, 昭和三, 昭和三) with sub-columns for upper and lower periods.

右表に見る様に上半期は概ね閑散で下半期は繁忙であるのが普通である、これは上半期は所謂仕込時間なのに反し、下半期は農産、海産の收穫集積の時期に會し市場自ら股賑を極めるが爲である。尙昭和二年上半期に於ては彼の未曾有の金融界の恐慌に際會し、支拂猶豫令の實施期間中各交換所に於ては殆んど休業の状態に置かれたので其の取扱高も幾分減少を示し、更に昭和三年に於ては六月全國的

の海員争議に影響された所少くないが、兩者共總體から見るとは、枚數に於ては寧ろ連年に比し逐増し、唯金額に於ては減少を示したのみである。

五千七十四圓、支拂高五億六百五十八萬六千六百八十圓、荷爲替手形に於て取組高一億八千七百三十七萬九千五百七十七圓、他所割引手形及代金取立手形に於て取組高一億五千六百六十三萬二千四百九圓、取立高一億八千八百八十七萬三千六百圓を示して居る。

昭和三年本道各銀行爲替取扱高

(道廳商工課調査)

Table showing exchange rates and amounts for various banks and periods (昭和三, 昭和三, 昭和三).

銀行奉出入金

昭和二年			昭和三十四年			昭和三十九年			昭和三十四年		
上	下	合	上	下	合	上	下	合	上	下	合
1,300,950,421	3,733,333,876	5,034,284,297	2,100,740,453	3,694,703,945	5,795,444,398	721,526,032	1,019,300,329	1,740,826,361	744,736,366	939,879,314	1,684,615,680
2,601,734,317			7,490,148,746			3,281,652,390			7,419,391,030		

次に全道銀行の入金、出金の状況を見
るに、昭和三十四年中に於ては、入金八十八億

最近數箇年銀行總出入金額一覽

(道廳商工課一覽)

年次	入金	出金	合計	年次	入金	出金	合計
昭和三十四年	8,839,646,143	8,840,976,136	17,680,622,279	昭和三十四年	9,386,962,519	9,384,873,828	18,771,836,347
昭和三十二年	9,187,488,044	9,252,844,397	18,440,332,441	昭和三十二年	11,092,278,733	11,091,629,745	22,183,908,478
昭和三十年	8,233,509,947	8,155,832,844	16,389,342,791	昭和三十年	8,733,936,355	8,799,916,728	17,533,853,083

一、道内本店銀行一覽表 (昭和四年末現在)

商號	本店所在地	支店		出張所		公稱	本拂込	設立年月日
		道内	道外	道内	道外			
株式会社北海道拓殖銀行	札幌市大通	1	26	1	1	1	2,500,000,000	明治三三
株式会社函館貯蓄銀行	函館市末広町	1	1	1	1	1	2,500,000,000	明治三二
株式会社北門貯蓄銀行	札幌市南一条	1	1	1	1	1	2,500,000,000	明治二一
株式会社北門貯蓄銀行	札幌市南一条	1	1	1	1	1	2,500,000,000	明治二一
株式会社北海道貯蓄銀行	札幌市南一条	1	1	1	1	1	2,500,000,000	明治二一
株式会社北門貯蓄銀行	札幌市南一条	1	1	1	1	1	2,500,000,000	明治二一
株式会社北門貯蓄銀行	札幌市南一条	1	1	1	1	1	2,500,000,000	明治二一
株式会社北門貯蓄銀行	札幌市南一条	1	1	1	1	1	2,500,000,000	明治二一
株式会社北門貯蓄銀行	札幌市南一条	1	1	1	1	1	2,500,000,000	明治二一

合 計 一〇二九七三三七五三三三九〇〇〇〇 二〇、九六、八七五

二、右本店銀行の支店所在地

銀行名	支店	店所	所在地
北海道拓殖銀行	函館、小樽、旭川、室蘭、釧路、帯広、根室、網走、野付牛、紋別、名寄、稚内、瀧川、苫小牧、岩内、深川、留萌、羽幌、遠軽、富良野、増毛 (道外—東京一、樺太六)		
函館貯蓄銀行	函館、小樽、旭川、札幌市北七條、札幌市苗穂 (道外—樺太一)		
北門貯蓄銀行	札幌市南一条、札幌市末広町、地蔵町、若松町、辨天町、小樽市(堺町、花岡町)西紋、増毛、旭川、積丹、八雲、岩見澤、余市、古平、磯谷、瀧川、士別、名寄		
北海道貯蓄銀行	札幌市南一条、札幌市末広町、地蔵町、若松町、辨天町、小樽市(堺町、花岡町)西紋、増毛、旭川、積丹、八雲、岩見澤、余市、古平、磯谷、瀧川、士別、名寄		
北門貯蓄銀行	札幌市南一条、札幌市末広町、地蔵町、若松町、辨天町、小樽市(堺町、花岡町)西紋、増毛、旭川、積丹、八雲、岩見澤、余市、古平、磯谷、瀧川、士別、名寄		

三、道内に支店を設置する道外本店銀行

銀行名	本店所在地	公本	拂込	道内支店設置場所
東京日本橋區本町替町	東京日本橋區本町替町	60,000,000	7,500,000	小樽、函館、小樽、札幌、室蘭、根室、釧路、帯広、野付牛
東京市麴町區永樂町	東京市麴町區永樂町	150,000,000	9,750,000	小樽、函館、小樽、札幌、室蘭、根室、釧路、帯広、野付牛
東京市日本橋區東葺屋町	東京市日本橋區東葺屋町	100,000,000	6,000,000	小樽、函館、小樽、札幌、室蘭、根室、釧路、帯広、野付牛
東京市日本橋區重洲町	東京市日本橋區重洲町	50,000,000	3,000,000	小樽、函館、小樽、札幌、室蘭、根室、釧路、帯広、野付牛
東京市日本橋區兜町	東京市日本橋區兜町	50,000,000	3,000,000	小樽、函館、小樽、札幌、室蘭、根室、釧路、帯広、野付牛
富山市	富山市	2,000,000	250,000	小樽、函館、小樽、札幌、室蘭、根室、釧路、帯広、野付牛
高岡市	高岡市	2,000,000	250,000	小樽、函館、小樽、札幌、室蘭、根室、釧路、帯広、野付牛
弘前市	弘前市	2,000,000	250,000	小樽、函館、小樽、札幌、室蘭、根室、釧路、帯広、野付牛
富山縣東礪波郡出町	富山縣東礪波郡出町	5,000,000	625,000	小樽、函館、小樽、札幌、室蘭、根室、釧路、帯広、野付牛

北海道無盡株式會社 札幌市南大通西二丁目

100,000

大正三・三・六 大正四・一・三

備考 瀧川無盡は昭和四六年四月小樽無盡へ合併

郵便貯金附振替貯金
勤儉貯蓄の美風を振興し餘資を積ませる事は國民生活の基礎を安定し、進んで將來に活用する生産資金の充實を期する所以であつて、此等の指導誘掖に就ては今日に到る迄幾多の方法が講ぜられて居

る。従つて貯蓄思想は漸次普及徹底するに至り一般銀行預金の増加と共に零細の資を蓄積するに最も便利な郵便貯金も又年を逐ふて増加して來る。殊に大正五年小樽に貯金支局が設置されてからは其發達愈々顯著となり更に昭和二年の金融恐慌に際しては其の安全有利を深く印象付

けられ、進度一層高まつて、昭和四年度末(昭和五年三月末)に於ては預入總人員百六十二萬九百四十七人に對する總貯金額八千六百三十三萬三千二百三十三圓を示し、其預金者一人當五十三圓十二錢となつて居

最近五箇年郵便貯金趨勢表

(札幌選信局調査)

Table showing postal savings trends from 1925 to 1935. Columns include year (大正十四年度 to 昭和四年度), type (新規預入人員, 預金, 入口), and amount. Includes sub-totals for '減' (decrease).

Table showing current year status (在現年度年). Columns include year (昭和四年度), type (預入人員, 人口百人當預入額, 預入金額), and amount. Includes sub-totals for '減' (decrease).

最近五箇年振替貯金狀況一覽表

(各年度末現在) (札幌選信局調査)

Table showing remittance savings status from 1925 to 1935. Columns include year (昭和四年度 to 大正十四年度), type (口數, 金額), and amount. Includes sub-totals for '減' (decrease).

質屋

私營質屋
本道に於ける私營質屋は歐洲大戰の影響に依る物價騰貴に依り一般の利用を増したのに刺戟され、營業者は逐年増加し

だが、後、財界の反動に會ひ鞏固な基礎を持たないもの、淘汰を餘儀なくされ、大正十年を一轉機として漸減した、然るに昭和元年に於ては地方金融機關として道内各地に活動して居た絲屋銀行の破綻並十勝岳の大爆發等、打撃く金融上の悲

觀材料に再び刺戟されて、營業者の急増を見、其數八百六十三に達して未曾有の記録を示し昭和二年度以降に於ては、公益質屋の設置其他農産物の豊作等の影響を受け稍減少の傾向に在る。

最近五箇年質屋數貸高受戻高流高趨勢一覽表

(道廳警務課調査)

Table showing trends in pawnshop numbers, loans, and returns from 1914 to 1934. Columns include year, quality, quantity, amount, and return.

備考 圓位未滿切捨

最近數箇年質屋金利表

(道廳商工課調査)

Table showing pawnshop interest rates from 1914 to 1934. Columns include year, district, average, highest, and lowest rates.

公益質屋 我國現在の經濟施設中、最大の缺陷と目せられるものは細民金融機關の不備ではあるまいか。此缺陷を補ふ手段の一として制定されたのが即ち公益質屋法である。昭和二年三月同法が發布され、同年七月内務省令で公益質屋法施行規則が公布されるに至り、道廳に於ても種々研究の結果、昭和三年度以降三ヶ年間に全道六市二百六十三ヶ町村中百箇市町村に實施を期する爲め根本方針を概して種々施設を急ぎ目的の達成に努めて居る。

信用組合 而して本道に於て昭和二年中に設立認可のもの二町二村、昭和三年度は二市四町、六村、昭和四年度は五月末現在に於て二市一町、都合十九箇所の設立認可を見て居る。然し未だ施設時代に屬し其成果は未知數で爾後の發展に待たねばならない。

資金の道外流出入 拓殖の進展に伴ふ道内諸事情の發達は必然に本道對外間の交渉を深からせ、資金の移動亦頻繁を極め其對外的流出入金は巨額に上つて居る。今、昭和二年に於ける本道對道外(府縣及外國)間の流出入金に就き、道廳商工課の調査せる所を見るに、道外から本道に流入した總金額は六億九千八百八十六萬七千八百八十七圓で本道からの流出金額は八億六百二十二萬八千三百二十三圓

に達し、結局昭和二年に於ては一億一千四百三十六萬四千四百六十六圓の本道資金の道外流出になつて居る。

昭和二年中に於る本道對道外(府縣及外國)の資金流出入に關する調査

Large table showing financial flows between the prefecture and outside (domestic and foreign) in 1922. It is divided into inflows and outflows with various sub-categories like public law, private law, and insurance.

受取海上保険金	一、一〇〇、一七六圓	(三)道内人の道外消費	三八、八二九、四三〇圓
受取傷害保険金	四四二圓	道内人の道外消費	三八、八二九、四三〇圓
受取送付保険金	一、七三九、七三〇圓	(ホ)道内人の道外消費	一九五、一五三、一六六圓
受取代理店費用	四四、〇四〇、二九〇圓	郵便貯蓄金	六一、七四〇、七八六圓
(二)道外人の道内消費	四四、〇四〇、二九〇圓	道外銀行への預金	一〇五、五二九、二一六圓
道外人の道内消費	四四、〇四〇、二九〇圓	道内銀行の道外貸出	二六、六〇五、三一四圓
(ホ)道外人の道内消費	九四、二六四、七四〇圓	(一)道外人の道内放資同	二、〇九七、五八二圓
道外銀行の道内貸出	七二、三五八、五七四圓	勸業銀行年賦金	二七七、〇〇〇圓
道内本店銀行の道外吸	一一、九九三、七六六圓	同業銀行年賦金	三一、六二六圓
道内本店銀行の道外吸	一一、九九三、七六六圓	簡易保険積立金利息	一、三九五、一一〇圓
勸業銀行の貸出	二、七九七、〇〇〇圓	低利資金元利金回収	四一五、一八〇、〇二〇圓
低利銀行の貸出	三、〇四八、八〇〇圓	三、貿易關係	四一五、一八〇、〇二〇圓
簡易保険積立金貸出	三、〇六六、六〇〇圓	貿易關係	三八〇、九三五、〇四八圓
(一)道内人の道外放資回	八二九、八〇二圓	輸移	三四、二四四、九七二圓
公債償還元金	七八五、八九七圓	計	八〇六、二二八、三三三圓
勸業債券償還元金	二九、三〇〇圓		
同上割戻金	一四、六〇五圓		
三、貿易關係	四〇九、五六〇、三九七圓		
輸移	三三〇、四〇一、三四〇圓		
計	二九、一五九、〇五七圓		
	六九一、八六七、八八七圓		

差引流出超過

一一四、三六〇、四四六圓

備考 一、本表は道廳商工課編纂昭和五年十月發行の「北海道の商工要覽」に據る。二、尙本調査に關し「註」として次の通り附記してある。『本調査は、商工課に於ける始めての調査にして、未だ他に之れに類する詳細の數字を調査せられたるものなく、從て彼此參照の便を缺き、完全なりとは素より云ひ得まいが、出來得るだけ精確な資料を蒐集するに努め、以て集計を爲したるものにして若し不足の點あらば、後の繼續調査に依つて漸次完璧を期せむとす。』

種刷

各印

岩崎

印刷所

電話九段3666

東京市神田區今川小路一ノ三

通信

昭和四年度末現在局所數

(札幌逓信局調査)

種別	局一対に對する人口面積		集配局に對する人口面積		電信局に對する人口面積		郵便局に對する人口面積		無線電信局に對する人口面積		公共電話局に對する人口面積		郵便交換所に對する人口面積	
	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積
一等	777	7	777	7										
二等	783	19	783	19										
三等	783	19	783	19										
特等	333	3	333	3										
普通	555	5	555	5										
總計	374	4	374	4										
前年との比較増減	33	3	33	3										
其他の局所	157	2	157	2										

昭和四年度札幌逓信局管内郵便取扱物數等概況

(札幌逓信局調査)

種別	管内郵便局所口數	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積
札幌市	3,853	312,011	7,011	14,433	7,011	14,433	15,733	32,155	15,733	32,155	15,733	32,155	
旭川市	7,011	14,433	29,723	60,455	29,723	60,455	32,155	66,310	32,155	66,310	32,155	66,310	
小樽市	1,513	3,026	12,155	24,310	12,155	24,310	15,733	32,155	15,733	32,155	15,733	32,155	
函館市	1,733	3,466	14,433	28,866	14,433	28,866	15,733	32,155	15,733	32,155	15,733	32,155	
室蘭市	4,723	9,446	38,155	76,310	38,155	76,310	42,310	84,620	42,310	84,620	42,310	84,620	
釧路市	3,466	6,932	28,866	57,732	28,866	57,732	32,155	64,310	32,155	64,310	32,155	64,310	
計	15,255	30,510	243,723	487,446	243,723	487,446	270,155	540,310	270,155	540,310	270,155	540,310	
郡部計	1,911	3,822	30,510	61,020	30,510	61,020	32,155	64,310	32,155	64,310	32,155	64,310	
總計	17,166	34,332	274,233	548,466	274,233	548,466	302,310	604,620	302,310	604,620	302,310	604,620	

種別	便郵小包		便郵常通		電信		電話	
	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積
引受物數	639,903	1,279,806	4,873,636	9,747,272	591,130	1,182,260	2,364,520	4,729,040
前年との比較割合	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11
配達物數	4,873,636	9,747,272	37,473,636	74,947,272	2,364,520	4,729,040	4,729,040	9,458,080
前年との比較割合	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11
著信通信	544,166	1,088,332	4,873,636	9,747,272	591,130	1,182,260	2,364,520	4,729,040
前年との比較割合	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11
電信局所數	591,130	1,182,260	2,364,520	4,729,040	591,130	1,182,260	2,364,520	4,729,040
前年との比較割合	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11
電話加入者	2,364,520	4,729,040	4,729,040	9,458,080	2,364,520	4,729,040	4,729,040	9,458,080
前年との比較割合	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11
内交換	4,729,040	9,458,080	9,458,080	18,916,160	4,729,040	9,458,080	4,729,040	9,458,080
前年との比較割合	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11

保 易 簡	給 恩 金 年			金 貯 替		
	渡 拂			出 拂 込		
	約 契 在 現	約 契 申	約 契 申	割 前 年 比 較	割 前 年 比 較	割 前 年 比 較
人口千人當	人口千人當	人口千人當	人口千人當	人口千人當	人口千人當	人口千人當
前同全國平均	前同全國平均	前同全國平均	前同全國平均	前同全國平均	前同全國平均	前同全國平均
11,577,084	7,364,000	1,699,577	1,044,000	4,041,539	7,606,000	1,850,000
4,012,759	3,354,000	3,841,000	499,000	2,171,400	4,046,866	0,600,000
8,564,325	5,755,000	1,354,000	933,000	1,909,000	3,562,866	2,250,000
3,829,933	2,495,566	5,494,000	1,157,000	2,988,822	5,332,000	0,050,000
3,089,801	1,929,555	4,436,000	1,018,000	4,598,500	7,877,000	1,240,000
4,432,083	1,264,588	5,984,000	922,000	3,499,064	8,923,866	0,350,000
5,649,106	3,994,583	7,097,000	3,036,000	1,467,268	13,883,000	0,400,000
2,712,211	709,748	5,484,000	451,000	46,266,353	23,122,000	0,150,000
2,049,000	809,944	1,884,000	0,311,000	2,009,000	0,633,000	

金 年 便 郵	險 持 受	
	保 一 保 一	
	保 險 件 數	保 險 料 均
譯 內 新 年	保 險 件 數	保 險 料 均
分 割 據 一 據 即 年 新	年 度 末 契	年 度 末 契
據 置 時 置 時 年 契	年 度 末 契	年 度 末 契
年 金 額 數 額 數 額 數 額	年 度 末 契	年 度 末 契
11,577,084	7,364,000	1,699,577
4,012,759	3,354,000	3,841,000
8,564,325	5,755,000	1,354,000
3,829,933	2,495,566	5,494,000
3,089,801	1,929,555	4,436,000
4,432,083	1,264,588	5,984,000
5,649,106	3,994,583	7,097,000
2,712,211	709,748	5,484,000
2,049,000	809,944	1,884,000
1,780,000	1,740,000	1,500,000

日本放送協會北海道支部狀況

聽取許可廢止及現在月表

(日本放送協會北海道支部調査)

聽取者加入概況
昭和五年度に於ける新規加入は八百四十八口にして、此の外無届聽取者の調査

取締の勵行により六百九十四口の正規申込を受理した、尙月別加入並市支廳別聽取者現在數狀況は左の通りである。

月 別	許 可 數	平 均 日 廢 止 數	平 均 日 增 加 數	平 均 日 現 在 數
昭和三年	18,622	50	1,294	15,698
昭和四年	5,506	15	1,189	16,435
昭和五年	5,786	15	1,189	17,624
昭和六年	5,355	15	1,069	17,345
昭和七年	5,355	15	1,069	17,345
昭和八年	5,355	15	1,069	17,345
昭和九年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十一年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十二年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十三年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十四年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十五年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十六年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十七年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十八年	5,355	15	1,069	17,345
昭和十九年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十一年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十二年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十三年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十四年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十五年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十六年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十七年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十八年	5,355	15	1,069	17,345
昭和二十九年	5,355	15	1,069	17,345
昭和三十年	5,355	15	1,069	17,345

、スキー夜話(六・一・一九一・二四)
 山の小屋岡田正夫氏(北大醫學部助教授)、スキー昔噺宮下利三氏(元北大選手)、オールドボイスのスキー高杉榮次郎氏(北大豫科教授)、スキー秘話廣田戸七郎氏(前國際選手)スキー昔噺柄内吉彦氏(北大農學部教授)
 ト、スキー座談會(五・一二・二三) 内容は、スキー初歩者の教導、二、遭難救助に關して、三、スキー材及スキー購入の話、四、スキーテックニツクの専門的研究、五、鐵道當局に對するスキーヤーの意見、六、趣味豊富な經驗談等にして出席者は左の通り
 河合裸石氏(司會者)、廣田戸七郎氏(前國際選手)、高橋次郎氏(小樽高商教授)、高橋昂氏(前國際選手)宮下利三氏(北大前選手)、馬場惟保氏(札鐵旅客係長)、芳賀藤左衛門氏(スキー製作者)、クヌートウオルセン氏
 ナ、夏期法律講座(五・七・二八・八・三〇) 法學博士岡田朝太郎氏
 リ、子供夏期學校(五・七・二〇・一八・一八) 算術若林嘉次郎氏、讀方飯田廣太郎氏
 二、演藝娛樂 菊莖桑門(五・八・八)

澤村宗十郎一座
 ロ、ドラマ「スキー情話」戀を賭る」(六・二・一三) 札幌ラデオドラマ
 三、全國出中繼放送
 イ、追分節(六・一・一一) 高松良助氏
 金森傳七郎氏、鈴木晴月氏外數名
 ロ、アイヌ唄、イヨハイチン(六・三・二九) 野本オツ 解説滿岡伸一氏
 ハ、ラヂオ風景 鯨場情景(六・三・二九) 船頭として半世の經驗を有つ西崎華鶴氏等を中心とした大勢演出、追分節と鯨漁場の磯波と老若の掛聲と波と……の階調的騒音——特異の情景が演出せられた。
 四、實況中繼放送(單獨、有線)
 イ、北大豫科對小樽高商野球戰(五・六・八) 於北大球場
 ロ、聴取者慰安放送演會(五・六・二二) 於公會堂
 ハ、北海タイムス主催全道樺太少年野球大會(五・八・二九) 於中島公園國際場) 參加校廿七、放送所要時間五十四時三十分
 ニ、全道中等學校スキー選手權大會(六・二・一五) 於記念シヤンツエ附近)
 ホ、小樽市加入者招待放送演會(六・三・二八) 於中央座
 ハ、御慶事奉祝記念演藝會(六・三・二九) 於公會堂)

收支計算書 昭和五年四月一日より昭和六年三月三十一日までの收支計算は左の通りになつてゐる。

一、收入之部		金額
取料收入	一七四、四一六、六三〇	金
發刊物收入	二、一七三、三四〇	
預金利息	二〇三、五二〇	
雑收入	一三一、二七〇	
本年度缺損金	九四、五五八、〇九〇	
計	二七一、四八三、八五〇	
二、支出之部		金額
放送費	六一、三七九、一六〇	金
技術費	七〇、四一六、九一〇	
周知費	六、二九九、四一〇	
特殊サービスマニヤ	一五、六二一、〇七〇	
加入費	三一、二八八、八七〇	
事務費	四七、六〇八、一六〇	
札鐵無線中繼試驗費	八六、四七〇、〇〇〇	
國際放送設備費	一〇八、一五〇、〇〇〇	
諸價却金	三七、八九七、四二〇	
計	二七一、四八三、八五〇	
現在役員	昭和六年五月現在式の通り	
理事	大瀧甚太郎	
常務理事	古賀傳吉	
理事	磯野進、大谷岩太郎	
	渡邊熊四郎、金子元三郎	
	久保兵太郎、平出喜三郎	

交通

本道の鐵道概況

線路延長 本道に於ける鐵道の敷設は、幌内炭山の開坑に伴つて其の石炭輸送の爲、明治十三年十一月開拓使にて札幌手宮間二八哩八分の幌内鐵道の建設に創り、昭和六年三月末現在に於ては國有鐵道二千八百七十九分私設鐵道及軌道五百九十九分計三千三百七十七分四厘に達してゐる。而してその敷設の経路は初期の鐵道は何れも鐵産物の搬出を主眼として建設せられ、私設鐵道は大正九年鐵道省補助の外更に拓殖費を以て補助の途を開いて以來頗る之が發達を見たものである。

料當り面積 今本道の鐵道と其の面積との比例を見れば、國有鐵道は面積三十一方呎五分に付き鐵道一呎私設鐵道を加へ二十六方呎七分に付き一呎の割合であつて、之を内地の比例國有鐵道の十九方呎六分に付き鐵道一呎の割合(昭和四年三月末)と比較すれば本道國有鐵道の尙敷設を要するものが尠くないのが知られよう。

昭和四年度本道國有鐵道概況

營業哩及新設線 札幌鐵道局所管本道國有鐵道昭和四年度末營業哩は、一千

六千八百八十八哩二分二千七百十六分五分にして、年度初めの一千六百二哩一分に比し八十六哩一分の増加を示し、これだけ本年度内に新線並既設線の延長を見た譯である。即ち左の通り

昭和四年度中營業開始の新線路 (札幌鐵道局調査)

石北東線 丸瀨布白瀧間 一二哩三分

(一)、收入方面

客	貨
輸送成績 六三九、三三三 一〇、三七八	計 一、二九一、四九三
前年との比較(△減)	〇・〇五二
運輸純收入 一四、五二二、七七一	〇・〇三三
前年との比較(△減)	〇・〇三三

次に本年度に於ける本道經濟界の推移と運輸營業成績を見るに、長期に亘る不況は今年度に入つても依然更なる所なく購買力の減退は企業の萎縮、生産の制限を招き、從て金融は著しく其の流動性を撓められて弾力を減じ、自然物價は漸落の歩調を辿る等前途の不安は一通りではなかつたが、政府は金解禁を目標として公私經濟の緊縮整理に努めて諸般の施設を講じたのと、民間も亦協力して之の助長に努力したのとによつて一時的不況は來たけれども漸次事業界の整理、金利低

落の趨勢を促し、對外貿易の好轉と相俟つて茲に一陽來復國家經濟の順調復歸を望むことが出來た。

翻て本道産物の荷動狀況を一瞥するに水産界の大宗である鱈は、稀に見る凶漁を傳へ從て縮柏製造高の激減となり、加之輸入肥料の激増、化學肥料の壓迫によつて荷動きの緩漫を見るに至つた。青豌豆、其他豆類の輸出は一時小繁を來したが、米の收穫は豫想を裏切つて前年に比べ二十一萬餘石を減じ、而も米價は低落を續け、雜穀類は概して豊作であつたが

相場の下落から商況振はなかつた等が、爲に自然貨車の移動鈍重となつたが、年未に入るに及んで資金調達の關係上相當の荷動を見た。又石炭は本州進出炭並燃料の増加によつて相當の荷動を見た。旅客方面にあつては、臨時列車の運轉によつて鈴蘭採取、海水浴等を誘致し、其の登山、キャンプ等にも宣傳を努めたので右の様な成績を擧げることが出来た。

業務

機關

(昭和五年十二月末日現在) 札幌鐵道局調査 (四〇〇)

Table with 5 columns: 庶務課 (Text, 賠償, 人事), 運輸課 (旅客, 貨物, 配貨, 運轉), 保線課 (技術, 工務, 庶務), 改良課 (車庫, 機車), 工作課 (機車, 機械). Includes 運輸事務所.

Table with 5 columns: 函館, 札幌, 旭川, 室蘭, 稚内. Lists stations and branches like 函館支所, 札幌支所, etc.

Table with 3 columns: 船航課 (船舶, 運航), 經理課 (調査, 購買, 倉庫, 出納, 主計), 電氣課 (電力, 通信). Includes 年度別營業料程表 (札幌鐵道局調査).

Table with 6 columns: 年度別, 局線鐵, 連帶地, 合計, 年度別, 局線鐵, 連帶地, 合計. Shows financial data for various years from 1924 to 1925.

既配付豫算で支辨することになつたので、實質に於て九十萬圓餘の削減を受けた。さうなつた。其後定期賞與金の増、退職手当、貨物集配費、工作補充費等二百七十二萬二千七百八十四圓の増額を愛した。豫算に對し、決算額三千五百五十八萬四千六百八十九圓で差引一萬七千九百十三圓の剩餘を示した。

備考 連帶地方鐵道及軌道の中には樺太鐵道・南樺鐵道を含む。

線路別營業料

名	區	間	料數
函館本線	函館旭川	間	四五一
上磯線	五稜郭	間	七三
瀬川線	國縫	間	三〇六
長輪線	長萬部	間	三〇六
京極線	長安	間	三〇六
幌內線	岩見澤	間	三〇六
歌志内線	砂川	間	三〇六
手宮線	南小樽	間	三〇六
岩内線	小樽	間	三〇六
雨龍線	深川	間	三〇六
室蘭本線	岩見澤	間	三〇六
萬字線	志文	間	三〇六

名	區	間	料數
蘭夕張線	追分夕張	間	四三六
日高線	紅葉山登川	間	三二二
留萌線	苦小牧	間	三二二
根室本線	瀧川	間	三二二
富良野線	下富良野	間	三二二
士幌線	廣上	間	三二二
廣尾線	東釧路	間	三二二

名	區	間	料數
宗谷本線	旭川	間	三二二
北見線	音威子府	間	三二二
名寄本線	名寄	間	三二二
清滑線	見瀧	間	三二二
網走本線	池田	間	三二二
湧別線	野付	間	三二二
相模線	美幌	間	三二二
石北線	遠輕	間	三二二

昭和三十六年度開業線並確定開業線

一、釧網線
川湯札鶴間
開業年月 昭和三十六年九月二十日
東北海道的重要線である東釧路網走間百六十五軒八百三十二米四は八百六十萬八千三百二十四圓の巨費を投じ十年の日子を費して北建に於て鋭急建設中であつた所請釧網線も愈々第七次開通である札鶴、川湯間二十二軒八百十米の開通によつて、昭和三十六年九月二十日全通式を擧げ

二、羽幌線
るに至つた。本線の全通により釧路、網走を初め一市一町五村が完全に結ばれ、釧路北見の兩大國を背景とし北はオホソク海の大油田に面し網走斜里の沃野を控へ、南は弟子屈、標茶、釧路の廣漠たる農牧適地を連れ、その國境一帯は大森林地帯、隨所に埋藏する礦物等沿線に秘められた無限の大豊庫、大景勝地の門扉が開かれた譯で、これを一新紀元として東部北海道は急速な發展を見ることであらう。

三、日高線
昭和三十六年十月二十日現在
鬼鹿古丹別
十五軒三十五米八九
開業年月 昭和三十六年八月十五日
昭和三十二年十月留萌大根を開通し翌三年十月には大根鬼鹿間今回をもつて羽幌線第三次の開通であるが、こゝに延長四十三軒餘を完成し、あます所僅かに十六軒餘しかも最終工區は本春着工以來豫期以上の進工を示しつゝあつて、本線全道の機も、一兩年の間に迫つて居る。今回開通の區間は三ヶ年の日子と總工費百二

十九萬六千六百餘圓を投じたものである本線は天鹽沿岸の開発を目的とするもので、海岸線一帯は北海水産の寶庫と稱せられ苦前羽幌の廣潤な沃野には一望耕地開け又古丹別三毛別等各河川の上流には鬱蒼たる原始林等各産業に天與の資源を有し殖産興業の進展期を待たべく、本線の使命眞に重大なるものがある。

三、兩龍線
幌加内添牛内間
開業年月 昭和三十六年九月十五日
雨龍線は深川停車場を起點として現函館本線から分岐北して朱鞠内に至る線路で専ら石狩國最北部の開発を目的とし大正十年五月から實測に着手して線路選定と共に順次工を起し、同十三年十月深川多度志間第一次開業をなし次で同十五年

四、札沼線
石狩沼田、中徳富間
開業年月 昭和三十六年十月十日
札沼沼田線は石狩川右岸地開發を目的としてあるもので、今回開通の運びに至つた石狩沼田、中徳富間は去る大正十五年二月に着手し石狩沼田、雨龍間は昭和二年二月に又雨龍中徳富間は翌年十月にそれ、線路選定の認可を得、先づ第一工區は昭和二年十月に着工續いて十二月に第二工區を、昭和四年七月に第三工區

五、苫小牧浦河線
佐沼太静内間
開業年月 昭和三十六年十一月の豫定
各着工したが、この區間の線路は石狩川の右岸及びその支流の雨龍川流域で大部分は平坦な沃野を通じ工事は比較的容易で徳富川にかゝる百八十米六〇の鐵橋を初め十三ヶ所の橋梁がありその總延長四百三十九米十七に達してゐる外特に見べき程の建造物はなく鐵道敷設工事としては平凡なものであつた。かくしてこの工區間は着工以來四ヶ年の歳月と百七十一萬餘圓の建設費を投じて十月十日より開業の途に至つたのである。

一、工事中區間

線名	始點	終點	料程
羽幌線	古丹別	苫前	八三
札沼線	桑園	篠路	〇・六
石北線	上越	奥白瀧	九・一

本建内に於ける國有建設線調

(昭和三十六年十月二十日現在)

線名	日高線	末着手區間	調査
羽幌線	苫前	羽幌	八・四
札沼線	添牛田	朱鞠内	一〇・二
石北線	中徳富	篠路	三・四
廣尾線	奥白瀧	廣尾	八・七
日高線	佐沼太静内	日高	三・三
遠別線	下沙	遠別	一七・六
北興濱線	興濱	遠別	三・九
南興濱線	興濱	遠別	三・九
標津線	厚床	遠別	三・七
菱標線	上標	遠別	三・七
音更線	木古内	遠別	三・七
江差線	江差	遠別	三・七

北海道拓殖鐵道補助に關する件(大正九年法律第五六號)發布せられ、北海道拓殖促進の爲必要がある認め、地方鐵道及軌道に對しては、政府は勅令の定めるところに依つて該鐵道營業開始の日から十年を限り北海道拓殖費から補助を爲すことを得と規定し其方法については勅令で地方鐵道又は軌道の毎營業年度に於ける益金が建設費に對し、地方鐵道に在つては

年七分、軌道にあつては年八分の割合に達しない時は其不足額を補給することを得と規定した。後昭和二年にこの法律及勅令は何れも改正され、補助期間營業開始の日から十年を十五年、補助歩合地方鐵道七分及軌道八分は何れも同じく九分と改められた。此の法律の制定は大に地方鐵道の敷設を促し、以後雄別炭礦鐵道、北海道鐵道、十勝鐵道、日高拓殖鐵道、

釧路臨港鐵道、河西鐵道、夕張鐵道、渡島海岸鐵道、膽振鐵道、洞爺湖電氣鐵道等多數の地方鐵道の敷設を見るに至つたのである。苦小牧輕便鐵道及日高鐵道は後に政府に買收せられたことは前記の通りである。之等地方鐵道の總延長は昭和四年六月に於て二六〇哩四分に達した。

累年延長哩數 (道廳道路課調査)

Table with 10 columns: 年別, 延長, 増加歩合, 年別, 延長, 増加歩合, 年別, 延長, 増加歩合, 年別. Rows include years from 大正六年 to 大正二年.

開業線 (昭和四年六月現在)

Table with 6 columns: 地方鐵道業者名, 區, 開業年月日, 哩程, 軌間, 動力. Rows include 美河, 十勝, 北海, 北都, 壽山, 定山.

未開業線 (昭和四年六月現在)

Table with 6 columns: 地方鐵道業者名, 區, 開業年月日, 哩程, 軌間, 動力. Rows include 洞爺, 北海, 膽振, 渡島, 夕張, 釧路, 雄別.

Table with 6 columns: 地方鐵道業者名, 區, 免許年月日, 哩程, 軌間, 動力. Rows include 北海道, 留萌, 長門, 釧路, 天塩, 夕張, 北見, 北都, 釧路, 美路, 北海道.

函館水電株式會社	湯川終點五稜郭間	三、三、一	二、二	電	氣
北海道鐵道株式會社	小樽、黒川、澤町	一、〇、〇	一、〇、〇	電	氣
温根湯温泉軌道株式會社	札小樽、圓山温泉	三、一、三	一、五、九	電	氣

備考 札幌温泉電氣軌道株式會社經營線は昭和七年四月開通、旭川市街電鐵株式會社の分の開通

航路

補助航路 昭和四年四月に至り從來の國費補助航路の中、函館小樽線及函館

瀨棚線を合併し函館小樽線とし、又函館釧路線及函館日高線を併合し函館日勝線と改線された。而して現在補助費は年額二十五萬二千五百圓で、昭和四年度から

昭和六年度迄の三ヶ年繼續とし夫々實施中に在る。之が航路名、使用船名、寄港地名左の通りである。

北海道廳命令航路

(昭和六年三月現在) 道廳道路課調査

○は臨時寄港地を示す

線名	命令期間	區間	船名	總噸數	航海回数	總航海距離	寄港地名	受命者
小樽線	自昭和四年四月一日至昭和七年三月卅一日	函館 小樽	東照丸	六〇〇、一〇	自四月至十月 每月六回	三、四六五、〇〇	江差、熊石、釣掛、瀨棚、壽都、岩内、神惠内、余別、千走、青苗、青森	藤山海運株式會社
函館小樽線	自昭和四年四月一日至昭和七年三月卅一日	函館 小樽	樺太丸	五〇三、一八	自四月至十月 每月六回	一、九七三、三〇	福島、福山、江良町、江差、熊石、久遠、釣掛、太櫓、上ノ國、乙部、蚊柱、相沼内、青森	藤山海運株式會社
函館東郷線	自昭和六年三月一日起至昭和六年三月三十一日	函館 東郷	禮文丸	三五二、〇八	自四月至五月 每月四回	一、二四四、〇〇	小越、鹿野、廣尾、音調津、猿留、大津、青森	金森商船株式會社

線名	命令期間	區間	船名	總噸數	航海回数	總航海距離	寄港地名	受命者
日勝線	同	函館 東郷	龍丸	一七、〇〇	自四月至五月 每月四回	一、二九六、五〇	浦河、樺似、冬島、幌滿、青森	金森商船株式會社
千島網走線	同	函館 網走	占守丸	九、二六、四	自四月至五月 每月五回	九、二六〇、〇〇	鯨灣、城ヶ崎、村上、岬、エサン、奥ノ四ツ岩、サナブキ、摺鉢、千歳、樽	近海郵船株式會社
千島網走線	同	函館 網走	花咲丸	一、四六三、三〇	自四月至五月 每月六回	三、〇七四、〇〇	釧路、根室、留別、乳呑、古丹、藥取、内保、別飛、古釜、布、霧多布、根室	近海郵船株式會社
千島網走線	同	函館 網走	弘前丸	一、三五四、三〇	自四月至五月 每月六回	二、六七一、〇〇	釧路、厚岸、霧多布、根室、羅臼、斜里、標津、神戶	近海郵船株式會社
千島網走線	同	函館 網走	根室丸	一、二六六、〇八	自四月至五月 每月九回	九、七六六、〇〇	釧路、厚岸、青森、船川、新潟、伏木、七尾	鳥谷商船株式會社
函館青森線	同	函館 青森	森共益丸	一、六四、〇六	自四月至五月 每月八回	一、四九三、〇〇	井井、日浦、尻岸内、古武、井根、法華、尾札部、白尻、鹿部、根田内、古部、木直、川波、但シ十二月ヨリ、翌年三月マテ終點ヲ鹿部に止ムルコトアルヘシ	渡島汽船株式會社

小甲内線	小乙内線	小走線	網走線
上	上	上	上
稚内大丸	稚内宗谷丸	網走第二北海丸	網走第二北海丸
五、三	六、七、三	八、六、〇、九	八、六、〇、九
至自四月 至十一月 計	至自四月 至十一月 計	至自四月 至十二月 計	至自四月 至十二月 計
每月五回	每月七回	每月五回	每月五回
四六回	四六回	四二回	四二回
二、五七、〇〇	三、一八、〇〇	一、八五、〇〇	二、四六、〇〇
增毛、留萌、天賣、燒尻、 鬼脇、鷺泊、香深、仙法、 志、杏形	增毛、留萌、天賣、燒尻、 苦前、羽幌、初山別、風 連別、遠別、仙法、志、鬼 脇、鷺泊、杏形、香深、船 泊、鬼鹿、天鹽、伏木	稚内、枝幸、乙忠部、雄武 常呂、紋別、幌内、伏木	標津、蕨別、忠類
北海郵船株式會社	藤山海運株式會社	北海郵船株式會社	根室汽船株式會社

石狩川線	江月形	江月形	江月形
上	上	上	上
上川丸	上川丸	上川丸	上川丸
五、四	五、四	五、四	五、四
至自四月 至十一月 計	至自四月 至十一月 計	至自四月 至十一月 計	至自四月 至十一月 計
每月三回	每月三回	每月三回	每月三回
四九回	四九回	四九回	四九回
七、三、七、〇〇	七、三、七、〇〇	七、三、七、〇〇	七、三、七、〇〇
砂濱、幌向、下達布、上達 布、美唄達布、美唄、新篠 津、狐森、上北村、枯木 茨戸、ビトイ、當別太	砂濱、幌向、下達布、上達 布、美唄達布、美唄、新篠 津、狐森、上北村、枯木 茨戸、ビトイ、當別太	砂濱、幌向、下達布、上達 布、美唄達布、美唄、新篠 津、狐森、上北村、枯木 茨戸、ビトイ、當別太	砂濱、幌向、下達布、上達 布、美唄達布、美唄、新篠 津、狐森、上北村、枯木 茨戸、ビトイ、當別太
藤原由藏	藤原由藏	藤原由藏	藤原由藏

北海道廳以外の命令航路 (同前)

他官廳及本道の市の命令航路に關係あるものを掲げるに次の通り。

官廳命令航路

函館樺太線	小樽樺太線	函館小樽線	函館小樽線
大函	大函	大函	大函
館泊	館泊	館泊	館泊
自昭和四年四月 至昭和七年三月	自昭和四年四月 至昭和七年三月	自昭和四年四月 至昭和七年三月	自昭和四年四月 至昭和七年三月
千歲丸	千歲丸	千歲丸	千歲丸
二、六、六	二、六、六	二、六、六	二、六、六
自四月 至十二月 計	自四月 至十二月 計	自四月 至十二月 計	自四月 至十二月 計
每月六回	每月六回	每月六回	每月六回
四八回	四八回	四八回	四八回
青森、小樽、真岡	青森、小樽、真岡	青森、小樽、真岡	青森、小樽、真岡
近海郵船株式會社	近海郵船株式會社	近海郵船株式會社	近海郵船株式會社

函館小樽線	函館小樽線	函館小樽線	函館小樽線
大函	大函	大函	大函
館泊	館泊	館泊	館泊
自昭和四年四月 至昭和七年三月	自昭和四年四月 至昭和七年三月	自昭和四年四月 至昭和七年三月	自昭和四年四月 至昭和七年三月
千歲丸	千歲丸	千歲丸	千歲丸
二、六、六	二、六、六	二、六、六	二、六、六
自四月 至十二月 計	自四月 至十二月 計	自四月 至十二月 計	自四月 至十二月 計
每月六回	每月六回	每月六回	每月六回
四八回	四八回	四八回	四八回
青森、小樽、真岡	青森、小樽、真岡	青森、小樽、真岡	青森、小樽、真岡
近海郵船株式會社	近海郵船株式會社	近海郵船株式會社	近海郵船株式會社

總督府 朝鮮 北海道 線	小樽 敷香 線	伏木 大泊 線	敦賀 大泊 線	大阪 敷香 線	大阪 眞岡 線	伏木 敷香 線	小樽 居 線	稚 内 本 斗 線
敷小	大伏	大敦	敷大	眞大	敷伏	敷伏	冬期 小樽 泊 居	本 斗
香樽	泊木	泊賀	香阪	岡阪	香木	香木	夏期 小樽 惠須 取	斗
自昭和四年三月	自昭和四年四月	自昭和四年五月	同上	同上	同上	同上	自昭和四年四月	自昭和五年三月
長城丸	京城丸	五多丸	浦能丸	大能丸	青龍丸	第二北丸	第二大丸	三國丸
二、〇四〇	一、一八〇	一、六〇七	三、一〇〇	二、三三六	一、八五五	八六六	九六六	九〇九
年二〇回	年二一回	年七回	年一四回	年一四回	年一四回	年一四回	年一四回	年一四回
舞鶴、大連、釜山、龍南浦、仁川、群山、木浦、釜山、境、宮津、新舞鶴、小樽	但榮濱、元泊、知取、泊岸、内路	但眞岡、船川、小樽	函館、芝浦、小樽、大泊、榮濱、元泊、知取、泊岸、内路	芝浦、小樽、大泊、榮濱、元泊、知取、泊岸、内路	神戶、門司、坂出、函館、小樽	函館、小樽、大泊、榮濱、元泊、知取、泊岸、内路	海馬島、本斗、眞岡、野田、泊居、但海馬島、本年野田、寄港、八月一回トス	自七月至三月 每月一三回 計二七六回
株島谷汽船社	株島谷汽船社	同	株川崎汽船社	株川崎汽船社	株北日本汽船社	株北日本汽船社	株北日本汽船社	株北日本汽船社

樺太 太 廳	大 須 取 線	函 館 能 登 線	函 館 安 別 線	伏 木 須 取 線	小 樽 居 線
大 須 取 線	函 館 能 登 線	函 館 安 別 線	伏 木 須 取 線	小 樽 居 線	小 樽 居 線
但惠大 トシ基 スルコ トヲ得	延及但 航遠シ 内三 スベ ハ海 マ島	安 函	取 木	(2)(1) 自小樽 自小樽 至大泊 至大泊	自夏期 自小樽 至惠須 取
同	同	同	同	同	同
上	上	上	上	上	上
藏北大 斗榮丸	大天豊 黒祐原 天祐丸	海宗像 和像丸	能登呂丸	眞岡丸	京城丸
二、二〇〇	七三三	一、〇四五	一、三三六	一、二八〇	一、二八〇
自四月至十月 每月二回	自五月至十月 每月三回	自四月至十月 每月四回	自四月至十月 每月四回	自四月至十月 每月四回	自四月至十月 每月四回
略但眞橫 スル復岡濱 コト野芝 ヲ田浦、 得居、函 館、小樽、 大泊	ハハハ内群野小 復初路潭寒樽 航航及敷元榮 チニ終香泊泊 ヲ寄港航海知東 ス限豹取取白 ルベリ島新取 コト寄港但問登 ヲ寄港シ野泊 得ノ寄港間寒岸 港	二回武蘭圓春眞小 回往意泊度内岡樽 ハ往意泊珍内毛蘭海 ハ復航泊牛毛蕪泊馬 ハ復航泊牛毛蕪泊馬 ハ復航泊牛毛蕪泊馬	省略泊本魚 略スル新斗津 コトコトコト ヲ得得得	航又ハ復航 コトコトコト ヲ得得得	夏期 内、眞岡、野田、泊居、鶴城、珍 ノ、但野田寄港、八月二回往航 ノ、但野田寄港、八月二回往航 ノ、但野田寄港、八月二回往航
株近海郵船社	同	同	同	同	同

秋田縣小樽船川線

同

上六
以上二噸級

自四月至三月
每月三回
年三六回

(直航)

北日本汽船株式會社

市費命令航路

市名	線名	命令期間	區間	船名	總噸數	航海回数	寄港地名	受命者
函館	函館三陸線	自昭和四年四月至昭和五年三月	函館	眞隆丸	一、〇〇〇噸級	年二四回	宮古、山田、大船、釜石、高田、大船	三陸汽船株式會社
同上	函館三厩線	同上	函館	南部丸	一〇〇噸級	年三〇回	福島、福山、龍飛、三本木、蟹田	三厩漁業組合船舶部
釧路	釧路鹽釜線	同上	釧路	大漁丸	二、〇〇〇噸	月三回	根室、霧多布	栗林商船株式會社
				大榮丸	三、九三噸	此ノ三隻ハ各定期航路補助船トシテ配給		
				第二室蘭丸	三、三三噸			
				第二龍雲丸	二、八九噸			

自由沿岸定期航路 (同前)

線名	區間	船隻數	航海回数	寄港地名	經營者名
函館福山線	函館山	五隻	月平均一五回	釜石、三ツ岩、福島	高橋回漕店
函館瀨棚線	瀨棚	同上	月平均約五回	福島、福山、江良町、江差、乙部、熊石、久遠	宮本回漕店
函館白尻線	白尻	四隻	月平均約六回	戶井、日浦、熊泊、尻岸内、古武井、榎法華、尾札部	函館汽船株式會社
同上	同上	同上	同上	同上	渡島汽船株式會社

對外自由定期航路

函館擇捉線	函館日高線	函館室蘭線	函館釧路線	函館浦河線	小樽稚內線	釧路函館線
擇捉	日高	室蘭	釧路	浦河	稚內	函館
九隻	三隻	二隻	一隻	二隻		
月平均約十回 (冬期間ヲ除ク)	月平均約六回	月平均約一五回	月平均約一五回		年一四一回	月三回
	日高沿岸諸港	(主トシテ直航)	厚岸、霧多布	浦河方面諸港	利尻、禮文	厚岸、霧多布、青森
千島汽船株式會社	金森商船株式會社	東海汽船株式會社	三好商會	藤山海運株式會社		東海汽船株式會社

線名	區間	船隻數	航海回数	寄港地名	經營者名
北海道上海線	根室、釧路、函館、上海	一定セズ	年約二〇回	臨時寄港地トシテ花咲、霧多布、室蘭、青森	近海郵船株式會社
同上	同上	萬雄丸	年約二〇回	同上	川崎汽船株式會社
小樽惠須取線	小樽	竹島丸	月四回	眞岡、泊居	近海郵船株式會社
東京小樽線	小樽	養老丸、宮浦丸、正木丸、保丸、祥保丸、多摩丸、甲陽丸、眞盛丸	月六回	橫濱、函館	同上
小樽神戶線 (西廻)	小樽		月三回	函館、門司、大阪	同上

小樽伏木線	小樽伏木線	小樽樺太線	期冬小樽泊居線	期冬小樽大泊線	函館小樽能登線	伏木小樽樺太線	小樽大阪樺太線	小樽知取線	小樽惠須取線	小樽神戶線(東廻)	
伏小	伏小	惠小	泊小	大小	能小	惠伏	惠大	敷小	惠小	神小	
木樽	木樽	須取	居樽	泊樽	登樽	須取	須取	香樽	取樽	戶樽	
泰北丸	菊龍丸	青龍丸	愛德丸	七原丸	臺北丸	京城丸	天祐丸	大黑丸	能登丸	喜代丸	
一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	
月四回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	
	越中	惠須取、東京、橫濱	函館、大泊、真岡、野田、泊居、	真岡、野田、海馬島	函館、大泊、野寒、榮濱、東白、	久春、本斗、真岡、野田、泊居、	滑川、魚津、新潟、酒田、小樽、	館、小樽、大泊、真岡、野田	榮濱、元泊、泊岸、岡度、敷香	真岡、野田、泊居、珍内、鶴城	函館、四日市、名古屋、大阪
藤山海運株式會社	島谷商船株式會社	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	北日本汽船株式會社	同上

釧路伏木線	釧路宮古線	上海臺灣線	釧路神戶線	上海臺灣線	橫濱線	芝浦線	名古屋線	阪神線	
伏木路	宮古路	上海路	神戶路	上海路	橫濱路	芝浦路	名古屋路	神戶路	
常盤丸	泰山丸	筑前丸	登川丸	高雄丸	吳泰丸	東泰丸	豐前丸	神祐丸	
一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	一、二、五	
月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	月三回	
津、新潟、土崎	七尾、滑川、魚津、生地、真江	根室、神戶、大阪、東京、橫濱	門司、鹿兒島	橫濱、東京、名古屋、四日市、	釜山、木浦、群山、仁川、境、	釜山、木浦、新舞鶴、敦賀、伏	宮津、舞鶴、新舞鶴、敦賀、伏	木、函館、小樽	大阪
島谷商船株式會社	東海汽船株式會社	日本郵船株式會社	近海郵船株式會社	川崎汽船株式會社	栗林商船株式會社	同上	同上	同上	同上

最近三ヶ年運輸成績 北海道廳命令航路

大正十四年度から昭和二年まで三箇年間の平均運輸成績に右の通り(道廳調)年度旅客貨物郵便物
 大正十四年度 五、四、四八、九、九二、三
 同十五年度 五、四、四八、九、九二、三
 昭和二年 五、四、四八、九、九二、三
 以上三箇年平均成績右の通り
 函館小樽線 五、七、七二、八、三、〇、三、〇、三、五、六、〇

同 瀨棚線 一、五、九、〇、〇、一、三、一、二、元
 同 釧路線 一、八、六、一、六、三、九、五、一、元
 同 日高線 九、四、一、三、五、四、四、五、元
 同 網走線 三、六、六、四、四、〇、四、二、元
 同 其ノ一 二、四、四、五、二、七、〇、元
 同 其ノ二 六、四、三、四、四、六、三、元
 小樽樺太線 五、六、三、八、三、五、六、七、七、元
 小樽稚内線 六、八、七、二、五、五、九、四、九、七、七、六、元
 同線乙線 六、八、七、二、五、五、九、四、九、七、七、六、元

小樽網走線 一、元、〇、五、〇、〇、元
 根室近海線 一、九、三、五、六、二、三、元
 石狩川線 二、一、三、九、九、二、五、元
 計 五、一、七、二、〇、三、八、七、〇、元
 五、〇、九、九、九、元

道路

道路延長現況一覽

(昭和六年三月末日現在)

道路の現況
本道路史始まつて既に百三十餘年。
此の間自然の経路が、舊幕時代の放任的
開拓使時代の創業的經營を経て道廳時代

の計畫的遂行に移り、右表に示す様に一
萬八十八里餘に達した過去を顧みる時、
如何に其の奮闘と努力とを要したかは、
想像するに難うはない。

Table with columns: 市支廳別, 國道, 地方費道, 準地方費道, 市道, 町道, 拓殖費支辨, 町村費支辨, 計. Rows list various road types and locations like 根路, 室國, etc.

概観 道路に關する事業
舊幕時代の道路は其の質に於

ても量に於ても論ずるに足らない。道路
の積極的經營は開拓使設置以後の事に屬

し、次いで十年計畫、十五年計畫を経て
今日に及んだ。茲に開拓使以來國費を以

て開鑿せられたる道路の延長里數を概観
せば
明治三十三年迄(十年計畫樹立前)
一、三〇六里
自明治三十四年(十年計畫時代)
一、九一八里
至同 四十四年(十五年計畫時代)
一、二九八里
至大正十五年(十五年計畫時代)
一、二九八里
而して現在の道路延長は前記の通り
一萬八十八里である。今之を第二次拓殖
計畫の事業につき其 進展の實績を見よ

二十年計畫

(第二次拓殖計畫自昭和二年
至昭和二十一年貳拾年間)

十五年計畫終了と共に、第二次拓殖計
劃を樹立し、昭和二年度以降二十ヶ年間
に涉り總額九億六千三百三十七萬八千八
百二十八圓の内、道路橋梁費二億二千百
七十九萬七千七百七十九圓を支出すること
になつた。而して從來に於ける道路の施
設は常に、拓殖の進歩に應ぜんが爲に延

第二次道路計畫道路工事實施後の進程一覽

(道廳道路課調査)

Table with columns: 事業別, 年度, 延長, 金額, 実績, 差引, 増減. Rows include 新設, 昭和二年, 昭和三年, 昭和四年.

土木

長を主とし、簡易なる工法に依り築造せ
られたので、耐久力に乏しく、年歲修繕
を加へて居るが、尙初冬及春分融雪期に
遭ふと其の惡路實に名狀すべからざるも
のがある。然かも移民招來に伴ひ、殖民
原野と重要地區とを連絡させるべき拓殖
道路の新設は、既成道路の改良と相俟て
極めて燒眉の急務に屬して居る。加ふる
に市町村に於て其の負擔に屬する市町村
道の改良計畫があるの、道廳で之を助
成する爲、補助金を下附する等施設の擴
充をなし以て本道殖民の實を擧げること
に努力してゐる。

此の改良豫定延長 七二八里
橋梁架設 一八、七六三間
三、道路の修繕 國道地方費道の全
線及町村道中國費開鑿後十ヶ年を経
過せざるもの、維持修繕並に是等路
線に附屬する橋梁の架換を行ふ。
此の二十年箇年間の修繕豫定延長
四三、七五一里
四、道路調査 國道、地方費道の敷
地調査殘程三十六里の完成を期する
と共に右同道路中三百七里に對し境
界標を建設して道路敷地の整理を行
はうとする。

今左に其の計畫の主要を記すと、
一、道路の新設 殖民原野の幹線た
るべきもの及鐵道港灣其他重要な
地區に連絡する道路の開鑿を行ふ
此の新設豫定延長 三、五〇〇里
二、道路の改良 國道其他拓殖上重
要なる既成道路中泥炭地若くは路面
狹隘等の爲車馬の交通不便なる箇所
を改良しようとする。

五、道路改良補助 市町村支辨に屬
する市町村道の路面改良若くは擴築
勾配緩和等の工事に對し各工費の
三割を補助しようとする方針である
此補助豫定延長 市道二〇里、町村
道四〇〇里
次に該計畫實施後の實績を掲げよう。

事工繕修	事工良改		計
	事工梁橋	事工路道	
昭和二年 昭和三年 昭和四年 計	昭和二年 昭和三年 昭和四年 計	昭和二年 昭和三年 昭和四年 計	計
同計	同計	同計	同計
六、七二、四〇〇・〇〇 六、九七、七〇九・〇〇 七、〇三三・七四五・四〇 二〇、七四三・八五四・四〇	一、〇九、〇〇〇・〇〇 一、〇九、〇〇〇・〇〇 一、〇九、〇〇〇・〇〇 三、二七〇、〇〇〇・〇〇	一、〇九、〇〇〇・〇〇 一、〇九、〇〇〇・〇〇 一、〇九、〇〇〇・〇〇 三、二七〇、〇〇〇・〇〇	一、〇四、四三三・七〇 六、一八、〇〇〇・〇〇 一、八一、五七四・二〇 三、三七一、四三三・五〇 三、六、九二〇・五〇 △二、七四六、五七・五〇
一、七七、四四五・〇〇 一、八五、七四〇・〇〇 一、八五、七四〇・〇〇 五、四六六・八七〇・〇〇	一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 三、五二五・〇〇〇・〇〇	一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 三、五二五・〇〇〇・〇〇	一、一八、一五七・二〇 一、一八、一五七・二〇 一、一八、一五七・二〇 三、五二五・〇〇〇・〇〇
六、六七、四三六・〇〇 六、八六、八七二・七〇 七、〇三三・三六一・八〇 二〇、五九〇・六九〇・八〇	一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 三、五二五・〇〇〇・〇〇	一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 三、五二五・〇〇〇・〇〇	一、一八、一五七・二〇 一、一八、一五七・二〇 一、一八、一五七・二〇 三、五二五・〇〇〇・〇〇
一、六六、七六六・九八五・〇〇 一、三六、六九二・四三〇・〇〇 一、四四二、〇四九・七六〇・〇〇 四、五一一、五九一・一九五・〇〇	一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 三、五二五・〇〇〇・〇〇	一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 一、一七、四四五・〇〇 三、五二五・〇〇〇・〇〇	一、一八、一五七・二〇 一、一八、一五七・二〇 一、一八、一五七・二〇 三、五二五・〇〇〇・〇〇
一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 三、二八八、〇〇〇・〇〇	一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 三、二八八、〇〇〇・〇〇	一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 三、二八八、〇〇〇・〇〇	一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 三、二八八、〇〇〇・〇〇
一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 三、二八八、〇〇〇・〇〇	一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 三、二八八、〇〇〇・〇〇	一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 三、二八八、〇〇〇・〇〇	一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 一、〇九、九三三・七〇 三、二八八、〇〇〇・〇〇

自動車道路 自動車の急激なる發達は道路構造に一轉機を劃し、既に早く府縣にては自動車道路の改良問題を生じ、國庫より相當補助するの議も起つてゐる。本道の道路計劃も亦決して從來の儘を踏襲することが出来ない。今や新時代の要求する自動車を除外して考へることを許さない様になり、馬車道路より自動車道路へ……これ本道道路計劃の目指さるべき理想となつた。けれども本道自動車道路網の完成……即ち國道、地方費道の全部、準地方費道の大部分及樞要町村道の一部分に大改良工事を施すことは、多額の經費を要する(改良費約六億)ので

現在直ちに其の實現を望むことは困難である。然し札幌より小樽・函館・室蘭・留萌・釧路・稚内・網走・根室の八大港に達するもの及び道内樞要市街たる旭川市・野付牛町・帶廣町を連絡する國道、地方費道の各線は交通經濟及車路上極めて重要な幹線で、之を自動車道路化することば、本道自動車道路計劃の最少限度の要求でなければならぬ。然るに本道々路は極端に粗雑なるが爲、此計劃によつても尙一億圓を要するであらう。右の様な事情があつたとしても現今は既に自動車の時代である、徒に經費巨額の聲に恐れ、

拱手傍觀するのは時代の進展に添ふ所以ではない。そこで當局に於ては今般特に必要な路線を選び、數年を期して漸次小規模の改良を反覆して自動車の通行に及ぼす支障を除去し其の發達に貢献し、理想實現に一步を進めようとの考へで、之が計劃を立て、實施に努めてゐる。今左に自動車道路延長並自動車數に關する概況を掲げよう。(道廳道路課調査)

一、自動車道路延長(昭和六年三月)
五七七里三三町一四間

二、自動車數
一、四九二臺

- (イ) 自家用 (乗用) 一、一六臺 (内サイドカー) 一、一臺
- (ロ) 營業用 (貨物運搬) 一、一九臺 (内サイドカー) 一、一臺
- (ハ) 營業用 (貨物運搬) 一、一九臺 (内サイドカー) 一、一臺
- (ニ) 營業用 (貨物運搬) 一、一九臺 (内サイドカー) 一、一臺

港灣事業

本道の開發と港灣
本道の産業は總説の如く漸次發達の趨勢に在り、而してこれがやがて貿易の振興を招き、道内の商港は日を追ふて隆盛に赴き、函館・小樽・室蘭・釧路・留萌・網走・稚内・根室の八商港は各其の特有なる價値に愈顯著なる様になつた。即ち函館は古來より漁業貿易並海産市場として確固なる地歩を占むるに共に工業港として益々發達し内外の貿易市場を極め、小樽は主に農産・林産の貿易市場として或は北方進出の根據地として堅實なる發達を示し、室蘭港は石炭港並工業港に或は本道奥地へ對する仲繼港として要衝の地位を占め、釧路は木材、石炭港として益々

發達すると共に近時築港工事の進展に依る港灣の改良に伴ひ農産物輸出港として擡頭目覺しきものがある。其他根室港は水産物の集散地、網走港は北見沿岸唯一の避難港、稚内港は樺太との連絡港、又留萌港は石炭港又本道中部に對する物資の吞吐港として各其の特長を發揮しつつある。惟ふに本道は未だ開拓の道程に在りて海陸共に尙無盡の天産を包蔵する。即ち之を開闢して我國産業の發展に寄與し國富の増進に資するは極めて緊要とする所である。實に本道拓殖計畫は其の根本趣旨を之に求め、既に第一期計劃に屬する事業を了り、更に昭和二年以來第二期拓殖計畫の實行を見るに至つたのは洵に故がない譯でない。而して商港の修築擴張、漁港の築設等亦此の計畫に於て實施されるのは當に港灣の發達を振興するばかりでなく、本道開發の上に於て眞に欣ぶべき事である。

種別	摘要	經營者
防波島堤	三、〇三〇尺	北海道廳
第一防砂堤	一、五〇〇尺	函館市
第二防砂堤	一、六〇〇尺	北海道廳
第三防砂堤	一、六〇〇尺	同
海岸町船入澗	三、〇〇〇坪	同
小船町船入澗	四、二八〇坪	函館市
船壁	三、五九四呎水深二二呎	鐵道省
同	七六五間水深一八尺	同
東濱町棧橋	二四尺(工事中)函館市	函館市
税關浮棧橋	延長一四間木造、幅四間	北海道廳
共同物揚場	延長一〇間木造、幅二間半	函館稅關
保稅上家	總延長七九八間二分	函館市
	二棟二六四坪	函館稅關

其他の上家 二七棟五、九五六坪
 鐵道省・市・其他個人
 保稅倉庫 一棟九七坪 函館稅關
 私設保稅倉庫 四棟三四四坪 個人
 其他の倉庫 九二棟一六、七三二坪 個人
 鐵道省・個人
 冷蔵倉庫 二棟一、五二二坪 個人
 貯炭場 一、七六八坪 鐵道省
 繫船浮標 大一一四五、計一九個人
 給水設備 給水船七隻給水栓九個 個人
 船隻 三〇八隻 鐵道省・個人
 船渠 二五隻 同
 船塢 乾船渠一、曳揚式船渠一、
 埋立地 九六、二七二坪
 函館船渠株式會社
 道廳・鐵道省・函館市
 保稅地域 一、二九一坪 函館稅關
 私設假置場 四、六七四坪 個人
 第二期拓殖計畫實施概要 大正
 十五年第二期拓殖計畫に際し本港發達の
 狀況に鑑み將來の趨勢を觀察して其の必
 要とする改良擴張の基礎計劃を樹て技師
 伊藤長右衛門の設計に依り現防波堤を延
 長増築し且島堤一條を築設して港域を擴
 大すると共に埠頭二基を築造すること
 し工費金千三百三十八萬五千餘圓を計上し
 昭和四年度から起工し、昭和十五年度に
 竣功の豫定になつてゐる。

小樽港は後志國の北端に在つて其の地
 勢は東に向つて開放し、北西南の三方は
 山岳圍繞し高丘は灣の北端に當つてゐる
 茅柴岬に起り西部の山脈に連り、山嘴は
 延びて平磯岬に接し灣の南端を爲してゐ
 る。本港は松前藩政の時小樽、石狩兩郡
 の境を流れるオタルナイ川口に居を卜し
 た土人を此地に移住させて漁場を開いた
 ことに起り、明治四年開拓使本廳が札幌
 に置かれるに直ぐに同地との海陸運輸の
 接續を本港に求めたので、爾來本港の發
 展は著しくなつて來た。昭和六年十月國
 勢調査結果による本道の人口は約十四萬
 五千にして本道屈指の商港であるばかり
 でなく實に我國の重要港灣の一で、北樺
 及沿海州方面に渡航する要衝である。
 港内水面積 現在の港内面積は百三
 十萬坪であるが、第二期拓殖計畫に依つ
 て之を擴張することになつてゐる。
 港灣設備 本港の修築に付國費及公
 共團體に於て投じた金額は約千百萬圓で
 元來本港天然の灣形は北西に向つて開放
 するので北西風に依る激浪怒濤は常に陸
 上を侵し、荷役は勿論船舶の碇繋を不安
 にさせることは稀ではなかつたが、南北
 二條の防波堤は能く此の風浪を防ぎ港内
 の平穩を保つので其の利用著しく増して
 全く港灣の面目を一新するに至つた。今
 本港現在の主なる港灣設備を掲記するこ
 左の通りである。

種別 摘要 經營者
 南防波堤 六、〇九八尺 北海道廳
 北防波堤 五、六三六尺 同
 高架棧橋 木製(長九四八尺、幅七〇尺) 鐵道省
 旅客棧橋 長一〇間幅三間 小樽市
 共同物揚場 總延長一三八間 小樽市
 保稅上屋 三棟六〇八坪 稅關、個人
 保稅倉庫 一棟七六七坪 個人
 其他の倉庫 二一九棟二七、六一四坪 個人
 給水設備 水槽船十隻水栓六個小樽市
 繫船浮標 大十八小計四十二個 個人
 船塢 鐵道省・稅關・市・個人
 保稅工場 四ヶ所九、二〇六坪 個人
 保稅地域 一、五九四坪 稅關
 船渠 三一九艘 個人
 船隻 四六隻 個人
 運河 延長七二〇間幅二三間 個人
 第二期拓殖計畫による築港工事概要 量
 に明治三十年年度以降二十四箇年の成績事
 業として築設せられた防波堤一萬一千七
 百三十四尺を有し外海に對する防波の施
 設は略其の目的を達した觀があるが、港
 口稍々廣過ぎるので、是等の設備の完成
 を認め昭和四年度以降十六箇年に、港口
 北防波堤増設千二百尺南島堤増設百五十
 坪、埠頭三、埋築二萬一千七百四十五面
 坪、浚深八萬七百立坪を施して其の利用

室蘭港

の便益を増進することになつてゐる。
 室蘭港は本道の南端膽振國の東隅に在
 つて其の東南は丘陵起伏した半島を隔て
 太平洋に面し、北岸祝津以東は海岸迂
 曲してゐる。本港は西北に向つて開放し
 てゐるが其度極めて僅少で、港口約一哩
 に過ぎないで函館港と共に港形の良好な
 ことは本道屈指のものである。
 本港は往時給炭場所と稱され松前氏の
 直領に屬した土地であつたが其の港口は
 維新前までは殆ど算するに足らない有様
 であつたが、移住者の招來、交通運輸の
 進歩發達に伴つて漸次戸目が増加する様
 になつて來た。其の最も著しいのは明治
 四十年に日本製鋼所及輪西製鐵所の創業
 によつて劇増したもので即ち同所の事業
 の盛衰は延いて本港の戸口及び商況に多
 大の影響を及ぼすものである。
 港内水面積 南北兩防波堤に依り被
 覆される港内水面積は二百四十萬坪であ
 る。由來本港は水深概して深く大型汽船
 の繫留に適すること本道中稀に見る所
 自然の地形を利用するだけでも船隻の荷
 役に大きな支障を及ぼさない状態であ
 る。
 港灣設備 本港に於ける港灣設備の
 主なるものを示す左の通りである。
 種別 摘要 經營者
 南防波堤 一、八三〇尺 北海道廳

北防波堤 三、二〇〇尺 同
 船入洞 四箇所一、三四五坪 個人
 棧橋 二〇間 室蘭市
 埠頭棧橋 一一〇間 日本製鋼所
 繫船壁 二五九間 個人
 倉庫 一棟一、〇〇坪 個人
 物上屋 一棟一、〇〇坪 個人
 石炭積込及高架棧橋 一、〇八四坪 鐵道省
 同積込棧橋 炭礦汽船株式會社
 給水設備 水槽船四隻 十四個 市及個人
 繫船浮標 六個 鐵道省及個人
 臨港鐵道 約七哩三 鐵道省
 船隻 七三艘 鐵道省
 第二期拓殖計畫に依る築港工事概要 本
 計畫に於ては防波堤増築埠頭及之に附帶
 する埋築並浚深工事を施すに於て。即ち
 南堤を更に六百尺延長して港門を約千
 尺とし埠頭に港燈一基を建設し、築地
 町地先海面に幅員四十間の運河を有して
 三萬五千四百餘坪を埋立て幅七十間の埠
 頭一基を築造する又運河には橋梁を架し
 て陸地との接續を計るものである。尙前
 記埠頭附近約五萬坪を水深千潮面下三十
 尺に浚深して必要な水深を得させる。以
 上昭和四年度起工昭和十六年度完成の豫
 定になつてゐる。
 而して現在右の埋築の一部を施行し
 引續き埋立の工事中に屬してゐる。

種別 摘要 經營者
 南防波堤 延長四、六五〇尺 鐵道省
 北防波堤 同 四、六〇〇尺 鐵道省
 防砂堤 同 五、〇〇〇尺 鐵道省
 給水岸壁 (岸壁一〇七間) 埋立二、〇
 棧橋木造 一七七尺 鐵道省
 共同物揚場 四六棟五、二四二坪 個人
 營業倉庫 同 鐵道省
 釧路港は西南太平洋に面し東方は丘陵
 に接し、北方は平野が遠く連つて本道東
 海岸中樞要の港灣である。
 釧路はクヌリスミ云ひ所謂蝦夷地の一
 漁村部落であつたが、地の利を得た本港
 は奥地開發に伴つて漸次發達し殊に鐵道
 の開通港灣の修築等は此の發達を助成さ
 せたことが少くない。昭和五年十月國勢
 調査による人口は五萬一千餘人を算し、
 今や本道に於ける有数の臨港都市となつ
 た。
 港内水面積 現在被覆面積は六十七
 萬坪で第二期計畫に依り七十五萬坪に擴張
 することになつてゐる。
 港灣設備 本港の港灣設備としては
 南北兩防波堤を主とし海陸連絡設備に至
 つては未だ釧路市管轄水岸壁及會社經營
 に係る臨港鐵道と石炭積込設備を有する
 に過ぎない、一般荷役は依然釧路河口を
 利用し船隻に依つて之を行つてゐる。
 本港に於ける主要設備を左に掲げよう

上家 二棟四三二坪 鐵道省
 給水設備 給水船六隻 個人
 臨港鐵道 五哩 釧路港鐵道株式會社
 船入潤 三、六三五坪 北海道廳
 石炭積込設備 一 太平洋炭礦株式會社
 船 八六 北海道廳、個人
 船 二四 同

第二期拓計築港工事概要 其の主なもの擴張並に漁港施設として副港築設の二期工事であつて、既定計畫は昭和四年度に、新規事業は昭和五年度より同十七年度に至る十三箇年間に完成の豫定。而して現在には築港事務所長技師高田庄二事業施行の任に當り専ら浚渫工事を施してゐる。

留萌港 留萌港は天鹽國留萌郡に在つて其の西南は増毛町に東南は北龍村に界し西北は日本海に面し北方遙に天賣焼尻の二島を望むことが出来る。本港は天明年間始めて漁場を開いたと傳へられてゐるが史乘に之を見るに過ぎない。單なる漁村として發達するに過ぎなかつたが、港灣修築工事の着手深川留萌間鐵道の開通及留萌支廳の移設に次で増毛羽幌線の開通等に依つて漸次戸口の増加を見、昭和五年十月現在約一萬六千を算するに至つた。

港灣設備 本港の港灣設備は計畫中のもの順次成工に伴ひ充實せらるべく尙ほ後方地域産業の發展就中雨龍炭田の開發臨港鐵道の布設に伴つて港内石炭積込設備及埋築護岸工事の施行等を喧傳せらるゝもののあるのは本港の將來を語る所以であらう。

種別 摘要 經營者
 南防波堤 延長三、一〇〇尺 北海道廳
 北防波堤 同 九、〇〇〇尺
 防波堤 延長一、七五〇尺
 導水堤 延長四百間工事中
 繫船岸壁 二〇、〇〇〇坪
 副港倉庫 五棟七五〇坪 留萌町
 第二期拓計築港工事概要 大正十五年本計畫に於て北防波堤を短縮しその代りに内港を十萬三千五百坪水深二十六尺乃至十二尺に擴張する等既定計畫の一部を變更し殘程全部計畫に編入工費總額千二百餘圓で、昭和五年度竣工の豫定である。然るに昭和四年内港を九萬五千坪に縮少港岸一部に繫船岸壁を増築することに、昭和六年度完成に改めた。

種別 摘要 經營者
 防波堤 延長四、八〇〇尺工事中 北海道廳
 防波堤 同 一、八〇〇尺工事中 同
 繫船岸壁 防波堤を利用す 延長三六〇尺 水深二四尺工事中 北海道廳
 倉庫 二棟一九五坪 個人
 船入潤 三ヶ所六、八五〇 個人
 物揚場 六四間 鐵道省・個人
 上家 四棟二四三坪 鐵道省・個人

第二期拓計築港工事概要 大正十五年の本計畫に於て本港は本道樺太間の連絡要港として其の修築は益々急を告げるものと認め更に既定計畫の一部を變更し併せて防波堤を四百尺増築し堤頭には港燈一基を建設して本港の機能を完からしめる計畫に改めた。而して昭和八年度完

網走港

網走港は北見國斜里灣の西隅に在つて北見東海岸に於ける一大要港で地勢南東背後の麓に市街を成し艇に三十四里網走川は市街に沿つて灣内に注流し北東遙かに知床岬を望む外北方は渺漠たるオホソクの大海上に面してゐる。昭和五年十月現在の人口には約二萬七千人。

港灣設備 本港は北見國沿岸の避難港として之が修築に依る設備の外特記すべきものがない。

種別 摘要 經營者
 防波堤 延長五、五九四尺 北海道廳
 河口突堤 同 六〇〇尺 同
 物揚場 同 三、八〇〇間 網走町
 營業倉庫 一二棟七六二坪 個人
 船入潤 一ヶ所二、六〇〇坪 北海道廳
 船 九艘 同
 船 一五隻 同
 埋立地 二三、九〇〇坪 道廳・網走町

第二期拓計築港工事概要 大正十五年第二期拓計に依り殘程全部を之に編入

根室港

根室港は本道東部に於ける要港で根室半島の中央北側に在る。北は國後島と相對し前面に辨天島及數個の岩礁横はり北方ペンケムイ岬海中に突出して天然の港灣を成してゐる。昭和五年十月現在人口は約一萬九千人。

港灣設備 本港の港灣設備は未だ見らるべきものなく、本道第一期拓計に基く防波堤が其の主なるものであるが、近時本港の發達に伴つて漸く公共團體或は個人で海陸連絡設備の充實を期せうとする計畫があるらしい。

種別 摘要 經營者
 防波堤 延長一、三一〇尺 北海道廳
 船入潤 一ヶ所一、〇五〇坪 同
 埠頭 延長五〇間幅八間 根室支廳
 物揚場 延長九六間 根室町・個人
 上家 一棟一七〇坪 同
 營業倉庫 一六棟一、六七三坪 個人
 給水設備 水槽船二水栓一 個人
 第二期拓計築港工事概要 大正十五年本計畫に於て既設の工事だけでは不足なので更に辨天島北端から西防波堤五百尺を築設し尙港内樞要部五萬七百坪を平均干潮面下二十六尺に、其の南方三萬三

第二期拓計築港工事概要 大正十五年第二期拓計に依り殘程全部を之に編入

浦河港

本港の第二期拓計築港工事の主なるものは防波堤八百尺を増築し堤頭は方四十尺港燈一基を設け、且つ既設船潤附近陸岸を埋立て延長二百六十間の護岸壁を築造し漁船の接岸荷揚を安易ならしめるもの、現在増築防波堤の築設三百尺内港施設護岸一六〇間増築約四千坪を終へ目下技師長谷川正義築港事務所長として事業を概任し引續き工事の施行中に屬してゐる。

種別 摘要 經營者
 防波堤 延長四、八〇〇尺工事中 北海道廳
 防波堤 同 一、八〇〇尺工事中 同
 繫船岸壁 防波堤を利用す 延長三六〇尺 水深二四尺工事中 北海道廳
 倉庫 二棟一九五坪 個人
 船入潤 三ヶ所六、八五〇 個人
 物揚場 六四間 鐵道省・個人
 上家 四棟二四三坪 鐵道省・個人

第二期拓計築港工事概要 大正十五年第二期拓計に於て前計畫の殘程全部を之に移入し總工費金百四十一萬四千餘圓第二期拓計築港分五十萬八千餘圓として工事は技師中村廉次監督の下に昭和四年度全く其の功を竣へた。

形 本港修築に關する計畫は大正八年の調査に基き技師伊藤長右衛門之を立案し大正十年から工事に着手し技師山田昇太郎工事を擔任し昭和二年度完成したもので工費總額金九十五萬八千餘圓を要した

江差港 大正十五年第二期拓殖計畫に樹立するに方り残程全部を之に編入し總工費百四十七萬六千餘圓内第二期拓殖計畫の分四十八萬餘圓にして技師榎山常治及同細裕次郎事業監督の任に當り昭和三年度竣功した。

紋別港 大正十五年第二期拓殖計畫に於て残程全部を之に編入した即ち工費總額百八十四萬三千餘圓の内第二期拓殖計畫の分九十四萬七千餘圓にして技師小松悌治工事監督の任に當り昭和五年年度之を竣功した。

本港の調査は明治四十三年に於て施行したが未だ修築の機運に到らず越えて大正十五年立案の第二期計畫に於て技師伊藤長右衛門の設計に基いて本港修築金二百二十八萬六千餘圓を計上之に編入し昭和四年度から起工昭和九年度竣功の豫定である。而して現在には防波堤築設百五十尺の外工場機具設備の一部を了し目下技師細裕次郎築港事務所長を擔任し専ら防波堤及港築工事の實施中である。

廣尾港 本港の調査は明治三十一年の實測を始め其後三十四、五兩年度に互り補測調査を爲し更に大正二年精査測量する所があつたが修築の實現に到らず次いで大正十五年第二期拓殖計畫に於て技師伊藤

長右衛門の設計立案に基き本港修築費金百二十九萬九千餘圓を計上し昭和四年度から工事に着手し現在施行中で昭和八年度完成の豫定である而して現在には南防波堤延長四百尺護岸一、〇三三尺埋立面積約二千四百坪を了り目下技師高田庄二築港事務所長を擔任し引續き計畫工事の實施中である。

天賣港 本港修築に關する計畫は明治四十二年の調査に基き技師伊藤長右衛門之を設計立案し大正十五年第二期拓殖計畫に於て本港修築費金八十二萬五千餘圓を計上し昭和六年度以降五ヶ年で完成させることとし該計畫に編入されたが政府財政上未だ實現に至つてゐない。

各漁港 本道各地に於ける沖合漁業を發達促進させる目的で重要な既掲の岩内・浦河・杵形・江差・紋別・余市・廣尾・天賣の八漁港の外之に次ぐ地方的漁港の樞要なるものを撰定し其の修築を施行しようとするもので、第二期拓殖計畫に於て工費總額七百三十四萬千餘圓を計上し昭和九年度以降十二ヶ年を以て完成させる豫定になつてゐる。

船入潤築設費補助 輓近發動機漁業の發展特に顯著なるものがあるので、地方團體に於て漁船の船入潤を築設するものに對しては其の工費

河川事業

第二期拓殖河川事業

本道第二期拓殖事業計畫に於ては昭和二年から向ふ二十箇年間に於て河川費總額三千三百五十七萬餘圓及治水費總額一億五千三百七十七萬餘圓を計上せられ、重要河川二十六箇川の應急的施設、維持並に浚渫及調査、監視等を爲すべく殊に治水工事は石狩川外七箇川の既定計畫の殘程及石狩川第二區外に利別川、兩龍川、湧別川、網走川、天鹽川の五箇川を新に追加し其の大部分を繼續事業としてその達成を期し目下着々實施中に屬してゐる。

けれども右の治水事業は未だ其の第一歩を印したに過ぎない。即ち本道に於ける重要河川中第二期計畫に計上されぬもの尙十三河川ある上に近來政府財政の都合上河川に關する豫算も亦年々繰延減額相亞ぎ第二期拓殖計畫實施以來昭和二年から昭和六年度に至る五箇年度中治水

河川事業

業計畫表

(道廳河川課調査)

區別	豫算總額	繼續年度	豫定事業概要
河川調査費	三、七、四二	昭和二十年年度以降	調査河川二十一、延長百四十四里觀測所毎年百六十五箇所
河川監視費	一、三、三、六〇	同上	河川監視毎年四十六人常置、河川及堤防敷地取締、水位觀測人監督
河川浚渫費	九、五、七、七〇	同上	重要河川二十六箇川は毎年二十里宛四百里宛四百里浚渫
護岸工事費	三、三、六、一八〇	同上	重要河川二十六箇川の應急處置として護岸工事小堤防施行、延長二十萬九千四百四十二間豫定、併せて既設並新設護岸工及治水工事施行の護岸堤防等の維持
堤塘敷地整理費	三、〇、七、四二五	昭和二十年年度以降	六十箇箇川、延長六百九十里に施行

第二期拓殖計畫治水事業 石狩川治水事業 本川は比布下瀧六十四里の改修を必要とし川口對雁間を第一區、對雁瀧川間を第二區、瀧川深川間を第三區、近文比布間即ち神居古潭上流部を第四區として夫々計畫立案したが總額凡そ一億二千萬圓の巨額に達するので國庫の財源を考慮し本計畫に於ては第一期第二區工事のみを提案計上するに止め殘

餘の部分之を他日適當の機會に譲るゝことなつた。(1)第一區工事 昭和五年度末事業成績左の通りである。(イ)新水路掘鑿工事 總土積三百五十四萬餘坪の内既に二百四十八萬一千九百九十九坪を竣へ昭和六年度中通水し得る見込になつてゐる。(ロ)堤防工事 延長七里十一町三十六

間を築設豫定の所現在僅かに四千五百六十二間完了、仕上未了四千間の状態である。尙當別川は石狩川逆流の状況に鑑み且つ本流捨石の利用上逆水影響の範圍迄當別川沿に右岸堤防を延長して堤内汎濫を防止するを有利と認め左右兩岸共三千八百三十一間の假堤築設を施行し同年完了。(ハ)護岸工事 延長二萬五千三百七間

(一) 市内河川中當面の急を要する部分に對し六千九百九十九間を施行済街の内比較的急を要する瀧川市街堤防に對し大正十三、十四兩年年度に於て延長三十町の堤防並水門等の附帯工事を施行。他の二市街は經費の都合上未着手。

(2) 石狩川第二區工事 工事費總額五千四百二十萬六千六百六十圓を計上し昭和十一年年度以降二十一年年度に至る繼續十一箇年の豫定で完成せしむるこゝになつてゐる。

江別・夕張・千歳川治水工事 此の三川の治水工事は總工事費九百六萬五千二百二十圓を計上し昭和二年年度以降十三年に至る繼續十二箇年の豫定で完成せる計畫になつたのであるが、昭和四年に於て物價低落の現況に鑑み器具機械費に於て其五分を節約減額された外政府財政の都合に因り四、五、六年度に亘り一、二、三年度を爲し竣功年次を一年延長して昭和十四年度に併せて總額七十五萬八千四百圓の節約減額の止むなきに立至り六千八百九十二圓を改訂した。

(1) 新水路掘鑿工事 屈足瀧川間延長六千二百四十間土量五十萬三千七百七十坪の内四十一萬五千二百六十八坪を示し

其の工程大半を終了した。

(2) 堤防工事 (イ)、新水路の兩岸新水路の兩岸築堤延長五里二十八町此總土積四十八萬四千四百坪、内三十九萬三千八百四十七坪を完了。

(ロ) 新水路取入口より上流栗山間に至る延長一里十八町此總土積十五萬五千五百五十二坪は大正十三年完了。

(ハ) 新水路放水口より石狩川左岸江別町に至る延長一里九町四十六間は未着手

(ニ) 江別川と石狩川の合流點より江別川に沿ひ右岸堤防六里三町左岸堤防三里二十四町の内延長一里二十五町二十五間完了

(2) 護岸工事 新水路の兩岸全部並夕張川石狩川の現河道中流水の激衝をうけ、破壊甚しい箇所を選んで施行するもので、延長一萬五千三百五十間を計上したが、是亦經費の都合上右年度僅に八百十五間を施行したに過ぎない。

豊平川治水工事 第二期拓殖計畫案樹立に當り石狩川外四箇川と共に既定計劃河川として工事着手の後先を認められ昭和二年年度以降十四年に至る繼續十三箇年事業として工事費總額を九百三十八萬四千八百六十圓を計上されたが、昭和四年に於て物價低落の現況に鑑み器具機械費に於て其五分を節約減額された外政府財政の都合に因り四、五、六年度に亘

一部繰延を爲し竣功年次を一年延長して昭和十五年度まで併せて總額八十三萬三千六百七十二圓の節約減額の止むなきに至り六年度以降殘程に對し總額七百五十二萬三千七百九圓を改訂された。

本工事は新水路掘鑿、堤防、護岸、苗穂鐵道橋東橋間低水路切替の四種類に大別せられ、今左に是等昭和五年年度末の實績を掲げよう。

(イ)、新水路掘鑿工事 苗穂鐵道橋より下流石狩町字生振南四線に至る延長三里三十三町の新水路線を掘鑿して之を石狩川に放流する計畫で、之が掘鑿總土積五十萬八千四百四十四坪に達する。現在實績僅に四千九百坪に過ぎない。

(ロ)、堤防工事 左岸は石狩町字花畔の砂丘を起點とし茨戸附近に於て新水路線に沿ひ苗穂鐵道橋附近からは豊平川本流に沿ひ札幌市の南端薄岩村界に終る延長五里二十町五間、右岸は石狩町字生振南三線近の丘陵を起點とし新水路に沿ひ苗穂鐵道橋附近に至り更に豊平川本流に沿ひ沿豊平町字土場に至る延長四里三十四町十三間。以上築堤總土積五十九萬八千六百八十三坪にして現在三萬四千六百五坪の實績である。

(ハ)、護岸工事 新水路線及び苗穂鐵道橋上流部豊平橋下流區間は兩岸全部之より上流部右岸土場に至る間、以上總延長一萬九千四百三十間で現在實績

備に六百四十一間に過ぎない。

(二)、苗穂鐵道橋東橋間低水路切替工事は延長七百二十間掘鑿土積四萬八千五百五十坪で、現在實績四千九百一坪に過ぎない。

常呂川治水工事 第二期拓殖計畫に於ては工費二百八十九萬八千二百八十圓を計上し、下流部工事は昭和三年年度を以て竣功を告げ上流部工事は昭和十一年年度以降十四年度に至る四箇年繼續事業として完了させるこゝになつた。

本工事を大別して堤防、護岸、川切替の三種とする。而して是等の中上流部に屬する堤防、護岸工事は昭和三年年度遂に完成し、川切替工事は大正十四年度より通水を見てゐる。

釧路川治水工事 第二期拓殖計畫に於ては既定計畫の殘程に對し四百六十七萬七千二百二十圓を計上し昭和二年年度以降九年年度に至る繼續八ヶ年の豫定で完了するこゝになつたが、昭和四年年度に於て物價低落の現況に鑑み器具機械費に於て其五分を節約減額された外政府財政の都合により四、五、六年度に亘り一部繰延を爲し竣功年次を三年延長して昭和十二年度まで併せて總額二十五萬三千五百三圓の節約減額の止むなきに立至り、六年度以降殘程に對し二百三十二萬三千五百五十二圓を改訂された。

本工事は新水路掘鑿、堤防並川切替、

護岸の三種に大別するこゝが出来る。今是等昭和五年年度末の實績を左に掲げよう。

(イ)、新水路工事 釧路川上流四里十八町宇岩深木から現阿寒川河口に至る區間に新水路延長二里三十一町此總土積五十七萬七千六百九十四坪を掘鑿するるのであるが、現在五十七萬七千五百七十九坪の竣功を見昭和五年十月十日を以て新水路に通水し昭和六年度を以て本工竣功のこゝになつてゐる。

(ロ)、堤防並川切替工事 堤防は新水路左右兩岸及支流雪裡川左右兩岸總延長十里二十三町餘が總土積五十五萬九千七百坪で現在實績三十五萬五千三百三坪の築設を終る。川切替工事は雪裡川延長十町十四間「クチヨロ」川は延長二十五町三十間餘之が掘鑿土積一萬五千三百二十九坪で現在實績は雪裡川は既に完成し「クチヨロ」川亦掘鑿の大半を終了して通水し昭和六年度竣功見込を完了して通水し昭和六年度竣功見込

(ハ)、護岸工事 新水路線中川より上流零里二十一町、新水路測點一里三十町附近より上流取入口に至る延長五千四百間の工事で、現在右の内一部は根園工の外既に終了し昭和六年度を以て全工事竣功の見込

(ニ)、附帶橋梁、暗渠全部竣功し取入口諸工事は昭和六年度完成の見込

十勝川治水工事 第二期拓殖計畫に於ては既定計畫の殘程に對し一千八百十

一萬二千四百八十圓を計上し昭和二年年度以降十五年に至る十四箇年の繼續事業としたが、昭和四年年度に於て物價低落の現況に鑑み器具機械費に於て其五分を節約減額された外政府財政の都合に因り四、五、六年度に亘り一部繰延を爲し竣功年次を一年延長して昭和十六年度まで併せて總額百五十五萬四千五百五十圓の節約減額の止むなきに至り、六年度以降殘程に對し一千四百五十六圓を改訂した。

本工事は堤防築設、新水路掘鑿、護岸の三種に大別するこゝが出来就中堤防はこの工事の主要部分を占める。是等昭和五年年度末の實績を左に掲げよう。

(イ)、堤防工事 總延長二十里六町十坪五分此土積百九十五萬五千五百六坪四合に對し現在施行高四十六萬七千五百二十二坪餘で二割四分弱の出來高である。

(ロ)、新水路工事 (1) 十勝川本流池田下流大曲より千代田鐵道橋に至る新河道延長三千二百四十間に切替へ此總土積四十五萬三千四百四十一坪にして現在累計七萬六千二百二坪を掘鑿し總土積に對し略一割七分の出來高を示す。

(2) 利別川合流點附近切替工事 延長八百三十八間此土量七萬七千七百六十二坪にして既に昭和四年年度完了

(3) 途別川切替工事 掘鑿四萬六千

百四十七坪延長三十四町十五間施行の昭昭和五年度全工事竣功

(4) 帶廣川切替工事 帶廣市街の中心西二條橋より下流合流點に至る延長千六百五十五間の新河道を掘鑿此土坪四萬六千四百三十坪にして目下の出來高四萬二千六百坪で昭和六年度竣功の見込

(5) 猿別川切替工事 合流點附近に於て延長五百三十三間の新河道を掘鑿し兩岸には護岸工を施行す此土量一萬二千九百八十三坪で昭和四年度に於て竣功した。

(6) 護岸工事 新水路の兩岸全部並に在來水路中水勢激衝し缺壞甚しい部分を選び一萬九千七百七十二間餘の延長を施行するもので現在迄に(1)本流の分中千二百三十三間實施濟(2)支流の分の中利別川三百二十九間四分、途別川三千九百三十三間全部竣功、帶廣川二千四百五十四間四分完了

利別川治水工事 第二期拓殖計劃に於て本工事費總額四百二十六萬七千八百四十圓を以て昭和十五年年度以降繼續六ヶ年の豫定にて實施の筈

雨龍川治水工事 總額六百二十九萬七千二百四十圓を以て昭和十六年度以降繼續六箇年事業として實施の豫定

網走川治水工事 總額五百八十八萬七千四百八十圓で昭和十四年度以降七箇年繼續事業として實施の豫定

續事業として實施の豫定

湧別川治水工事 總額四百四十萬七千五百二十圓で昭和十三年年度以降繼續七箇年の事業として實施の豫定

天鹽川治水工事 總額一千五百七萬四千五百八十圓で昭和十五年年度以降繼續七箇年事業として實施の豫定

北海道地方費施設河川事業

河川監視 重要なる二十八箇川に對し河川監視員二十四人を配置し取締をなさしめる。

河岸堤防並排水運河の修持維持 護岸工事の應急的工事として豫算年額十三萬圓を計上、排水運河は現在に於ては耕地排水の幹線溝路として利用されるものばかりで、運河としては殆ど用をなさない有様である。

堤防敷地保護 堤防敷地整理並保護の計劃を樹て先づ堤防敷地を實測して漸次其の境界を明かにし治水上支障あり認められた區域は耕作を禁止するに其の殘地に對しては水田及長根作物を除いた開墾を認むる方針で大正二年四月廳令第三十四號を以て堤防敷地特別使用規則を制定し使用料は之を地方費に收入し使用地先河岸には受許可者に對し揚柳植栽の義務を負はしめ一方義務植栽者なきヶ所を河岸保護上必要なる部分には地方費で之を施行したが、此工費年額七萬圓乃至三萬圓であつたが、地方費に收入する使用

料は年々十數萬圓に達し一の財源を爲すに至つた。其後諸種の事情によつて右の堤防敷地特別使用規則を昭和七年末限り廢止することに決した。

事業施行の方法

本道河川に關する事業は道廳直轄の外土木事務所、治水事務所、支廳に左の様に分配して施行してゐる。

一、河川調査 道廳直轄

一、堤防敷地整理 道廳直轄

一、護岸工事 (地方費所屬を含む)

一、浚渫工事 (以上毎年事業箇所を指定して各所轄土木事務所にて施行させる)

一、河川監視 (地方費所屬を含む)

一、監視河川適宜の地に駐在させ各所轄土木事務所長をして指揮監督させる

一、地方費施設の内河岸保護、揚柳植栽、法切柳枝工

一、各所轄支廳に於て施行させる

一、治水工事

左の治水事務所を特設して施行させる

一、札幌第一治水事務所 石狩川本流工事施行

一、札幌第二治水事務所 豊平川、江別夕張、千歲川工事施行

一、帶廣治水事務所 釧路川、常呂川、十勝川工事施行

土地改良事業

本道に於ける土地改良事業は重要之を三大別にする事が出来る即ち排水事業及灌漑事業並特殊土壤の改良事業である

排水事業は本道各地に散在する泥炭地及濕地約二十五町歩を改良して之を農耕地として利用を可能にさせ拓殖民上に資せんとするもので既に之が事業の遂行を了し現に墾成耕地と化したものも鮮くない。

又灌漑事業は水田灌漑の事業を獎勵し本道水田適地四十五萬町歩の造成を促進せんが爲に行ふ施設で基本調査並獎勵事業等に區分し近時勃興した水田造成の機運に順應せんとするに在る。

次に特殊土壤の改良は客土及酸性土壤の改良で前者は泥炭地に對し普通土壤の客入を爲し後者は酸を強く爲し植生に適さない土壤の改良を爲し農地としての利用價値を昂上せしめんとする事業である

泥炭地、濕地面積及改良面積表

(昭和六年三月末現在)

支廳別	面積	同			計	將來改良を要する面積
		國	費上	補助工事		
後上空石	四〇、六五〇町	一七、三三四町	四、七〇七町	一、八四五町	一三、八七六町	
志川知狩	三、六七八町	一四、一九二町	三、五五五町	一、八四二町	一八、〇〇八町	
土	一五、四二四町	一〇、〇六一町	一、八八九町	二、九四四町	一五、〇〇七町	
木	三、三三六町	一、〇六一町	一、八八九町	二、九四四町	三、三三六町	
					三二七	

是等事業の施行に要する經費は其一部を北海道地方費の支出に求める外は全部金額年々三百數十萬圓より漸次九百數十萬圓に迫るものである。

而して本事業は實施以來未だ幾何もならないが泥炭地の改良を了したものと昭和六年三月末迄に十萬餘町歩、灌漑反別は二十五萬五千餘町歩に達した。

以下是等につき概説しよう。

排水事業 本道には泥炭地と稱する特殊の土壤がある之氣温が低いので地勢の關係上自然に水の溜溜するが爲め「ヨシ」「スゲ」「ミコケ」等の植物が所謂泥炭化作用を受け生成されたもので多く河川の附近に存在し全道に分布し其總面積約二十五萬町歩ある。是等泥炭地濕地は自然の状態では農耕地として不適當であるが之に排水溝を掘鑿し乾燥を圖る時は自然改良され充分に農地として利

用することゝ出來殊に根室、釧路、宗谷等氣候寒冷な地方の一部を除いては利用の便を得て水田と爲すことが出来る。

而して北海道拓殖費では泥炭地濕地の改良として大小の排水溝を掘鑿して溜溜水を排除し土地を乾燥させる事業を施行して居る。即ち改良工事は施すに地温高まり分解並腐蝕作用が行はれて兩三年で普通土壤と殆んど異ならぬ様になり畑水田等の耕地として利用することが出来る。

道廳では拓殖費で全道泥炭地濕地の利用に關する調査を進めて居るに共に之が改良に關する調査をも進め土地所有關係の状況を考慮し其の一圃地の面積五百町歩以上、大正十四年度迄は一圃地一千町歩以上の土地に對しては國費を以て排水幹線を掘鑿し又民間の改良施設に對しては改良面積一圃地三十町歩以上のものに對し其の幹線又は支線の工費に其十分の五の補助金を與へて獎勵して居る。

支廳市別	水田適地	灌溉許可	反作付水田	收穫高
留宗網	二、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
根室	三、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
釧路	三、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
河川	三、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
浦島	三、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
渡島	三、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
後志	三、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
上川	三、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
空知	三、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
石狩	三、三、六、七	三、三、六、七	四、七、六	二、〇、七
計	二、〇、七	二、〇、七	二、〇、七	二、〇、七

排水事業の奨励
排水事業は前述の如く道廳では國費で直接工事を施行する外一團地五百町歩以上のもの、外は別に奨励の方法を設け之が改良を促進して居る即ち設計及工事費補助が即ち之である(1)排水設計 此設計は民間の出願に依つて施行するもので其測量人夫賃、測量杭其他の諸雜費(一段當り十錢)を負担させ、道廳の出願地に就いて如何なる方法に依るに最も容易に改良の實績を挙げ得るやを調査研究し其設計圖書を交付し起業の助成を爲すものである。大正八年度より昭和五年度迄に調査設計をした成績は左の通り。

支廳市別	補助金額	面積
留宗	一、〇五五、〇五三圓	一、三、九〇〇町
網走	四九六、五一三圓	一、〇〇〇町
計	一、五五一、〇〇六圓	二、三、九〇〇町

海道土功組合法發布せられ次で同年九月同施行令發布せられると一千四百町歩の灌溉段別を有つ角田村土功組合、千三の町歩の灌溉を計畫する岩見澤町川向土功組合等相次いで起り現在一組合の區域四、五千町歩を算するもの多數ある状態である。殊に北海道土功組合の如き一萬一千百町歩の大區域を有つものを見る様になつたのである。而して組合法發布當時に於ける灌溉段別は一萬六千五百町歩に過ぎなかつたが十ヶ年後の大正元年には四萬五千七百二町歩に増加し越えて昭和四年の灌溉反別は實に十五萬二千六百餘町歩を算するの域に達し、人をして全く隔世の感あらしむるに至つた。曩に本道産業調査會に於て本道中央部以南に於て約三十萬町歩の水田適地を選定したが右調査會で選定をなした河川、網走、釧路、根室、宗谷等の各支廳管内に於ける試作の成績に依るに水田適地として

加ふべき段別少くないばかりでなく現に曩に不適地とした網走の如き一萬町歩、河西亦九千餘町歩、其他釧路國、宗谷、根室等の各支廳に於ても亦相當造田せられてゐる現状であるから道廳に於て更に之が調査をした結果四十五萬町歩の適地

を得た。北海道拓殖費中の土地改良費に曩に記述した泥炭地濕地の改良及特殊土壌改良事業を施行するの外適地の造田を奨励し、將來本道の水田を以て四十五萬町に達せしめようとする計畫で、之が爲灌溉の基本調査、灌溉溝の設計を爲す外

に灌溉工事費及造田費に對して補助等を爲し、昭和二年度以降二十ヶ年度に亘つてこの完成をしようとしてゐる。今道廳が水田奨励の爲行つてゐる事業の施設内容を概説しよう。

北海道水田適地段別表
(道廳土地改良課調査 昭和四年末現在)

支廳市別	水田適地	灌溉許可	反作付水田	收穫高
石狩	三、七、四、一	一、七、二、五	一、三、七、三	二、〇、六、二
空知	七、九、五、四	五、九、九、二	五、五、四、四	八、二、九、一
上川	八、六、二、三	六、七、五、〇	八、一、七、四	八、八、一、七
後志	二、四、五、三	一、四、四、三	一、〇、八、〇	一、〇、八、〇
渡島	九、三、六、六	五、五、五、五	四、二、九、〇	三、三、三、〇
浦島	一、三、一、六	一、三、一、六	一、三、一、六	一、三、一、六
根室	一、三、一、六	一、三、一、六	一、三、一、六	一、三、一、六
計	二、五、二、五	一、七、二、五	一、三、七、三	二、〇、六、二

灌溉基本調査
前述の本道水田適地約四十五萬町歩を各支廳及市別に區分する時は前表の如くで今後の開發に俟つべきものが頗る多い。灌溉基本調査は是號未開の水田適地に對し造田區域、純灌溉反別、土性、引用水量、引用河川の湧水量、水路の位置、貯水池の設備、揚水機の設置箇所、工事費の概算等灌溉計畫に必要な各般の事項を調査し、水田計

畫上の便に資せんとするもので、曩に大正二年から同四年に亘つて道内七十箇川に對し北海道地方費でこの調査を行ひ、適地百箇所を選定したが經費の都合上繼續するに至らなかつた。爾來五ヶ年開田の機運大に熟し曩日の調査は到底此の異常の趨勢に満足するに必要と出たので大正九年から拓殖費で再び調査を計畫

し大正十年度以降之を繼續調査し昭和五年度迄に完了した約二十一萬町歩で其經費二十萬圓に達した。
(1)灌溉設計
水田經營の爲め灌溉溝を施設しようとする時に當つて其工事の設計は最も重要なものである。然るに民間に於ては之に適當な技術者を得難し當業者の受ける不利不便が尠くないのに

鑑み、道廳に於ては之に對し適當な施設を講ずることの緊要なることを認め明治廿七年四月灌漑工事設計調査規程を發布し北海道地方費を以て普く起業者の爲に其設計の申請に應ずることになり其助長奨

灌漑溝工事設計濟表

(道廳土地改良課調査)

Table with columns: 種別, 箇所, 設計面積, 幹線水路延長, 工事費額. Includes data for 地方費, 國費, and various project types like 灌漑溝工事, 自昭昭五年度, etc.

(2)灌漑溝工事費補助 本道水田の好望で畑作に較べ遙に有利である事が一般に認められて以來土地所有者が水利の便を得て開田しようとするに至つたのも素より當然の事であるが工事費が巨額に上る關係上急速の發達を見なかつたが

溝の改良工事に對しても三割以内の補助が與へられる様になつた。今補助規程發布以來拓殖費を以て灌漑工事費補助を爲した段別及補助指令金額を示せば左の通りである。

大正九年十二月補助規程が發布され茲に灌漑溝及土地改良排水溝の幹線工事費に對し補助が與へられる途が開かれてから其氣勢頓に昂つた。灌漑溝の補助は其の幹線工事費に對してのみ四割内外が與へられて居つたが其補助は府縣に於ける助成に比し著しく少額の憾があり隨つて事業經營者の困窮に陥つたものが尠くない状態に鑑み昭和元年度からは幹線及支線の工費に對し各五割以内の補助が與へられる計畫に改められた外尚昭和二年度からは市町村及土功組合の施設に係る灌漑

自昭昭五年度 灌漑溝支線工事補助費 六二 二八、九三七町 一、五〇七、二九三町 六九九、九三九町

自昭昭五年度 灌漑溝改良工事費補助 六五 一三〇、四九七町 二、二九七、四八一町 九四一、〇一六町

査定事業費九、二一六、三五七、〇〇圓 補助金額三、八八一、五九〇、一五〇圓

管むことが出来る。即ち昭和元年度以降此改良費に補助が與へられ以て改良促進の計畫が實施された。又泥炭地の改良方法としては先に述べた様に排水溝を掘鑿して其乾燥を圖る外に該土地に鑛質土壤を客入して土壤の改良を爲すのでなかつたならば完全な泥炭地の改良と云ふことが出来ない故に昭和二年度から新に客土事業に對し國費補助の途が開かれ以て其利用効果の増進が圖られる様になつた。

酸性土壤改良費補助事業狀況 之が改良を圖る爲め昭和元年度から道廳では改良助成計畫を樹て其事業費に四割以内の補助を與ふることを、し現に實施中であるとして此計畫實施以來未だ五ヶ年を経過したばかりであるが事業者間によく理解され今後補助促進によつて一層改良面積の増加を來さんとするの趨勢に在る。

鑛質酸性土壤分布表

(道廳土地改良課調査)

Table with columns: 支廳別, 段別, 支廳別, 段別, 支廳別, 段別, 支廳別, 段別. Lists locations like 上空石, 川知狩, 渡檜後, 島山志, 根釧河, 室國西, 計留宗, 崩谷.

今昭和元年度より昭和五年度までの補成狀況は左の通り

之を實施した。即ち昭和二年度から同五年度までの客土費補助額左の通り

置するもので本道獨特の施設である。明治三十五年法律第十二號で北海道土功組合法が發布せらるゝや之に依つて各所に水田經營の目的で土功組合を設置するもの相踵き昭和六年六月末に於て組合數二百二十七、之を目的別に分類すれば灌漑溝を目的とするもの二百八組合、十四萬二千四百十餘町歩、排水を目的とするもの十一組合、灌漑反別一萬三千五百九十餘町歩、排水を目的とするもの七組合、一萬一千九百四十餘町歩、堤塘を目的とするもの一組合、八百二十餘町歩である。

査定事業費 一、九〇二、二五五 補助金額 四九、一五五 客土補助事業狀況 拓殖計畫に於ては本道泥炭地約二十萬町歩の内中間泥炭及高位泥炭の一部即ち總面積六萬町歩に對し反當三立坪乃至十立坪(昭和三年度迄は六立坪)の客入工事費の五割以内を補助することになり昭和二年度に初めて

規定面積 八、四一七、九四町 規定事業費 一、七三〇、七一七、〇〇圓 補助金額 八〇六、五〇五、九〇圓

三三三

行發圖掛育教級高

刷印術美新最

會株
社式

三
重
出
版
社

支社
東京・神田・榮町
地下鐵末廣町驛前

電 話 下 谷 (83) 三 八 二 番
振 替 東 京 七 五 八 三 番
取 引 銀 行 安 田 銀 行 下 谷 支 店

製 本

本

加

藤

藤

一

電	錦	東
話	町	京
二	三	市
五	ノ	神
二	一	田
九	七	區

- ◇ 世界大動物生態實寫掛圖 プロセス寫真製版 第壹輯、第貳輯 各四・〇〇
- ◇ 新世界人種風俗掛圖 プロセス寫真製版 (洲別) 各洲三・五〇
- ◇ 醫學博士愛川東平先生監修 模範人體解剖掛圖 プロセス寫真製版 第壹輯 八・四〇 第貳輯 七・六〇
- ◇ 幾何形態を日本地圖の描き方基本とせる 一・五〇 四・〇〇
- ◇ 吉本和一先生著 最新消化榮養解説圖 八・〇〇
- ◇ 東京市視學山本キク子先生校閱 東京小石川區小學校裁縫研究会編纂 裁縫教授用掛圖 和服一三・五〇 洋服五・〇〇
- ◇ 文部省理科家事教科書準據 家事科示導掛圖 五・五〇
- ◇ プロセス寫真製版 第壹輯、第貳輯 各四・〇〇
- ◇ 國民紀念日用掛圖 紀元節、陸軍紀念日、明治節、海軍紀念日 各一・〇〇 二・三〇
- ◇ 日本雨量海流等溫線壓風向圖 壓風向圖 各二・四〇 四・二〇
- ◇ 世界雨量海流等溫線壓風向圖 各二・四〇 四・二〇
- ◇ トラホーム掛圖 一・七〇 二・一〇 四・六〇
- ◇ 最新關東州地圖 二・五〇 四・五〇

(社支京東社版出重三・町榮・田神・京東)

教育

學事概況

初等教育 昭和四年度に於ては前年度の方針を繼承して一層その進歩改善の實を擧げること努力した。即ち設備の完成、有資格教員の充實を期し一面就學の督勵と相俟て就學の狀況が漸次良好に向つて居る。

中等教育 中等教育に於ては各學校の募集人員の増加に依つて中學校高等女學校の入学難益々緩和されたが、各校は生徒の増加に伴つて校舎の増築、設備の完成を期する必要に迫られて居るものがあつたので地方財政の許す限りこの擴充が圖られた。尙昭和五年度には町立高等女學校一校が地方費に移管された。高等教育 本道に於ける高等教育としては北海道帝國大學及高等商業學校一

小學校尋常科兒童學年別並市廳別一覽

(昭和五年三月末現在) (道廳教育兵事課調査)

(昭和五年三月一日現在) (北海道廳調査)

函札	支廳市別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	第六學年	計
計	市	一三〇七	一四七七	一五七五	一八四七	一七三三	一五八三	一四四七
市	市	一三〇七	一四七七	一五七五	一八四七	一七三三	一五八三	一四四七
計	市	一三〇七	一四七七	一五七五	一八四七	一七三三	一五八三	一四四七

教育

三三七

校があり、前者は從來の農學部・醫學部設置開始の外に昭和五年度より理學部が設置され且つ同學部附屬の豫科・土木専門部・水産専門部の外農學部農學實科・林學實科があるが、中等學校の増設生徒の増加に依り卒業生中上級學校の志望者は是等卒業生中上級學校の志望者は満すことが出来ない状態である。故に今後は進んで法・文學部の併置及高等學校、實業專門學校並中學校教有養成機關の設置に至るまで、各種の計畫全部實現を期さればならない。

社會教育 社會教育にあつては圖書館の設備完成、展覽會、體育會、音樂會、育英機關等の設立を奨勵し、青年團、女子青年團、少年團の誘掖善導に努めて居るので逐年良好の成績を擧げて居る。

初等教育

一、學齡兒童數 (昭和五年三月末現在) (道廳教育兵事課調査)

男 二六、九三三 二五、三三六 二五、三三八 二六、七三三 二六、六三三 二六、八三〇 二五、七三三 二五、七三三 二六、〇三三 二六、〇三三 二六、〇三三

女 二五、三三八 二五、三三八 二五、三三八 二六、七三三 二六、六三三 二六、八三〇 二五、七三三 二五、七三三 二六、〇三三 二六、〇三三 二六、〇三三

計 五二、三七一 五二、三七一 五二、三七一 五三、四六六 五三、四六六 五三、四六六 五二、四六六 五二、四六六 五二、四六六

二、學校數 (昭和五年九月一日現在) (道廳教育兵事課調査)

高等小學校 五八五

尋常高等小學校 八五五

尋常小學校 八〇〇

分教場 二八四

特別教育規程に依る尋常小學校 二二四

特別教授場 二八六

計 二、〇三五

三、學級數 (昭和五年四月一日現在) (道廳教育兵事課調査)

尋常科 七、四一七

高等科 一、二〇八

計 八、六二五

總 計	石 志 山	後 志 山	檜 島	渡 振	瀧 河	浦 西	鉦 國	網 走	宗 谷	留 舘	札 川	旭 樽	小 館	函 路	室 蘭	銅 計	市 町 村 立		
																	私 立	公 立	
七、一八七	一、二六	二、一六	四、一三	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	七、一八七	三、六八六	三、六八六
七、九二四	一、二六	二、一六	四、一三	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	七、九二四	三、九四〇	三、九四〇
七、四六三	一、二六	二、一六	四、一三	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	七、四六三	三、六二二	三、六二二
七、〇三三	一、二六	二、一六	四、一三	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	七、〇三三	三、九二七	三、九二七
三、七六〇	一、二六	二、一六	四、一三	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	三、七六〇	三、九二七	三、九二七
六、〇三五	一、二六	二、一六	四、一三	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	六、〇三五	三、九二七	三、九二七
四、七八三	一、二六	二、一六	四、一三	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	四、七八三	三、九二七	三、九二七

小學校高等科正教科兒童學年別並地方別一覽

(昭和五年三月一日現在) (北海道廳調查)

市 廳 市 別	市 廳 市 別													總 計				
	石 志 山	後 志 山	檜 島	渡 振	瀧 河	浦 西	鉦 國	網 走	宗 谷	留 舘	札 川	旭 樽	小 館		函 路	銅 計		
第一學年	二〇	五	三													二〇	二〇	二〇
第二學年	一〇五	七	三													一〇五	一〇五	一〇五
第三學年	二五	二六	七													二五	二五	二五
總 計	一六〇	三九	一〇													一六〇	一六〇	一六〇

備考 △印は私立小學校に係るもの
四、教員配置 (昭和五年六月一日現在)
道廳教育軍事課調査

本料正教員

七、一一五

專科正教員

二四七

准用教員 七五八
合計 一〇六三
九、一八三

五、教員俸給 昭和五年六月一日現在
道廳教育兵事課の調査によれば左の通り
資格別 月俸給額 月俸平均

本科正教員 四七、六三
准用教員 一三、三〇
合計 六一、九三
代用教員 五、七五
合計 五九、一八
専科勤務 九、〇三
合計 七、七三

六、小學校教員年功加給支給状況
昭和五年三月末日現在道廳教育兵事課調査
によれば左表の通りである。

幼稚園 三、二〇
合計 三、二〇
昭和五年九月現在道廳教育兵事課調査

による本道幼稚園状況左の通り

公立 三
私立 三
園児数 二
職員数 二
保育料 二
一四五十錢
一圓五十錢
二圓五十錢

舊土人教育

教育の概要 従来舊土人の教育は、
其の風俗、習慣並に児童の心性發達の情
況に鑑み、一般和兒童と年分教育する
方針で、成るべく學校を特設すると共に
和人學校に收容する場合でも、相當兒童
數がある場合は、學級を分たせ、且つ教
育の實質に於ても、特に舊土人兒童教育規
程を發布して、就學年齢は満七歳、修業
年限は四ヶ年を本體とし、教科目地理
歴史、理科を省き、専ら簡易に實生活に
役立つものを目的として修養を施した
が、其の後一面經費削減の餘儀ないもの
があつたのと、一方亦逐年道落の開墾と
共に漸次生活上の自覺向上に伴つて、兒
童の教育に對しても、和人との合同教育
を希望するもの漸く多くなつて來た實情
に鑑み、先以て學校の整理に着手し、學
校數二十一年度迄に九校を廢止したが、昭
和二年に於て土地の状況其他の事情で
平取村に一校を増設した。一方教育の實

實に於ても從來の方針を改め、大正十一
年四月舊土人兒童教育規定を廢止し、混
合教育を奨励すると同時に、就學年齢及
修業年限、學科目等凡て一般和人士小學校
と同様とした。

因に道の改正實施後の情況に關し大正
十二年六月舊土人小學校長會議に際し諸
問し答申を徴したのに校下父兄一般頗る
歓迎する所であると共に之が教育の内容
に於てもよく教材を精査し教授上周到の
手心をなす時は大體に於て何等支障ない
と云ふことである。

就學の情況 昭和五年三月末日現在
に於ける就學の情況は次の通りである。
舊土人人口 一五、〇八
學齡兒童數 二、五九
就學兒童數 二、二九
不就學兒童數 九、九
就學歩合 九、九
舊土人小學校 昭和五年三月現在に
於ける舊土人小學校は左の通り
白老郡白老村 白老郡白老村
累標郡常小學校 勇拂郡似瀨村
新平郡常小學校 沙流郡平取村
岡田郡常小學校 様似郡様似村
姉茶郡常小學校 浦河郡荻伏村
荷負郡常小學校 沙流郡平取村
二風谷郡常小學校 同
上貫氣別郡常小學校 同
長知内郡常小學校 同

日新尋常小學校 河西郡帶廣町
開道尋常小學校 河東郡音更村
春採尋常小學校 釧路市
白糠第二尋常小學校 白糠郡白糠村
計 一三

盲聾教育 現在本道に於ける盲聾教育機關とし
ては學校令に依つて居る財團法人函館育
噎院及び財團法人小樽盲聾學院、學校令
に依らない私立札幌盲聾學校がある。何
れも設備の完成と教授方法の改善とに意
を用ひてゐるが、後者の私立札幌盲聾學
校は特有の教育を施す傍、實業部を附設
して印刷・製本・木工・家具・建具・美
容・手藝・和服裁縫・ミシン裁縫・製菓

廳立師範學校は三校で、各校共校舍の
増改築等を行ひ尙器具機械圖書等も豫算
の許す限り購入し設備の完成を期してゐ
る。而して現在三師範學校から卒業者
を出すに至り漸く町村の學級増加に伴ふ
正教員の増員及欠員を補充する様になつ
た。
札幌函館兩師範學校に於て附屬小學校
を設け教生の練習に資してゐる外に各町
村立小學校一校を代用小學校として配置
して其不足を補つてゐる。旭川師範學校
は未だ附屬小學校の設けがなから市立
小學校を代用し教生の練習に供してゐ

師範學校一覽表

(昭和五年
道廳教育兵事課調査)

校名	開校年月	學科	學級	生徒定員	現在生徒數	教員數	卒業者總數	昭和五年度經常費
札幌師範學校	明治十九年九月	本攻科	二部	六四〇	五九四	三	三、七四	一九七、二四三
函伐師範學校	大正三年四月	本攻科	二部	六四〇	三三三	三	一、七三	一九四、七六八
旭川師範學校	大正十二年四月	本攻科	二部	六四〇	三三三	三	一、七三	一九四、七六八
計				二、一三〇	一、九三三	一〇六	五、七四	五七三、二五

高等普通教育

中學校

昭和六年度現在に於て本道に於ける中

學校は廳立十八、市立一、私立一の二十校である。而して之が入學志願者從來各校共毎年募集人員に數倍する状況にあつたが大正十一年度及十二年度に於ける學校の増加と募集人員の増加とによつて入

學緩和せられ、剩へ近年の經濟界の不況に崇られて昭和六年度に於ては募集人員二千九百五十名に對し志願者數は三千八百二十七名にして、募集人員の約一倍三分に過ぎず、その中町村所在の俱知安。

網走・八雲・稚内・余市の各中學校の如きは募集人員にさへ満たない有様であるかくの如き状況にて目下入學志願者の大部分を收容し得るに至つてゐる。

中 校 學 一 覽

(昭和五年四月現在)
(道廳教育兵事課調査)

設立	學校名	開校年月	學科	學級	現在生徒數	教員數	卒業者總數	昭和五年常費
私立	札幌第一中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	札幌第二中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	函館中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	旭川中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	釧路中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	室蘭中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	川中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	倶知安中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	岩見澤中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	名寄中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	網走中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	八雲中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	帶廣中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	稚内中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	余市南中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	留萌南中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	北見南中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	海部南中學校	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇
私立	市立	明治廿八年四月	理科	二五	一、二三五	三	二、九八三	六、四六〇

高等女學校

昭和六年十月末現在に於ける高等女學校

校數は廳立十三、市立三、町立一私立九

合計二十六校にして、實科高等女學校は町立五、市立一、町立四私立一合計十一校である。而して昭和六年度に於ける是等三十七校に對する入學志願者は四千二

百四十三人にして募集人員三千三百人の一倍二分九厘に當り、志願者の大多數は收容して居る現状にある其中廳立札幌高等女學校の二倍二分が最も應募率大で、廳

立網走・根室・苫小牧・名寄・深川の五校、私立綠丘・帶廣大谷・小樽双葉・聖得祿・函館實踐の各校の如きは募集人員にも満たない志願者數を示してゐる。

高等女學校一覽

(昭和五年四月現在)
(道廳教育兵事課調査)

設立	學校名	開校年月	學科	學級	現在生徒數	教員數	卒業者總數	昭和五年常費
廳立	札幌高等女學校	明治三十五年四月	理科	二〇	一、〇〇七	四	三、一九八	六、二七六・五〇
廳立	函館高等女學校	明治三十八年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
廳立	小樽高等女學校	明治三十九年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
廳立	旭川高等女學校	明治四十年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
廳立	室蘭高等女學校	大正八年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
廳立	釧路高等女學校	大正八年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
廳立	網走高等女學校	大正十一年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
廳立	根室高等女學校	大正十二年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
廳立	岩見澤高等女學校	大正十三年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
廳立	苫小牧高等女學校	大正十一年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
廳立	名寄高等女學校	昭和二年三月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇
市立	札幌市立高等女學校	大正十一年四月	理科	二〇	九五六	四	二、五八三	六、七九一・五〇

市立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立	同立		
小樽市高等女學校	北都高等女學校	深川高等女學校	瀧川高等女學校	北海高等女學校	綠丘高等女學校	函館大谷高等女學校	藤高等女學校	帶廣大谷高等女學校	小樽双葉高等女學校	姉妹高等女學校	聖得祿高等女學校	函館實踐高等女學校	余市町立立	實科高等女學校	稚内町立立	實科高等女學校	岩内實科高等女學校	富良野實科高等女學校	俱知安實科高等女學校	池田實科高等女學校	江別實科高等女學校	釧路實科高等女學校
大正十年四月	大正十年四月	昭和四年四月	昭和四年四月	明治四十三年四月	大正十年四月	大正十二年四月	大正十四年四月	大正十四年四月	大正十年四月	昭和三年四月	昭和三年十一月	昭和四年三月	大正十二年四月	大正十二年四月	大正十二年四月	大正十二年四月	大正十五年四月	昭和四年三月	昭和四年三月	昭和四年三月	昭和四年三月	昭和二年三月
補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科	補習科
一六	一六	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇
四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇	四八、八七〇〇

私立 市來知實科高等女學校
同 遠輕實科高等女學校
同 栗山實科高等女學校
同 旭川實科高等女學校

備考 深川、瀧川の二高等女學校は昭和六年四月一日北海道地方費に移管。池田實科高等女學校は昭和六年五月七日池田高等女學校に組織變更。

高等女學校に類する女學校一覽 (昭和五年三月現在)

(道廳教育兵事課調査)

學校名	設立者	設立年月日	位置	修業年限	生徒數	職員	經費
遺愛女學校	オーガスタ、デカルトン	明治一五、三、二五	函館市湯ノ川通	本専攻科 二五五	三三四	三三	三八、三〇〇〇
北星女學校	アリスモード、モンク	明治三三、八、一	札幌市南五條西十七丁目	本専攻科 二五五	三三四	三三	三三、二五〇〇

備考 北星校は大正八年四月、遺愛校は大正六年四月專門學校入學者檢定規程に依り文部大臣から指定せられた。

中等夜學校一覽 (昭和四年三月現在)

(道廳教育課調査)

學校名	設立者	設立年月日	位置	修業年限	生徒數	經費
釧路商業中等學校	平澤虎一	大正三、三、二二	釧路市	講本 三	七〇	一、八一〇〇
名寄中等夜學校	神山惟吉	大正三、三、二九	名寄町西四條	講本 三	二〇〇	九八二〇〇
札幌中等夜學校	阿部與作	大正三、四、二四	札幌市北三條西十八丁目	講本 三	二〇〇	四、七四八〇〇
札幌女子中等學校	工藤金彦	大正三、四、二四	札幌市北二條西十一丁目	講本 三	二〇〇	一、二〇〇〇〇

旭川中等夜學校	千葉精一	大正三、五、五	旭川市六條通十一丁目	高	二二	二二	三、六八、〇〇〇
函館中等夜學校	川村文平	大正三、六、一	旭川市	普	三	三	三、四〇〇、〇〇〇
根室實業夜學校	大和田誠壽	大正三、三、一	根室市	高	三	三	二、三三〇、〇〇〇

備考 本校の設立は當分私立とし維持費は授業料と補助による。校舎及校具は廳立學校々舎及校具を使用する。

實業教育

實業教育機關として實業學校は現在廳立十三、私立三校あるが、之を種別によつて分類すれば入學資格を修業年限二ケ年の高等小學校卒業程度とし修業年限二ケ三箇年とするものに廳立札幌・函館・苫小牧及私立夕張の四工業學校並に廳立空知・十勝・永山の三農業學校で、又甲種

水産に廳立小樽、甲種商船に廳立函館の各一校がある。商業學校には尋常小學校卒業程度を入學資格とし修業年限五箇年のものに廳立函館・小樽・根室・室蘭・旭川及私立札幌の六校、修業年限四箇年のものに私立北海の一校がある。又廳立札幌工業學校には尋常小學校卒業程度を以て入學資格とし修業年限三ヶ年の學科

を附設して居る。次に女子職業學校は町立七校にして、是を程度に依り區別する時は高等小學校卒業程度を以て入學資格とし修業年限二箇年のもの四校、尋常小學校卒業程度を以て入學資格とし修業年限四箇年のものが三校である。此外昭和五年二月開校に係る私立北海道女子高等技藝學校がある。

商業學校一覽

(昭和五年四月現在)
(道廳教育兵事課調査)

設立	學校名	開校年月	學科	學級	現在生徒數	教員數	卒業者數	昭和五年常費
私立	札幌商業學校	大正九年四月	本科	二五	八二五	二五	一、三三七	四、九〇〇、〇〇〇
私立	北海商業學校	大正七年四月	本科	一〇	四〇一	二五	四〇〇	二、三三〇、〇〇〇
同	旭川商業學校	大正十二年五月	本科	一〇	八五三	二五	一、三三七	二、三三〇、〇〇〇
同	室蘭商業學校	大正十二年五月	本科	一〇	四〇一	二五	四〇〇	二、三三〇、〇〇〇
同	根室商業學校	大正十二年五月	本科	一〇	四〇一	二五	四〇〇	二、三三〇、〇〇〇
同	小樽商業學校	大正十二年五月	本科	一〇	四〇一	二五	四〇〇	二、三三〇、〇〇〇
同	函館商業學校	大正十二年五月	本科	一〇	四〇一	二五	四〇〇	二、三三〇、〇〇〇

工業學校一覽

(昭和五年四月現在)
(道廳教育兵事課調査)

設立	學校名	開校年月	學科	學級	現在生徒數	教員數	卒業者數	昭和五年常費
廳立	札幌工業學校	大正六年四月	探採機鑄	一五	三六五	三	一、〇〇〇	八五、八四七、五〇〇
同	函館工業學校	大正十一年四月	土木建築	一五	三六三	二七	五五四	六、九〇四、五〇〇
同	苫小牧工業學校	大正十二年四月	機械電氣	一五	三三〇	三	三六〇	五四、九一〇、〇〇〇
私立	夕張工業學校	大正九年四月	探採機鑄	一五	二一七	一〇	二五〇	三三、五〇二、六四〇

農業學校一覽

(昭和五年四月現在)
(道廳教育兵事課調査)

設立	學校名	開校年月	學科	學級	現在生徒數	教員數	卒業者數	昭和五年常費
廳立	空知農業學校	明治四十年四月	畜産	三三	一一三	一	一、一九八	五〇、一四四、五〇〇
同	十勝農業學校	大正十一年四月	農林	三三	一一九	一	二四三	三六、五八二、三〇〇
同	永山農業學校	大正十二年四月	農林	三三	一一七	一	二二九	三五、三九八、五〇〇

水産學校一覽

(昭和五年四月現在)
(道廳教育兵事課調査)

設立	學校名	開校年月	學科	學級	現在生徒數	教員數	卒業者數	昭和五年常費
同	水産學校	大正十二年四月	水産	三三	一一七	一	二二九	三五、三九八、五〇〇

設立	小樽水産學校	明治廿八年四月	本科	九	二五	一七	三六	四、五三・五〇
----	--------	---------	----	---	----	----	----	---------

商船學校一覽 (昭和五年四月現在)
(道廳教育兵事課調査)

設立	函館商船學校	明治卅四年四月	航海科	五	一七	一九	一〇〇	六、六三・五〇
----	--------	---------	-----	---	----	----	-----	---------

職業學校一覽 (昭和五年四月現在)
(道廳教育兵事課調査)

設立	學校名	開校年月	學科	學級	生徒數	教員數	卒業者數	昭和五年常費
町立	岩見澤女子職業學校	明治四十年七月	本專科	二	二八	一	一、八三	一九、八八・〇〇
同	壽都女子職業學校	明治四十二年六月	本別科	一	二〇	七	六〇	四、六七・〇〇
同	名寄女子職業學校	大正九年六月	本別科	一	一〇	七	八一	五、七五・〇〇
同	深川女子職業學校	大正十年四月	本別科	一	一〇	七	三六	五、七八・〇〇
同	伊達女子職業學校	大正十一年七月	本別科	一	一〇	一〇	四五	一、八七・〇〇
同	留萌女子職業學校	大正十一年七月	本補習科	一	二六	九	三五	五、一五・〇〇
同	野付女子職業學校	大正十二年五月	本補習科	一	二七	九	三五	一九、七八・〇〇
私立	北海道女子高等技藝學校	昭和五年二月	本科	五	二〇	二	一五〇	一三、四四・〇〇

實業補習教育

實業補習教育は教育上重要な部分を占めてゐるに不拘従來動もすれば等閑視され有名無實の譏を免れない状態も見えぬでもなかつた。當局に於ても是が振興の必要を感じ本道に於ては昭和四年四月十二日北海道廳訓令第十六號を以て實業補習教育主事を置くことに定め、其職務規程も公布された。

學科別校數 昭和六年五月一日現在
道廳教育兵事課の調査によれば本道内實業補習學校數は三百四十三校にして其の種別は左の通りである。

農九三、工二、商四、商工、農水一六
水裁三、農裁九九、商裁一、裁八〇、

實業補習學校生徒數調 (昭和六年五月一日現在)
(道廳教育兵事課調査)

種別	前期			後期			高等科研究科				合計	
	一年	二年	三年	一年	二年	三年	四年	一年	二年	三年		四年
市立	一三四	一五二	一	六〇	三三	一五	一	九三	一四	一	一	一、三〇
町村立	一、七六二	一、七四二	一、六八五	一、六六八	一、九三三	一、〇六	一	二二	一〇三	七	七	四、〇三
私立	七〇	六五	二〇	五二	七二	一三	一	一	一	一	一	一六五
合計	一、九二六	一、七九三	一、七〇五	一、八五九	一、九三三	一、一八	一	一〇四	一六	七	七	五、七〇
男女別	女一、三九三	女一、三三六	女八〇	女一、八五九	女一、九三三	女一、二九一	女六	女四七	女一六	女七	女七	女六、三三
男女別	男一、五三三	男四五七	男一、六二五	男一、六六八	男一、〇六	男一、一八	男一	男五七	男一	男一	男一	男一、三六

特別に依る校數 昭和六年五月一日現在による校數は次の通り

男	一四三	一五一	五〇	計	四三
女	一〇	七	一〇	計	二七
男女合併	一〇	七	一〇	計	二七

教授季節及時刻別校數 昭和六年五月一日現在の状況左の通り

(イ) 季節制別 (通年) 一〇 四季 二 三 九 計 三 四 三

(ロ) 時刻

通年	書	夜	計
季節	三	九	一
計	三	九	一

昭和六年五月一日現在の状況左の通り

教育

主要科目別補習學校生徒數目
(昭和四年現在道廳調查)
男 女 計

農業 一、九六
商業 三〇三
工業 三〇
水產 八〇七
其他 二、一七五
計 三、五〇〇

高等實業補習學校一覽

(昭和三年三月末日現在)
道廳教育兵事課調查

校名	設立者	位置	經費	修業年限	實業科目	教授季節
石狩國高等國民學校	札幌教育會	札幌市	一、七〇〇	二箇年	農、水	夏季、四季實習
八雲高等國民學校	岩見澤町會	岩見澤町	二、三三三	同	同	同
空知高等國民學校	山見澤町會	山見澤町	二、四四五	同	同	同
永山高等國民學校	同	同	二、五五五	同	同	同
端野高等國民學校	同	同	二、六六六	同	同	同
厚野高等國民學校	同	同	二、七七八	同	同	同
十勝青年學校	三村村會	三村町	二、八八八	同	農、裁	同

實業補習學校教員養成所

(昭和四年四月現在)
道廳教育課調查

名稱	修業年限	生徒數	教員數	經常費
北海道廳立實業補習學校教員養成所	一箇年	一九	一三	六、〇三六

備考 大正十二年四月開校、當分廳立空知農學校に併置す。

廳立中等學校入學志願者等の調

(道廳教育兵事課調查)

學校名	昭和五年	昭和六年	募集人員	志願者數
札幌師範學校	二、七九	三、〇三	一、〇〇〇	一、〇〇〇
函館師範學校	一、九八	二、一四	一、〇〇〇	一、〇〇〇
旭川師範學校	一、四九	一、六五	一、〇〇〇	一、〇〇〇
計	六、一六	六、八二	三、〇〇〇	三、〇〇〇

教育

校名	種類	受願者數	受験者數	許可者數	受驗者に對する許可歩合	募集人員	志願者數
札幌第一中學校	中	三、七二	三、〇〇	二、四八	六六	一、〇〇〇	一、〇〇〇
札幌第二中學校	中	三、〇〇	二、七〇	二、二六	七五	一、〇〇〇	一、〇〇〇
小樽中學校	中	二、五二	二、二二	一、八八	八三	一、〇〇〇	一、〇〇〇
旭川中學校	中	二、二二	一、九二	一、五八	七二	一、〇〇〇	一、〇〇〇
室蘭中學校	中	二、〇五	一、七五	一、四一	八〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
釧路中學校	中	一、九八	一、六八	一、三五	七〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
岩見澤中學校	中	一、八七	一、五七	一、二二	六五	一、〇〇〇	一、〇〇〇
名寄中學校	中	一、七九	一、四九	一、一四	六三	一、〇〇〇	一、〇〇〇
野付中學校	中	一、六八	一、三八	一、〇三	六一	一、〇〇〇	一、〇〇〇
網走中學校	中	一、五九	一、二九	〇、八八	五五	一、〇〇〇	一、〇〇〇
帶廣中學校	中	一、四七	一、一七	〇、七六	五二	一、〇〇〇	一、〇〇〇
八雲中學校	中	一、三八	一、〇八	〇、六七	五二	一、〇〇〇	一、〇〇〇
留萌中學校	中	一、二〇	〇、九〇	〇、五〇	四二	一、〇〇〇	一、〇〇〇
稚內中學校	中	一、〇六	〇、七六	〇、三五	三二	一、〇〇〇	一、〇〇〇
余市南中學校	中	〇、九〇	〇、六〇	〇、二〇	二二	一、〇〇〇	一、〇〇〇
函館中學校	中	五、三三	四、〇三	三、四六	八三	一、〇〇〇	一、〇〇〇
計		二、二七	二、〇七	一、六八	七四	三、〇〇〇	三、〇〇〇
旭川師範學校	專攻	一、七九	一、四九	一、一四	六三	一、〇〇〇	一、〇〇〇
函館師範學校	專攻	一、九八	一、六八	一、三五	七〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
札幌師範學校	專攻	二、七九	二、四九	二、一四	七六	一、〇〇〇	一、〇〇〇
計		六、五六	六、二六	五、〇〇	七六	三、〇〇〇	三、〇〇〇

校名	受願者数	受験者数	許可者数	受験者に對する許可歩	募集人員	志願者数
北海計	1,149	1,149	613	53.4	1,000	1,149
旭川計	210	210	100	47.6	200	210
池田	50	50	25	50.0	50	50
江別	30	30	15	50.0	30	30
栗山	30	30	15	50.0	30	30
遠軽	30	30	15	50.0	30	30
市来	30	30	15	50.0	30	30
俱知路	30	30	15	50.0	30	30
富野	30	30	15	50.0	30	30
岩内	30	30	15	50.0	30	30
稚内	30	30	15	50.0	30	30
余市	30	30	15	50.0	30	30
計	1,149	1,149	613	53.4	1,000	1,149
聖保	70	70	35	50.0	70	70
函館	100	100	50	50.0	100	100
小樽	100	100	50	50.0	100	100
帶広	100	100	50	50.0	100	100
藤岡	100	100	50	50.0	100	100
函館	100	100	50	50.0	100	100
北川	100	100	50	50.0	100	100
北川	100	100	50	50.0	100	100
深川	100	100	50	50.0	100	100
北川	100	100	50	50.0	100	100
小樽	100	100	50	50.0	100	100
札幌	100	100	50	50.0	100	100
北川	100	100	50	50.0	100	100
計	1,149	1,149	613	53.4	1,000	1,149

應立以外の公私立中等學校入學志願者等の調

(道廳教育兵事課調査)

校名	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年
總計	1,149	1,149	1,149	1,149	1,149
小樽	100	100	100	100	100
旭川	210	210	210	210	210
池田	50	50	50	50	50
江別	30	30	30	30	30
栗山	30	30	30	30	30
遠軽	30	30	30	30	30
市来	30	30	30	30	30
俱知路	30	30	30	30	30
富野	30	30	30	30	30
岩内	30	30	30	30	30
稚内	30	30	30	30	30
余市	30	30	30	30	30
計	1,149	1,149	1,149	1,149	1,149
聖保	70	70	70	70	70
函館	100	100	100	100	100
小樽	100	100	100	100	100
帶広	100	100	100	100	100
藤岡	100	100	100	100	100
函館	100	100	100	100	100
北川	100	100	100	100	100
北川	100	100	100	100	100
深川	100	100	100	100	100
北川	100	100	100	100	100
小樽	100	100	100	100	100
札幌	100	100	100	100	100
北川	100	100	100	100	100
計	1,149	1,149	1,149	1,149	1,149

札幌商業學校	夕張工業學校	岩見澤女子職業學校	名寄女子職業學校	深川女子職業學校	伊達女子職業學校	留連女子職業學校	野付女子職業學校	北星女子學校	遺愛女子學校	北海道女子高等技藝學校	合計
5,592	3,355	1,477	3,366	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	5,916	51,916

5,592	3,355	1,477	3,366	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	5,916
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

4,853	3,355	1,477	3,366	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	5,916
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

3,521	3,355	1,477	3,366	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	5,916
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

7,844	3,355	1,477	3,366	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	5,916
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

3,855	3,355	1,477	3,366	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	5,916
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

4,199	3,355	1,477	3,366	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	5,916
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

備考 深川、瀧川の各高女は昭和六年度から廳立に、池田實科高女は昭和六年五月七日池田高等女學校に組織を變更した。

社會教育

社會教育は従來通俗教育の名の下に行はれてゐたが、大正九年十月始めて社會教育主事設置され専ら是が任に當ることになり、又翌十年には各市町村から社會教育に従事すべき官吏、學校職員、神官、僧侶約百名を選出して社會教育に關する講習が行はれた。

由來社會教育は其方面頗る多岐に亘つてゐるが、確實に而かも有力の効果を收

める爲めには青年の教養が最も捷徑であることか認め、青年團の指導には殊に力を注いでゐる。本道青年團は内務、文部兩大臣の訓令に基き、逐年堅實な發達を遂げ、其の組織の様なものも、漸次町村を團體の單位とし、村落青年團を支部若しくは分團とし、村青年團は更に支店廳を區域とする聯合青年團に依つて統整され大正十年には進んで全道聯合青年團の設立を見るに至つた。この施設の様なものも、飽くまで修養の方面に重きを置き、其の成績顯著なものあるから、現在市町

村費から補助金を與へこの獎勵をすると共に、其の完壁を期するものが尠くない青年團振興の方法としては、各市町村に於て幹部となる優良青年の養成を急務とし、道廳に於ては毎年青年團指導講習會を開き、又各支廳に於て夫々青年團講習會を開催させる爲、十年度から毎年一萬圓の地方費補助金を支出し、是等講習並に補習教育、體育等に調する施設を獎勵してゐる。

昭和五年四月現在本道青年團数は千四百七十七、團員九萬一千五百五十四人を算

する様になり各青年團は何れも大正七年五月内務文部再度の訓令を遵奉し修養團體としての實を擧げるこゝに努力してゐる。

女子青年團

女子青年團は始め處女會と云つて部落を一單位として設立され其の數約九百三十に達し互に其の施設を競ひ相當の成績を納めつゝあつたが、近年時勢の推移に鑑み道廳に於ては是等の大同團結の必要なることを認め男子青年團に倣つて町村を單位とする女子青年團を組織し、之を統制するのに支廳管内聯合女子青年團を之に充て、支廳市聯合女子青年團を併せて北海道聯合女子青年團を組織し以てこの聯合統制を期せんとし先づ町村女子青年團の設立を促進奨励してゐる。而して既に町村單位の團體の設立を了つた地方にあつては之を糾合して支廳市聯合女子青年團を組織し昭和二年に至つて七團體の加入だけで北海道聯合女子青年團の設立を見たが、昭和五年四月一日現在に於ては支廳市聯合女子青年團一八、町村女子青年團數二一〇、其他の團體約七九〇に及び、遠からず本道女子青年團の體制は完成を告げようとする状況である。

かくの如く北海道聯合女子青年團は設立の日淺く尙經費の都合上未だ十分の活動が出来ないが、指導者講習會を開くことと各支廳市聯合女子青年團體も中堅團員を養成して益々この事業の促進に努

少年團

少年團は少年社會教育機關として近時著しく世人の注意を喚起し、大正十二年七月には北海道少年團聯盟の組織を見るに至り、今後愈々其の運動が盛にならうとする傾向に在る。昭和五年四月一日現在團體數一二五、團員は正團員一七、三七五其他七八二を算して居る。

青年訓練所

大正十五年青年訓練所令發布せられるや第一着手として専ら青年訓練所設置の普及を圖り同年七月一日開所したもので一千二百六ヶ所であつたが、其後漸次設置の數を加へ昭和五年四月末日現在に於て公立千二百四十二私立四、其在所生徒數四萬二千二百二十七名に達した。

圖書館

概況 圖書館の施設に關しては、大正十五年二月行啓記念圖書館の開設を見るに至り、其他市立私立圖書館中成績を見るべきもの二、三あるが、未だ十分に普及されないので昭和四年十月全道圖書館協議會を催してその振興に關して指示協議が行はれ又昭和五年四月には圖書館施

設要項が制定され町村に於ける簡易圖書館の設置、利用の獎勵が圖られてゐる。次に昭和五年三月末日現在の全道圖書館を見れば、其の數十七で、其中設備稍完成して居るものは廳立行啓記念圖書館公立小樽圖書館・私立函館圖書館・私立下村文庫・私立札幌市教育會附屬圖書館の五で、其他のものも夫々設備の完成を圖つて居る。

廳立行啓記念圖書館 最近調査による閱覽者の累年比較は

昭和二年	一、一七〇	閱覽人員	三、三三三
同 三年	六、六六六	閱覽冊數	九、五五五
同 四年	八、八八八		一〇、七〇七
同 五年	一〇、一〇一		一三、二二三
學 生	三、七七一	無職者	一、四三三
農工商者	三、三三三	雜業者	三、三三三
官公吏	三、三三三	銀行會社員	一、六一六
教育家	一、六一六	記者宗教家	八
となつて學生が依然最多を占めて居るが官公吏教育者等の案外少いのは自宅に於ける讀書が多い爲であらう。			
小樽市圖書館	最近三箇年の閱覽者數を見るに		
昭和三年	六、八八八		
同 四年	七、〇〇〇		
同 五年	八、〇〇〇		

にして累年讀書熱が高まつて居る。次に

昭和五年に於ける閲覧者の内譯を見るに
 四、三〇〇
 一、六〇〇
 一、三〇〇
 八、五〇〇
 三、四八二
 二、三三三
 六、三九
 二、八
 新開記者宗教家
 であるが、前者と同様無職者の多いのは
 時代相の一断面で冷たい数字である。その
 の讀まれた書籍は二十萬二千六百六十八
 冊で
 文學隨筆叢書類 四、八三二
 政治經濟産業交通類 四、四九九
 理學數學醫學類 一、五〇九〇
 美術運動娛樂類 二、四、五三三
 歴史傳記地理紀行類 二、五、四
 宗教哲學類 九、四、四
 育児、婦人、家事類 九、二、五七
 の順位を示し此の外新聞雜誌の閲讀が著
 しく大きい数字を示して居る。尙館外帶
 出者は昭和五年中一萬一千三百三十八人
 上り一萬七千四百七十七冊圖書を借り出
 居る。

聯合青年團一覽

(昭和五年四月現在)

團名	昭和四年度經費豫算	同上	施設	主要事項
----	-----------	----	----	------

札幌市教育會附屬圖書館 昭和五年
 中の入館者は四萬四千九百九十四、閱讀
 書籍は六萬四千七百八十七冊(新聞雜誌
 を含む)に達し、その中多く讀まれたも
 のは文學總記創作劇曲詩歌等、之を順
 位のすると次の如く同年中讀書界の傾向
 が窺はれる。
 第一位 文學總記、創作劇曲、詩歌、
 語學、感想隨筆
 第二位 數學、理學、醫學、工學、兵
 事、交通、通信
 第三位 政治、法律令規、經濟商業、
 社會、産業、統計
 第四位 婦人、家庭、兒童
 第五位 歷史、傳記、地理紀行
 第六位 美術、音樂、演劇映畫、體育
 趣味娛樂
 第七位 宗教、哲學、倫理修養、教育
 第八位 圖書、叢書全集、郷土
 博物館其他常置教育的觀覽施設
 札幌市に北海道廳立拓殖館があつて北
 海道拓殖に關する參考品を陳列し無料觀
 覽に供してゐる外、北海道帝國大學附屬
 博物館があり、函館市に私立函館博物館
 があつて標本等を陳列し常時に觀覽に供

してゐる。其他旭川市に火防組合で建設
 した火防衛生參考館があつて火災豫防及
 衛生教育上の參考品を陳列してゐる。其
 他に於ては學校記念日卒業式等に各種の
 展覽會を開催するものもあるが、常時開
 設觀覽に供してゐるものはない。
 成人教育
 各地で名士來往の際には講演會を開き、
 道廳教育兵事課に社會教育に關する映畫
 「フィルム」がありて市町村の希望に依つ
 て貸附してゐる。講演會等の重なるもの
 は札幌市に市民講座があつて月一回開催
 し講師は大學教授其他各方面の學者有識
 者を聘し市民の常識並に品位の修養上に
 効果を擧げてゐる。聴講者は各種階級を
 網羅し一回約二百名位ある。又小樽市に
 於ては市立圖書館で事業の一童として講
 演會展覽會を年度内八回開催し(昭和四
 年度)入場者合計八千名に達した。
 其他
 教育會、婦人會等各種教化團體をして
 社會教育に關する諸運動を促し一面教育
 宣傳の趣意を以て巡回講演會活動寫眞會
 保護者大會を開催し、大いに社會教化に
 努力して居る。

北海道聯合青年團	四、八五〇・〇〇	視察、大會、體育獎勵、表彰。	幹道養成講習會、指導者講習會、表彰、巡回講演、調查、大會、巡回活動寫眞會
札幌市青年團	二、〇九五・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
小樽市青年團	一、五〇〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
室蘭市青年團	一、七三三・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
旭川市青年團	八、四七三・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
釧路市青年團	一、七〇〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
石狩市青年團	三、三〇〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
渡島市青年團	二、三〇〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
檜山五郡聯合青年團	一、七〇〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
後志五郡聯合青年團	一、四〇〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
上川聯合青年團	三、〇〇〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
天鹽聯合青年團	四、四九〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
網走支廳管内聯合青年團	四、二五七・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
網走支廳管内聯合青年團	二、〇〇〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
日高支廳管内聯合青年團	二、七四九・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
十勝支廳管内聯合青年團	一、六八二・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
釧路支廳管内聯合青年團	三、〇〇〇・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
根室支廳管内聯合青年團	二、二九五・〇〇	大會、講習會、體育獎勵、表彰。	大會、講習會、體育獎勵、表彰。
計	七、三三二・一八〇		

青年訓練所一覽

(昭和五年四月末現在)

支廳市別	訓練所數	主事	職員	生徒數	費用	備考
石狩	私 九七五	七五	一〇六	二、二五四	一八、三四〇・〇〇	充當補習學校六を含む
渡島	私 一〇八	一八	二二	三、五四七	三、六〇二・〇〇	
計		九三	一二八	五、七九一		

室蘭旭小函札根 釧 河 浦 膽 網 宗 留 上 空 後 檜	計	私	私	私	私
蘭路川樽館幌 路					
市市市市市室 國 西 河 振 走 谷 朋 川 知 志 山					
身長	一、三三二	一、三三二	一、三三二	一、三三二	一、三三二
平均	一、三三二	一、三三二	一、三三二	一、三三二	一、三三二
體重	二、〇八四	二、〇八四	二、〇八四	二、〇八四	二、〇八四
平均	二、〇八四	二、〇八四	二、〇八四	二、〇八四	二、〇八四
調査人員	五、七三三	五、七三三	五、七三三	五、七三三	五、七三三
身長	一、二二九	一、二二九	一、二二九	一、二二九	一、二二九
平均	一、二二九	一、二二九	一、二二九	一、二二九	一、二二九
體重	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三
平均	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三
調査人員	二、〇四一	二、〇四一	二、〇四一	二、〇四一	二、〇四一
身長	一、一三三	一、一三三	一、一三三	一、一三三	一、一三三
平均	一、一三三	一、一三三	一、一三三	一、一三三	一、一三三
體重	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三
平均	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三
調査人員	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三
身長	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三
平均	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三
體重	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三
平均	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三
調査人員	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三	一、〇六三

學校衛生及體育

本道生徒児童の發育状況を全國平均に比較すると左表の様一般に良好である尚師範學校及中等學校入學志願者に對す

小學校兒童體格検査表 (昭和三年三月)

昭和三三年三月 道廳教育兵事課調査

年齢	検査人員	身長	平均	體重	平均	調査人員	身長	平均	體重	平均
男	北海道一全 國	一、二二九	一、二二九	一、〇六三	一、〇六三	五、七三三	一、二二九	一、二二九	一、〇六三	一、〇六三
女	北海道一全 國	一、一三三	一、一三三	一、〇六三	一、〇六三	二、〇四一	一、一三三	一、一三三	一、〇六三	一、〇六三

中等學校生徒體格比較表

(昭和三年 道廳教育兵事課調査)

年齢	検査人員	身長	平均	體重	平均	調査人員	身長	平均	體重	平均
男	北海道一全 國	一、五七三	一、五七三	二、〇八四	二、〇八四	五、七三三	一、五七三	一、五七三	二、〇八四	二、〇八四
女	北海道一全 國	一、四七三	一、四七三	一、〇六三	一、〇六三	二、〇四一	一、四七三	一、四七三	一、〇六三	一、〇六三

年齢	検査人員	身長	平均	體重	平均	調査人員	身長	平均	體重	平均
男	北海道一全 國	一、五七三	一、五七三	二、〇八四	二、〇八四	五、七三三	一、五七三	一、五七三	二、〇八四	二、〇八四
女	北海道一全 國	一、四七三	一、四七三	一、〇六三	一、〇六三	二、〇四一	一、四七三	一、四七三	一、〇六三	一、〇六三

本道には未だ體育運動主事の設置がないが近い將來に於てその設置を見る豫定になつてゐる。現在は學校衛生技師が其

の事務を掌つて居る。一、學校體育で國民體育の振興が盛に唱導せられる様になり本道でも一層適切な指導獎勵の要

を認め、先づ一般體育の中心を爲す學校體育方面に向つて力に竭してゐる。而して正科の體操は文部省教授要目に準據しその徹底を期しつゝある。

冬期には「スキー」を課するものが其の数を増し、又「スキー」體操を實施するものもある。

中學校に於ては「北海道中學校競技

聯盟」が中心となつて諸競技武道等は年増しに健な發達を見せてゐる。

夏季體育施設一覽

(道廳教育兵事課調査)

年度	項目	昭和三年		昭和四年		昭和五年		合計
		施設	人員	施設	人員	施設	人員	
昭和三年	早起	二、四〇〇	二、九〇〇	二、四〇〇	二、九〇〇	二、四〇〇	二、九〇〇	一〇、〇〇〇
昭和三年	水泳	二、四〇〇	二、九〇〇	二、四〇〇	二、九〇〇	二、四〇〇	二、九〇〇	一〇、〇〇〇
昭和三年	林間學校	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	海濱學校	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	體操遊藝	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	陸上競技	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	キヤン	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	武道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	球技	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	登山	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	遠足	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	角力	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	其他	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、〇〇〇
昭和三年	合計	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇

二、中等學校

種別	昭和三年		昭和四年		昭和五年		合計
	施設	人員	施設	人員	施設	人員	
臨海學校	一	一	一	一	一	一	三
水泳道	一	一	一	一	一	一	三
武技	一	一	一	一	一	一	三
登山	一	一	一	一	一	一	三
其他	一	一	一	一	一	一	三
合計	五	五	五	五	五	五	一五

二、一般體育 本道に於ける一般體育は漸次健全なる發達を遂げ、體育團體は年々其の數を加へ最近冬期に於けるスキ

一、スケートの如きは其の發達顯著なるものがある。尙土地の状況に鑑み全國體を實してゐる。

體育團體數調

(道廳教育兵事課調査)

年度	量動種目	昭和三年	昭和四年	昭和五年
昭和三年	一般	二九八	三三九	三六六
昭和三年	野球	二四六	二六二	二八〇
昭和三年	庭球	一	一	一
昭和三年	卓球	一	一	一
昭和三年	蹴球	一	一	一
昭和三年	體操	一	一	一
昭和三年	陸上	一	一	一
昭和三年	技	一	一	一
昭和三年	諸競技	一	一	一
昭和三年	武道	一	一	一
昭和三年	スキ	一	一	一
昭和三年	スケ	一	一	一
昭和三年	登山	一	一	一
昭和三年	乘馬	一	一	一
昭和三年	短艇	一	一	一
昭和三年	計	一、一五〇	一、二六〇	一、三六〇

冬期體育的施設調

(昭和四年年度 道廳教育兵事課調査)

主催者別	スキー	スケート	武道	諸競技	其他	合計
市町	二六五	一〇五	一五	二〇	一〇	四一五
小學校	一〇五	一〇五	一五	二〇	一〇	三六〇
體育團體	一〇五	一〇五	一五	二〇	一〇	三六〇
合計	四七五	三一五	四五	六〇	三〇	八六五

一、聯合教育會

(昭和五年九月 道廳教育兵事課調査)

名稱	事務所所在地	目的	組織	會員數	役員及職員	資産總額
北海道教育會	札幌市	北海道教育の進歩	北海道内各支庁に在る教育會の組織	二十教育會	會長 佐上信一、副會長 欠、幹事 欠、評議員 十五、書記 一人	公債 五〇〇、〇〇〇、株券 七五〇、〇〇〇、預金及現金 五、二六、五〇〇、
北海教育會	札幌市	北海道の進歩	北海道の各支庁に在る教育會の組織	二十教育會	會長 佐上信一、副會長 欠、幹事 欠、評議員 十五、書記 一人	公債 五〇〇、〇〇〇、株券 七五〇、〇〇〇、預金及現金 五、二六、五〇〇、
北道教育會	札幌市	北道道の進歩	北道道の各支庁に在る教育會の組織	二十教育會	會長 佐上信一、副會長 欠、幹事 欠、評議員 十五、書記 一人	公債 五〇〇、〇〇〇、株券 七五〇、〇〇〇、預金及現金 五、二六、五〇〇、
合北教育會	札幌市	合北道の進歩	合北道の各支庁に在る教育會の組織	二十教育會	會長 佐上信一、副會長 欠、幹事 欠、評議員 十五、書記 一人	公債 五〇〇、〇〇〇、株券 七五〇、〇〇〇、預金及現金 五、二六、五〇〇、

1、會
 札幌外四郡教育會、渡島教育會、檜山
 教育會、後志教育會、空知教育會、上
 川教育會、天鹽教育會、宗谷教育會、
 網走外三郡教育會、釧路教育會、日高
 教育會、十勝教育會、釧路教育會、根

二、支應市町村教育會

室千島教育會、札幌市教育會、小樽市
 教育會、旭川市教育會、室蘭市教育會
 釧路市教育會、函館市教育會。
 口、重なる事業
 1 教員養成講習會(尋正養成短期講習會)
 2 月刊雜誌「北海道教育」發行

3 圖書編纂 4 諸會議參加 5 代議員會
 開催 6 公民教育調査研究 7 教育視
 察團派遣 8 全道小學學長會 9 初等
 中學教育研究會

區	別	團體數	組織	會員總數	資產總額	大正十五年 豫算總額	機關雜誌 有する團體數
支	廳	一四	社團法人 其他	一三	二六、五三	四三、〇〇〇	五
市	廳	六	社團法人 其他	一五	二六、〇四	四、九七三	四
町	廳	一六	教育實務者 其他 會員トス	二七、九六			二
村	廳	一六	社團法人 其他	一八	五、八六九		二
計		三八					

重なる施設事業
 1 共通のもの (イ)教育教授施設の研
 究調査、(ロ)教育講習會、(ハ)通俗
 講習會、(ニ)善行者教育効績者優良
 兒表彰
 2 特殊のもの (イ)教員學事視察補助
 (ロ)貧困兒就學保護、(ハ)圖書館巡
 回文庫、(ニ)陳列所展覽會、

北海道帝國大學組織及概況

本學は農、醫、工、理の四學部を有し
 理學部の外は主として本道豫科修了生を
 收容し、缺員ある場合に限り、其他者に入
 學を許可することがあり、又別に豫科、
 實科及専門を附設してゐる。
 農學部 農學、農業經濟學、農業生
 物學、農藝化學、林學、畜產學の六學科
 を設け、修業年限三ヶ年で、毎年約百十名
 (農學二五、農業經濟學一二、畜產生物
 學七、農藝化學二五、林學二〇、畜產學
 第一部一三、同二部七を入学させる
 醫學部 醫學科を置き、修業年限四

簡年、毎年約七十名を入学させる
 工學部 主として土木、鑛山、機械
 及電氣に関する諸學科を授け、之を第一
 至第四部類に分屬させる。修業年限三ヶ
 年、毎年約百名(各類一五)を入学させる
 理學部 數學、物理學、化學、地質
 學、礦物學、植物學、動物學の六學科を設
 け、修業年限三ヶ年、毎年約八十名(數
 學、植物學、動物學各一〇、物理學、化
 學各一五、地質學、礦物學二〇)を入学さ
 せる

豫科 本學農、醫又は工學部に進入
 しようとする者を收容し、高等普通教育を
 授け、農、醫、工の三類を置く、修業年
 限三ヶ年、毎年約三百二十名(農、工各
 一二〇、醫八〇)を入学させる
 實科 農學部に設けるもので農學實
 科及林學實科がある。農業又は林業に必

北海道帝國大學職員數一覽

(昭和六年四月末現在)

種別	大				種別	大			
	部學農	部學醫	院醫	部學工		部學農	部學醫	院醫	部學工
總教授	一	一	一	一	外國人教師	一	一	一	一
助教授	一	一	一	一	補助手記	一	一	一	一
事務主	一	一	一	一	圖書補手	一	一	一	一
司書	一	一	一	一	藥劑師	一	一	一	一
技師	一	一	一	一	看護士	一	一	一	一
局長	一	一	一	一	合計	三九	五三	二二	一一
講師	九	七	一	五	部本	一三	六	九	五
部學農	九	七	一	五	部學農	九	七	一	五
部學醫	九	七	一	五	部學醫	九	七	一	五
院醫	九	七	一	五	院醫	九	七	一	五
部學工	九	七	一	五	部學工	九	七	一	五
部學理	九	七	一	五	部學理	九	七	一	五
科豫	九	七	一	五	科豫	九	七	一	五
土木	九	七	一	五	土木	九	七	一	五
門專	九	七	一	五	門專	九	七	一	五
産門專	九	七	一	五	産門專	九	七	一	五
計	九	七	一	五	計	九	七	一	五
種別	九	七	一	五	種別	九	七	一	五
部本	九	七	一	五	部本	九	七	一	五
部學農	九	七	一	五	部學農	九	七	一	五
部學醫	九	七	一	五	部學醫	九	七	一	五
院醫	九	七	一	五	院醫	九	七	一	五
部學工	九	七	一	五	部學工	九	七	一	五
部學理	九	七	一	五	部學理	九	七	一	五
科豫	九	七	一	五	科豫	九	七	一	五
土木	九	七	一	五	土木	九	七	一	五
門專	九	七	一	五	門專	九	七	一	五
産門專	九	七	一	五	産門專	九	七	一	五
計	九	七	一	五	計	九	七	一	五

修業年限三ヶ年、毎年約六十名(各科二
 〇)を入学させる
 其他 以上の外本學附屬として農學
 部附屬農場、同演習林、同植物園及博物
 館、醫學部附屬醫院、理學部附屬臨海實
 験所、水産専門部臨海實驗所、圖書館、
 寄宿等がある

北海道帝國大學
 學生生徒數一覽

(昭和六年四月末現在)

大 農學部 醫學部 工學部 理學部
 農學部 一、醫學部 一〇 (計二一名)
 農學部 七六、農業經濟學科 四五、農業
 生物學科 二一、農藝化學科 六〇、林學
 科 五六、畜產學科 第一三四、同第二

部二三、醫學部
 第一部類八三、第二部類六一、第三部
 類九一、第四部類七五 (計二九四名)
 工學部
 第一類一七、物理學科 二八、化學科 二
 八、地質學、礦物學科 一三、植物學科 一
 (計二二三名)

八、動物學科 一九、
 豫科
 農學部農學實科 (八七七名)
 同 林學實科 (九三名)
 附屬土木專門部 (八六名)
 附屬水産專門部 (一八〇名)
 漁撈科 六三、養殖科 五九、製造科 五九
 合計 二、三九〇名

版凸眞寫
版網眞寫
版三色
用應眞寫
トセツオ
印刷

秀美堂

秀美堂

印刷所

印刷所

東京市
芝區
愛宕町
三ノ三二
電話芝
2276

神社及寺院

神社 本道に於ける昭和五年十一月

末現在神社は官幣大社一、國幣中社一縣社十二、郷社六十二、村社二百五十九無格社百四十七、合計四百八十二社である
神職 同年十一月末日現在の神職は總數二百四十七名で神社の總數に對して五割一分に當り數社を兼務するものもある

るが漸次兼務神職は其の數を減する狀況である
今左に昭和四年末現在に於ける分布を掲げよう

神社及神職數支廳市別一覽 (昭和四年末現在)

支廳市別	幣官社	縣社	郷社	村社	無格社	計	大官社幣	中國社幣	縣社	郷社	村社	無格社	計
石狩支廳													
北海道支廳													
青森支廳													
岩手支廳													
宮城支廳													
秋田支廳													
山形支廳													
福島支廳													
茨城支廳													
栃木支廳													
群馬支廳													
埼玉支廳													
千葉支廳													
東京支廳													
神奈川支廳													
新潟支廳													
富山支廳													
石川支廳													
福井支廳													
山梨支廳													
長野支廳													
岐阜支廳													
愛知支廳													
三重支廳													
滋賀支廳													
京都支廳													
大阪支廳													
和歌山支廳													
奈良支廳													
徳島支廳													
香川支廳													
高松支廳													
愛媛支廳													
高知支廳													
福岡支廳													
佐賀支廳													
熊本支廳													
大分支廳													
宮崎支廳													
鹿児島支廳													
沖縄支廳													

神社及寺院

計	官大	一一	一〇	六	二五四	一〇	四六	五	五	一七	六七	一四七	二四二
---	----	----	----	---	-----	----	----	---	---	----	----	-----	-----

寺院及住職

寺院の總數は昭和五年十一月末現在の本道九十八、臨濟十五、曹洞二百二十三、淨土五百六十一、日蓮七十七、時宗一、法

華十、合計千五十七箇寺で之れを前年に比較すると六箇寺の増加である。これに般檀徒の要望によるものである。而して既設寺院數の最も多いのは眞宗で、全體の五割三分、曹洞の二割一分、日蓮、眞言、臨濟、法華等相亞ぎ爾餘は十指を數

ふるに至らない。此の趨勢に依つて本道宗教の情勢を察する事が出来る。住職數は昭和五年十一月末現在の住職の總數は九百七十九人で、寺院總數の約九割二分に相當して居る。

寺院及住職地方別

(昭和四年現在)

支廳市別	天臺眞言淨土臨濟曹洞眞宗日蓮時宗法華	計	天臺眞言淨土臨濟曹洞眞宗日蓮時宗法華	計
石川	一	一	一	一
上志	一	一	一	一
後志	一	一	一	一
檜	一	一	一	一
渡	一	一	一	一
膽	一	一	一	一
浦	一	一	一	一
河	一	一	一	一
根	一	一	一	一
網	一	一	一	一
宗	一	一	一	一
留	一	一	一	一
札	一	一	一	一
旭	一	一	一	一
小	一	一	一	一
函	一	一	一	一
計	三二	三二	三二	三二

石川	一
上志	一
後志	一
檜	一
渡	一
膽	一
浦	一
河	一
根	一
網	一
宗	一
留	一
札	一
旭	一
小	一
函	一
計	九

基督教々會堂及信徒

(昭和四年末現在)

支廳市別	天主教會	ハリスト正教	日本基督教會	日本聖教會	日本メソヂスト	組合基督教會	其他	計
石川	一	一	一	一	一	一	一	一
上志	一	一	一	一	一	一	一	一
後志	一	一	一	一	一	一	一	一
檜	一	一	一	一	一	一	一	一
渡	一	一	一	一	一	一	一	一
膽	一	一	一	一	一	一	一	一
浦	一	一	一	一	一	一	一	一
河	一	一	一	一	一	一	一	一
根	一	一	一	一	一	一	一	一
網	一	一	一	一	一	一	一	一
宗	一	一	一	一	一	一	一	一
留	一	一	一	一	一	一	一	一
札	一	一	一	一	一	一	一	一
旭	一	一	一	一	一	一	一	一
小	一	一	一	一	一	一	一	一
函	一	一	一	一	一	一	一	一
計	二	二	二	二	二	二	二	二

衛生

出生

出生、死亡 (道廳衛生課調査)

出生 昭和四年中道廳警察部衛生課の調査によれば現住人の生産總數は十萬七千六百八十九人で、其の男女の割合は女百に付男百五十三に當り、同年末現住人口千に付四十二人一四、前年に比し二人四八を減じた。又内閣統計局調査(自大正十三年至昭和三年)五箇年平均同率本道は三十八人三七であるので全道平均率を越えること四人〇八、全道中第七位を占め之が死亡の差増に至つては本道は二十人一五で全道中第二位に在る。此の生産率を地方別に觀るに留萌支廳の四十七人九九最も高く、渡島支廳の四十六人七、河西支廳の四十六人三七、檜山支廳四十五人七四、釧路國支廳の四十五人六四、宗谷支廳の四十五人五七等の順位で、最も低いのは小樽市の三十三人六二、札幌市の三十四人一一、旭川市の三十五人三六等である。

之を地方別に見るに、最も高いのは小樽市の六人一四で上川支廳の五人二九、調査支廳及旭川市の五人〇五等で、最も低いのは石狩支廳の三人四二、釧路國支廳の三人六二、渡島支廳の三人七二、檜山支廳の三人八三、宗谷支廳の三人八四等である。

公生、私生 昭和四年中の生産を公生私生に分つて生産百に付公生は九五・二九、私生は四・七一で最近全国の同率に比し私生は二人二九を減じた。又十年前の大正九年の同率私生七人四九に比較すれば二人七八の減率である。

死亡 昭和四年中の死亡總數(道廳衛生課調査)は男二萬八千二百二十人、女二萬三千七百人の計五萬一千七百二十人で、同年末人口千に付二十人二四に當り又最近五箇年平均(統計局調)全道内地平均率より低いこと一人八六で下位に在る。

死亡原因 而して本道死亡原因(中分類)中其の重なるものを擧げると次の通りである。

- 肺炎及氣管支肺炎 九四・〇
肺結核 七〇・六
胃の疾 六六・三
腸の疾 六五・四
心臓の器質的疾患 五七・〇
畸形及先天性弱質 五〇・九
腦出血及腦軟化 四六・六

(總死亡千に付)

老衰 四二・四
腎臟炎 四〇・二
下痢及腸炎 三九・三
乳兒に固有の疾患 三九・三
五歳未満の死亡 昭和四年中(道廳衛生課調査)五歳未満者の死亡總數、二萬二千八百八人で、總死亡百に付四十二人五七に當り、前年に比し一人九七を減ずる又最近五箇年平均同率四十四人九より低いこと二人三三である。

一歳未満の死亡 昭和四年(道廳衛生課調査)一歳未満者の死亡は一萬二千二百二十二人總死亡百に付二十三・六人で、最近五箇年平均率二十五人六九より低いこと二人〇八である。又生産に對する割合は全道と比較して(統計局調査)自大正十三年至昭和三年五箇年平均本道は低いこと三人八で、最近特に乳兒死亡率は追減の傾向にある。

此の生産に對する一歳未満死亡の割合を地方別に見ると最も高いのは旭川市の十六人一七、函館市の十五人三六、渡島支廳の十三人五九、檜山支廳の十二人七七、宗谷支廳の十一人六等は何れも二人五、空知支廳の十一人六等は何れも本道平均以上である。又最も低いのは室蘭市の七人四八で、根室支廳の九人三二、石狩支廳の九人五一である。

に付九十八人九二肺結核は七十人六三に當り又同年末人口一萬に付結核死亡二十人〇二肺結核は十四人二九である。此を全國と比較し其の趨勢を見るに本道結核死亡は全國平均率以下にある。けれども全國の結核死亡は年々遞減しつつあるも本道は同一軌を辿るの傾向にある左にこの趨勢を掲げよう(人口一萬に付結核死亡)

Table with columns for year (大正七, 八, 九, 十, 十一年, 十二年, 十三年, 十四年, 昭和元年, 二年, 三年, 四年) and rows for '本道' (Prefecture) and '全國' (National). Values represent death rates per 10,000 population.

傳染病患者發生支廳市別一覽

(昭和四年中 道廳衛生課調査)

Table listing infectious diseases by subprefecture/city for the year 1929. Diseases include 赤痢 (Cholera), 傷寒 (Typhoid), 鼠熱 (Plague), 腸チフス (Typhoid), 赤痢 (Cholera), 傷寒 (Typhoid), 鼠熱 (Plague), 腸チフス (Typhoid), etc.

備考 右表の數字は一人人口一萬人に對する患者數を表はす。

高く、二十五歳以上三十歳未満の二六・〇三、十五歳以上二十歳未満の二四・〇六、川に次ぎ、女に於ては十五歳以上二十歳未満の二七・九四最も高く、二十歳以上二十五歳未満の二六・九九、二十歳以上三十歳未満の二五・四四等之に次ぐ。要するに肺結核は男女共に青春期に最も多く、壯者之に次ぎ老幼共に極めて少い。又年齢級各性別に於ては男は二十歳未満迄は女より少く、二十歳以上各年齢級を通じて總じて高い。

人、バラチアス三百七人、赤痢九十八人、猩紅熱五百四十一人、チフス二千人、計四千八百七十九人で、内死亡者腸チフス二百八十八人、バラチアス二十六人、赤痢十六人、猩紅熱十八人、チフス三百九人、計六百五十一人である。

又最近十箇年間に於ける發生の趨勢を見るに腸チフス、パラチフスは稍々減率の傾向にあり...

傳染病患者數發生月別一覽

Table showing the number of infectious disease patients by month and type (e.g., 消化器系, 其他). Includes a sub-table for patients per 100 people.

ス、パラチフス、赤痢等の消化器系傳染病が夏秋の交に於て激しい發生を來すに因るもので、猩紅熱、チフテリア等にあつては十一月、十二月、一、二月の寒冷期に發生が多いが大勢を左右するに至らない結果である。

年別齡

昭和四年中發生傳染病患者を各病類に付其の年齡階級を見るに腸チフス、パラチフスは十六歳以上二十五歳前後赤痢、チフテリアは共に五歳迄を最も高き漸次高齡に及ぶに従つて其の數少く、猩紅熱は九歳以上十五歳迄の者最も多い。左に患者百に付之が年齡階級比率を掲げよう。

本道醫師支廳市別一覽

Main table listing the number of doctors and population in various municipalities (e.g., 石狩, 空知, 上川, 後志, 檜山, 渡島).

本道市部 醫師一人に付人口 七七九〇、〇二二

郡部 平均 二、〇三三 六、一二二

尚醫師中拓殖費から補助を受けて居る者が七十人ある。是等醫師の分布を左に掲げよう。

齒科醫師 昭和四年末齒科醫師數は四百八十九人で前年に比較して四十一人を増しては年末人口一萬に付一人九一人に當つてゐる。

本道 平均 一、一六二 四、〇二二

本道鍼術・灸術 按摩術業者數 (昭和四年末) 男 女 計

社會的施設

感化及救護施設

本道に於ける感化事業は廳立大沼學院の外代用感化院財團法人家庭學校社名淵分校及び財團法人札幌報恩學園の三で、昭和五年十月末日現在に於ける收容院生百十名に及んでゐる。

土人保護

明治三十二年舊土人保護法の發布に伴つて救助の方法を設けて撫恤に努むること同時に土地、農具、種子等を給し産業を奨励し自營の氣風の涵養を圖り教育費を

公設市場

本道に於ける公設市場は大正八年九月以降九年に亘り各市に創設され其の後設備及び内容の改善を圖るに共一面その増設を計畫し現在に於て札幌市七ヶ所、小樽市四ヶ所、函館市二ヶ所、旭川、室蘭各一ヶ所計十五ヶ所ある。

職業紹介所

職業紹介法に依る昭和四年十一月末現在に於て札幌、函館、釧路、旭川、室蘭の各市立各一ヶ所、小樽市立二ヶ所、及び名寄、帶廣、野付牛、増毛、岩見澤、留萌の各町立各一ヶ所、の外財團法人北聖院職業紹介所の十四ヶ所である。

今昭和四年中に於ける事業の成績を擧げる

Table with 2 columns: 男 (Male) and 女 (Female). Rows include 求人數 (Job openings), 求職者數 (Job seekers), 紹介件數 (Referrals), 就職者數 (Employed), 求職者對する就職歩合 (Job placement rate for seekers), 紹介件對する就職歩合 (Job placement rate for referrals), 日備労働者紹介 (Daily laborer referrals).

求職者對する就職歩合 八割三分の成績であつて各紹介所間聯絡幹旋を計り益々進展を見るに至つた。而して大正十三年内務省令を以て季節的職業紹介所の施設を認められた結果、關係諸縣と協議を重ね昭和四年十月末日に出稼漁夫供給組合四十三ヶ所を設置し之が紹介をなし又少年の職業紹介に至つては職業輔導並に失業防止の上から見て必要な事項なので、聯絡小學校二百二十九校を特定し職業紹介委員八百九十名を囑託し、大正十四年度小學校卒業生から紹介を開始したが求職者多く官廳銀行會社等の給仕事務員を希望し求人者は一般商店職工等の労働者を求むる關係上未

社會的施設

だ圓滑ではない。依て更に一層本趣旨の徹底普及に努力して居る。昭和四年度中に於ける成績を示せば左の通りである。

Table with 2 columns: 男 (Male) and 女 (Female). Rows include 求人數 (Job openings), 求職者數 (Job seekers), 紹介件數 (Referrals), 就職者數 (Employed), 求職者對する就職歩合 (Job placement rate for seekers), 紹介件對する就職歩合 (Job placement rate for referrals).

公益質屋

本道に於ける公益質屋は大正十二年八月開設の苫前郡焼尻村公益質屋及び大正十三年十二月開設の積丹郡余別村公益質屋があつて昭和二年三月公益質屋法發布せられて庶民金融施設として漸次増設されて居る。而して昭和五年十一月末日現在に於ける公益質屋數は三十九ヶ所に達して居る。

小住宅の建設と住宅組合

住宅の不足を補ひ之が緩和を圖る爲め地方費を通じ大藏省預金部から低利資金を借り受け各市其の他主要町村に市町村營の住宅を建設し其の戸數千八百八十七を數ふに至つた。更に大正十二年三月廳令住宅資金交付規程を發布し地方費から住宅組合に對す

行旅病人精神病者其の他の救護及び施設

本道は土木、漁業、鑛山等各種の事業多く、道内の勢力のみでは到底之の需要を満足す大半は他府縣から募集して來るので、之等單身來道者が一度疾病に襲はれると直に生活の道を断たれ路頭に迷つて遂に救護を受けるもの多く、加之露領方面の漁業に出稼する労働者の罹病送還者も尠くない。昭和四年度に於ける行旅病人及び死亡者千二百一名其の外精神病者の看護二百九名であつて之が經費は前者二十一萬三千三百十圓後者六萬四千七百七十七圓の多額に達した。又施設に關しては恩賜財團濟生會救護規程及び廳令に依る貧困者救護規程に依り施設して居る。而して昭和四年度に於て取扱つた濟生會救護規程に依

社會的施設

る患者延十萬七千六百五十五人で之に要した費用二萬七千二百七十七圓、貧困者治療規程に依る治療患者延一萬五千六百三十九人であつて之に要した費用は九千九百八十七圓に達してゐる。
 尙大正十三年中小樽市に昭和元年中國館市に濟生會診療所を開設し一般治療に従事し良好の成績を収めて居る。

保導委員

救民濟生の目的を達せんが爲め大正十一年四月保導委員設置規程を公布し六市に保導委員を置き各地に順次委員會を開催して協議研究に努め救護賑恤等各相當の効果を収めてゐたが之が事務は敏活と確實を緊要とするばかりでなく本來市自

身の事務たるべきものであるから、大正十四年度から各市に移管し地方費から相當額を補助する事にした。而して大正十四年に於ては四千四百圓を、昭和元年度からは毎年三千五百二十圓、五年度三千六百八十八圓を補助した。尙昭和四年度現在保導委員数は二百十五名に達してゐる

職業紹介所最近五箇年比較

(道廳調)

年次	紹介所數	求職者數		就職者數		紹介件數		支出決算
		男	女	男	女	男	女	
大正一四	七	一七、三三三	二、三九〇	一、一七六	三、二四一	一四、〇五二	九〇〇	三、〇七〇
大正一五	八	二五、二五〇	二、八六三	一、六三九	一九、一七七	二二、三三三	一、八九九	三、三三七
昭和元	一〇	六〇、一九九	四、九七三	三、三五六	四九、〇六六	五〇、八〇〇	二、五四六	四、三六五
昭和二	一〇	一〇、六三三	四、二三三	三、四九四	四九、〇六六	九、〇〇五	二、二七	四、三六五
昭和三	一三	二三、六四六	一、三〇元	一、三六七〇	六、九八〇	二七、九三三	一、二、七六一	六、五五四
昭和四	一五	一七五、七〇五	一四、〇三六	一四、九六一	七、四三二	一七、八三三	一、三、八九五	七、三、二二三

備考 △印は日傭労働者である

各種印刷並ニ製本

福神製本印刷所

東京市京橋區銀座西一ノ七

電話京橋 六六八五
六七一〇

社會運動

無産戰線統一運動

函館地方 昭和五年社民黨支部から脱した本岩佐氏等が合同労働を支持...

札幌地方 札幌市では同月二十五日右の稲村隆一氏を迎へ高山専誠氏方に於て三黨合同促進協議會開催...

社會運動

無産戰線統一運動

會札幌支部は當分南六條西四丁目社民黨支部に置くこととなつたが役員左の通り...

北海道地方總評議會創立準備委員會 小樽市稲穂町全小樽労働組合事務所...

が窮状打開の目的で札幌労働同志會の設立を計畫し三月二十七日市内豊平愛隣館...

一、札幌市立職業紹介所労働部の登録證を隨時整理し就職斡旋は本會員に優先...

以上各案の實行を期す 小樽無産團體協議會 労働大衆黨の組織結黨により北海道に於ては一二の外逸...

よらず總べての交渉を大西顧問に一任し誠意を披瀝して資本家に対し結果資本...

小樽支部は七月二十日組合内に支部緊急擴大執行委員會を開き鈴木執行委員長外...

に關し協議したが、一は絶対反対、二は大山黨首に對して情に忍びざるも無産大...

協議會を組織して行ふことを申合せた。 労働大衆兩黨北海道支部聯合會 設立大會は九月六日帯廣町十勝會館に於て...

労働大衆兩黨北海道支部聯合會 設立大會は九月六日帯廣町十勝會館に於て開催された。出席者は全道各地の代表者...

労働爭議

釧路玉置鐵工所の爭議 昭和五年九月五日突發したが翌六日双方讓歩の結果...

圓滿解決八日から就業した。 旭川の印刷業 昭和五年秋旭川印刷業組合で職工賃銀値下の議が起つた...

旭川小寺印刷所に於て争議を起し十數名の職工全員は罷業を開始し尙他にも同組合...

小樽造船組合賃銀問題 昭和五年十一月小樽造船職工組合では同問題について争議を起したが、十一月労働代表會...

一、賃金は一ヶ月は通算二圓五十錢とす 一、労働時間は夏季(自三月一日至十月三十一日)午前七時より午後五時半まで...

一、労働賃銀は翌月八日までを支拂ふ事 一、同組合は會合の都度劈頭先づ教育勅語を捧讀し一切飲酒を廢する等極めて...

二、本聯盟は永遠の生活擁護のため旭川...

水管會社を聯盟による共同管理によつて經營せんとす
の二項を決議し聲明書を發表し直に闘争を開始した。尙當日は昨年の解雇職工及び臨時職工も加盟し大いに氣勢をあげた

短縮する事
二、賃銀は當日支拂を實行する事
三、就業午前六時は従前通り終業は午後五時厳守のこと
に決定し、尙一齊交替の件は二十七日より實行したが現在小樽よりの就業者は百五十七名であり一齊に交替すれば到底所要人数を得られないので不足の分は労働手帳番號順により補填することになった

電燈料値下運動
電燈料値下運動を叙するに先立つて道内の二大電燈會社の電燈料金、利益等について瞥見して見よう。
電燈料金の不統一其他
全道主要都市に於ける電燈料金を見るに(十六燭光)札幌 七十錢(北水、旭川 九十五錢(北電)、釧路、壹圓(北電)、室蘭 八十錢(岩瀨汽船)、小樽 七十五錢(北水)、函館八十錢(函水)

きは二十五錢からの間隔が生じてゐる。取付料乃至取付方法のまち／＼であることも缺點として指摘してゐる。北水では點燈の際小樽は一燈五十錢の取付料を取り札幌では一燈一圓五十錢を収めてゐるがこれは札幌では器具が必要者の負擔になり小樽は會社が貸付することになつてゐるたのであるが、これ等のことも何れかに統一さるべきであるとされてゐる。

而してその供給會社との闘争の形態も可なり組織的であり或は自治體の決議を以て或は商工團體が中心となつて動いてゐる。即ち渡島地方は渡島町村會の決議を以てし東部北海道地方は北見、十勝、釧路の商工團體が中心となつて運動が繼續されるに至つた。即ち北電の供給區域たる釧路市北見方面の四割引、旭川市十勝方面は三割引を會社に要求したが會社側は之に應じないので、釧路市、十勝國北見國、旭川の各代表十餘名は三月十二日上海し安達内相、中村逓信政務次官、池田北海道廳長官、大川社長等を訪問し陳情し二十五日院内に於て小泉選相と會見し左の如き陳情書を提出して最後の活動を開始し、又同地方選出の木下、三井兩代議士も本問題解決のため最善の努力を拂ふに至つた。

割引以上何卒御精覽の上窺迫せる經濟實狀救済のため速かに電燈事業法第六條の公益上の必要と認められ以て公正なる御裁断を仰ぎたく茲に四國聯合代表の名に於て右陳情致します
北電の大英斷二元制の値下げ
北電に於ても種々調査研究の結果、時代に順應した料率改正を行ふことに決し、本年七月一日から増燭サービスをなして實質的値下げをすることになつた。即ち其の内容は
新料金制に於て従來の十六燭光の料金を以て二十燭光を又二十四燭光の料金を以て三十二燭光を點じ、定額制により十六燭二十四燭を撤廢して二十燭三十二燭に統制する事にした。

Table with columns for '舊料金' (Old Rate) and '新料金' (New Rate) for various candle powers (e.g., 一六燭光, 二〇燭光, 二四燭光, 二八燭光, 三二燭光, 三六燭光, 四〇燭光, 四四燭光, 四八燭光, 五二燭光, 五六燭光, 六〇燭光, 六四燭光, 六八燭光, 七二燭光, 七六燭光, 八〇燭光, 八四燭光, 八八燭光, 九二燭光, 九六燭光, 一〇〇燭光).

二四同	一三〇	一三〇
三二同	一六〇	一七〇
五〇同	一九五	二〇〇
八〇同	二五〇	二七五
百燭光	三一〇	二七五

而してメートルによる従量料金は現在の電氣料によるプロック式を電燈の取付燈等によりプロック式を改める必要に對し累進的に料金の引下げをなすものであるが兩系統別一ヶ燈一ヶ月の新料金は左の如くである。

旭川系統	二〇錢
三キロ時以内一キロに付	一五錢
三キロ時超過同	一〇錢
五キロ時超過同	六錢
七キロ時超過同	六錢

三キロ時以内一キロに付
三キロ時超過同
五キロ時超過同
七キロ時超過同

小作爭議

昭和五年中本道小作爭議狀況 昭和五年中に於ける件数につき道廳の調査する所によれば總數百十五件に上り、昭和四年に於ける八十三件に比すれば約五割の増加であり、昭和三年の三十二件に比較する時は實に四倍の激増を示してゐる

而して右五年中の百十五件のうち十二月二十日迄に道廳で集計した八十七件につきその發生地別に示せば左の如くで空知、上川が首位を占めて居り網走管内亦一躍激増を見せてゐる。この激増は農民組合が活動した結果によるものであるが一方全然爭議の發生を見てゐないのは檜山、膽振、浦河、留萌、宗谷、釧路國、根室の七支廳である。

空知四二、網走一五、上川一四、石狩七、河西三、旭川市三、後志二、渡島一、合計八七

この百十五件の爭議面積は合計一萬町八反六畝歩に上り、之が渦中に入つた關係人員は千八百十名といふ尨大な數字を示してゐる。之亦在來に比して最高の數字で、一面經濟界の影響に依ることも多いとは云へ小作人の自然的發生に依る思想的自覺が少なからず手傳つてゐること左の數字が之を物語つてゐる。(尚小作調停法によつたもの、爭議原因、要求事項等に關する種別及數字は農業の欄参照のこと)

昭和六年の小作爭議

作況不振の本年は收穫期を待つてかなり小作爭議の發生を見るものも豫想されてゐるが、今年八月末現在、爭議件数はすでに五十四件に達してゐる、而して之が關係人員は地主五十八人に對し小作人四十七人が参加して居り、その發生原因の主なるもの

は二十七件の地主側の耕地引上げであるこの地主の硬化は小作人の生死に關するもので、自然耕作の繼續を要求するに至り、これが漸次増加するの傾向にあるが今後作離料支出要求も之に伴ふ風調にある。爭議戦術としては未だ本道には地主小作人共特異の行動がないが、現在の所では地主の土地立退訴訟及び、立毛又は動産差押へが地主の最高戦術で、これに對し小作人側は小作調停申請と小作料の同盟不納が地主に對する二つの戦術である。その爭議の結果に於ては現在のところ妥協が多い。即ち本年八月迄の五十四件中四十五件が何れも妥協されてゐる。今後爭議の深刻化に連れて、これが爭議の應援團體も合法或は非合法の團體が結成支持し、いよいよ爭議解決までには至難とされる情勢とならう。

戸田農場の爭議

雨龍郡雨龍村の戸田子爵農場小作人二百六十八人は昭和五年の作に對し小作料減額要求の意向を有しぬた矢先地主は機先を制し積極的に小作料三割五分減を申出たので小作人は大體之を納得し小作爭議は事前に防止されるものが見られてゐたが、小作人中農民組合に關係ある四十三人は地主の減額申出は僅少であるから平均六割五分以下に減額されたいと要求し遂に爭議を起すに至つた。しかして同農場は蜂須賀農場に次ぐ大農場のことゝてその影響の他に

及ぼすを恐き雨龍村長その他が妥協斡旋に努めた結果、本年一月中旬地主側で大體小作人の要求を實め無事解決した。

仲田農場の爭議 十勝國新得村の同農場主仲田稔氏は今春の小作契約更新期に際し農場の經營困難を理由に小作料を値上げしたが、水田の如きは殆ど倍額に近い値上げで小作人百十戸は不當値上げに反對委員十八名をあげ、農場管理人を通じて値上げ反對を通告し爭議に入つたが、五月二十二日同村役場で釧路地裁部長鈴木判事を主任とし、田道廳小作官臨席の上調停委員會を開いた結果左の要領で圓滿に調停の成立を見るに至つた。

一、昭和六年より向ふ三ヶ年間小作料を水田は反當玄米三斗一升とし畑は金子にて反當一圓九十錢とす

奥野農場の爭議 昨年九月來地主の土地賣却が原因で、小作人七十一名が爭議中の士別町元代議士奥野小四郎氏所有農場の小作爭議は本年五月十五日時田小作官立合で地主と小作人代表が會見協議の結果左の條件で圓滿解決を見た。

一、小作期間は昭和六年九月より昭和十年十二月迄とし五年目毎に契約を更新する事

二、地主は負債の許す限り第三者に賣却せざる事若し賣却の場合には小作人に優先權を認むる事

三、地主は農事改善の意味を以て毎年四

百俵の玄米を農場に寄附し其の處分方は小作人の選出したる委員に一任する事

四、昭和五年の小作料は十日間に完納する事

七飯村石井農場爭議

昨年十月亀田郡七飯村石井農場の小作人等は小作料の低減を地主に要求してはれつければ爾來函館裁判所で調停中であつたが廿日第四回の調停會を開いた結果地主は作年の小作料を二割減じた上廿八名の小作人に對しては今後四ヶ年間小作を繼續せしめるを譲歩し解決

野付牛石井農場爭議

地主が突然小作料を値上げした事から爭議を起し係争中であつた野付牛石井農場の小作爭議は前後三回にわたり調停委員會を開いて調停の結果本年五月二十七日左の如き條件をもつて圓滿解決を告げた

一、小作料四圓を二圓九十錢に値下げる

二、未納小作料は二割乃至五割引とす

龍村三宅市郎對地主井下要吉の三町八反歩の水田に關する小作料減額要求爭議

本年二月雨龍郡龍村三宅市郎對地主井下要吉の三町八反歩の水田に關する小作料減額要求爭議は第三回までの調停委員會を行つた結果全耕地の二割だけを減額し米二石を貸與するといふことで圓滿な解決を見また北見國瀧の上における伊藤節一外一名と地主岡本政道との間に廿四町九反歩の水田に

か、る小作料減額要求の爭議は遂に土地明け渡し要求にまで悪化したのがこれも二割減額今後四ヶ年の契約繼續で圓滿にケリがついた。

三村小作爭議

上川郡に於ける三村小作爭議の一として全道的に視聽を集めてゐた鷹栖・江丹別・東鷹栖三村の村有地小作人十八名對三村の小作爭議は第一第二回調停委員會も遂に不調に終り小作側ではその對策として全國農民組合北海道聯合會の應援を求めて村側の立毛差押へ立入り禁止となり解決不可能に陥りその成行を憂慮されてゐたが五年九月十二日の旭川地方裁判所にて第三回委員會も殆ど解決の曙光を認めるに至らず更に同委員會は最後の調停として舊臘廿一日委員會において調停條項を作りこれを双方に通牒したところが地主側小作人側双方ともこれを不服となして去る十日に至り異議の申し立てをなしたので事實上調停は決裂に終つたそこで小作人側では小作料六百五十俵を旭川西倉庫に寄託し旭川地方裁判所に貸借權確認の訴へを提起し結果としてあくまでも抗争を續けんとした矢先地主側では先に提起してあつた土地明け渡し並に小作料請求の訴訟を一括し前記の寄託小作料の假差押へをなした次第によつては重大なる結果を招来しないことも限らない情勢の下に本年に入り、六月に

なつても依然解決の曙光を認めない爲め旭川區裁判所では積極的に圓滿解決を意圖することとなり村側及び小作人側の意向を徴したが依然まともならず降つて十月二十八日旭川地方裁判所に於て和解勸告の爲め出頭を求め小作米の納入延期小作料減額其他の和解條件を掲示した所小作人側は出頭せず一方三村側では村の條例に相容れないものがあるとして同日時をもつて三村聯盟にて和解勸告拒絶の通告を提出し又復不調に歸した

暴力行爲まで生んだ幌向争議 空知郡幌向村地主大串利三郎對小作人篠原豐藏の土地明渡しの小作争議は本年四月二十二日全國農民組合北海道聯合會常任書記喜多幸章外三十六名の農民組合員が飲酒の上大串方及親類二軒を襲撃し家族の者に暴行を加へ更に早く解決せれば命はないと威嚇した全道未曾有の小作争議事件は五月九日荒川村長の仲裁で和議成立し同村農會議事堂に於て地主側から大串利三郎、大串孝一、小作人側から篠原豐藏、農民組合長沼支部長喜多幸章外三名、仲裁者側から荒川村長、長谷川農會長、本間村會議員の諸氏列席し、總ての情實を水に流して大體左記の條件で和解した

右暴行事件の巨魁喜多幸章外六名は起訴され六月十一日若見澤區裁判所に於て公判に附されたが、立會檢察より被告喜多、稲葉兩名を懲役十ヶ月、外懲役八ヶ月六ヶ月、四ヶ月の求刑があつた

其他の争議 以上の外昨五年の作物に關する争議に上川郡美瑛村にある函館市相馬哲平氏所有農場の小作人廿四名畑七十八町歩を廻るもの、上川郡士別町字上士別村高橋農場の小作人二十人畑作馬鈴薯を中心としたもの、紋別郡瀧の上金鈴薯に於けるもの等々幾多の争議が續光農場に於けるもの等々幾多の争議が續發し、小作争議調停委員會で調停せるも本年は凶作の結果道内各地で頻々たる小作争議が勃發し、其數少くとも百件以上上る見込らしいが、十一月一日現在に於て未解中の主なるものは、

- ◆空知郡美瑛町中村農場の小作人二百十四名の小作料不納申合に關するもの、
- ◆空知郡栗澤村に於て管理人对小作人間に舉村一致の栗澤村協同會で調停を試みたが妥協出來ずにあるもの、
- ◆札幌郡江別町新津村第一第二原野の小作人二十名が地主に對抗して「一原小作人組合」を組織した件

等々、今後も續々勃發の模様である。

運命を決すべき減俸反對全道職員大會は本年五月廿五日札幌鐵道集合所に於て開催したが全道から馳せ参じた二千五百餘名の出席者は會場内外に溢れ立錐の餘地ない盛況を呈し本局佐藤文書掛長の開會の辭について、本局藤澤運轉課文書掛長山下札運事務所長、本局田邊工作課庶務係長、浦札保線區主任等熱辯を揮ひ、吉田追分操車掛外數名の有志の演説があり、かくて左の申合及び決議を可決して閉會

申合

- 一、運轉の保安を期す
- 一、中央統制本部の行動を一にし最後の手段として辭表を提出すること

決議

- 一、俸給給料の減額に絕對反對す
- 一、退職賜金及同特別手当の恒久的確立を期す
- 一、不積極の人員整理に絕對反對す

札幌減俸反對事務所本部幹部は居残り局長並に課長(九名)を除いた本局高等官判任官並に現場長、主任の辭表を取纏めて提出することに決したが、決議文は直に鐵道大臣宛電送した

妥協案成り統制支部解散 鐵道省の減俸反對中央統制部は反對採否の鍵を握つてゐた本省局長並に課長が妥協案を容れたので勢ひ解散の止むなきに至つた旨の悲報が二十六日深夜札幌統制本部に電

鐵道從業員減俸反對運動

鐵道の結束

話を以て報告さるゝや徹宵話かけてゐた幹部は殺氣立ち反對を絶叫しながら各支部に全從業員の意向取纏め方を電話で照會したが、札幌全代表者會議は二十七日午前九時から本局會議室で開催、本支部委員及各地代表並議長八十餘名出席論議の結果一先本支部解散に決し午前十時四十分閉會した尙解散と同時に全從業員に對し左の聲明書を發した

行を目的とするといふスローガンの下に秘密結社戦旗函館支部といふのが昭和五年春から伊月の外東出三郎、川端米子、野村勝治等の手によつて極秘のうちに組織され、支局を高崎町一七加藤秀夫方に置きその第一回創立委員會同年七月二十日頃同市谷地頭小學校宿直室に於てあげられたのである。この時の出席者は後程起訴された十三名で、この時野村が議長となり川端米子が書記長となり深更までその闘争方法及會則等について協議し、最後に左の如く各自持場を決定したのである

て物凄く赤字をつられて會員を激勵し、一方着々として黨員の増加を圖つてゐたもので、尙本部との通信全部アドレスを其都度變へてゐたものである

右の事實が昭和五年五月一日樺太秘密結社檢舉の際、その時オルガナイザーとして函館市で同署員に取押へられた當時樺太豊原町雑誌記者毛利幸一の檢舉によつて伊月の行動が知らされたことより發覺したもので、其後函館警察特高課では密々内偵に努めつゝあつたが、同年十二月一日午前六時一昧を一網打盡に檢舉したものであるが、其後も續々檢舉を見、其數男四十三名、女七名であつた。爾來函館署に於て取調の結果(年齢は當時)

吾人は諸君と共に一致團結して減俸の反對に邁進せり然るに二十六日閣議は義を通報せる内容の如き妥協案の成立を認めたり此の報一度傳はるや中央及當局本部に於て之に對する可否の激論を見たるも結局四圍の情勢により遺憾ながら當本部は中央本部と合流して解散せざるを得ざるの止むなきに至りたるを各位御了承を乞ふ尙諸君の今日までに於ける連日の奮闘努力に對し絶大なる感謝の意を表す

- ▲銀行方面 柿本一夫
 - ▲通信方面 鈴木 明
 - ▲第一東部(鐵道方面を含む) 齋藤松雄
 - ▲第二西部(ドック會社其他工場も含む) 伊月剛三
 - ▲各中學校 淺井喜一郎
 - ▲婦人團體方面 川端米子
- 而して毎日謄寫版刷の支局ニュースを配布し又發賣禁止の「戦旗」をくばり何れも變名を以て通信し、先づ八月一日の實際赤化デーの記念運動として同夜闘争委員會を開き、九月一日震災記念日白色テラー反對デーに對する運動方法、九月七日國際無産青年デー、同年廿八日防空演習反對運動、十一月七日のロシア革命記念日に於ける闘争運動等の協議をなし右記念日には大々的なニュースを發行し

- 同高砂町一七第一銀行員加藤秀雄(二二)
- 同鶴岡町五〇 無職 東出三郎(二二)
- 同大繩町一九店員 齋川松志(假名二九)
- 同大黒町四七 店員 野村勝治(二三)
- 同 六一 店員 伊藤健三(二五)
- 同谷地頭町小學校教員 高木新一(三三)
- 同新川町二九五郵便局員 三吉良太郎(二四)
- 同青柳町三二郵便局集配手 鈴木 明(二六)
- 同湯の川通二三元北門銀行員 柿本一夫(三〇)
- 同辨天町一六無職朝野喜八郎(假名二七)
- 同千代ヶ岱七無職 米村忠助(假名二七)

昭和四年十一月頃函館市末廣町三十五番地伊月剛三(三三)が中心となり「共產主義」に共鳴プロレタリアの社會建設をなしその宣傳方法を發賣禁止雜誌を讀んで共產主義を鼓吹させこれに感銘したるものを選取し黨員とし黨の研究と宣傳と實

共産主義運動

戦旗函館支部秘密結社事件

同蓬來町一四三 女給 川端よれ(三) 以上の十三名が治安維持法違反として函館地方裁判所の豫審に附されたが、豫審の結果公判に附されたものは伊月剛三、加藤秀雄の兩名で、その他は起訴猶豫の処分を受けた。

北海道第三次共産黨事件

北海道地方協議会の結成 去る三・一五、四・一六事件の全国的日本共産黨選挙の際その中堅的左翼闘士をいかに奪はれて以来鳴りをひそめておた道内各地の極左翼派の一派は昨年三月白雪未だとけやらぬ頃から、札幌、小樽、旭川を中心として日本共産黨並に日本共産青年同盟の指導に基く組織運動を企圖して四月十日治警法により結社解散を命ぜられた日本労働組合全国評議會はいゆる評議會の後身として更生した日本労働組合全国協議会の「北海道地方協議会」なる強固團體を結成して資本の攻勢に對抗し無産大衆の解放迅速のためあらゆる日常闘争を通じて猛烈な宣傳煽動により一氣に大衆の極左化を遂行せんとしたものであるしかしてこの中心は旭川におき、これに「政治部」「組織部」「アザプロ部」「教育部」「調査部」「財政部」「機關紙部」等の門部を設け、更に各地に地區委員會を設け「産業別労働組合組織準備会」なる

名稱の下に出版、金屬、食料、炭礦、運輸、交通、鐵道、通信、電氣、サラリマン、化學、纖維、自由等の産業別に從ひ社會機能の各層に浸透しいはゆる細胞組織によつて非合法組織の擴充に努めてゐた。

その現はれとしては最近の不景氣に關連して各僅の宣傳煽動を行ひ數多の紛議を惹起しつゝあつた、即ち昨秋旭川市の印刷工場争議場、小樽、札幌における失業労働者の紛議等殊に日雇労働者に對する煽動は最も著しかつたものである、改頁主義的合法組合たる地方農民組合の運動にも赤手を延べ、北海道聯合會内の一部の者との連絡を採り、小作争議のほつ策をみるや巧みにこれを激化せしむべく策動を試み或ひは無産農民の左翼誘引に努める等、敏活な活動に出、更に内にあつては、日本共産黨日本共産青年同盟の機關紙たる「第二無産者新聞」無産青年の配布網を造り、發賣頒布禁止の雜誌「戦旗」を工場、學生、街頭等の班組織によつて配布し、これによつて勢力を擴めかつ實際運動に誘引し、一方「赤色救援會」を組織して日本共産黨の後援の下に金品を募集しこれによつても宣傳に資し勞々ロシア革命記念日の宣傳、徴兵検査、招魂祭海軍記念日に對する誹謗八月一日の各國共産黨の所謂反戦デーを宣傳したり學生に學校騒動を煽動したりなどその策

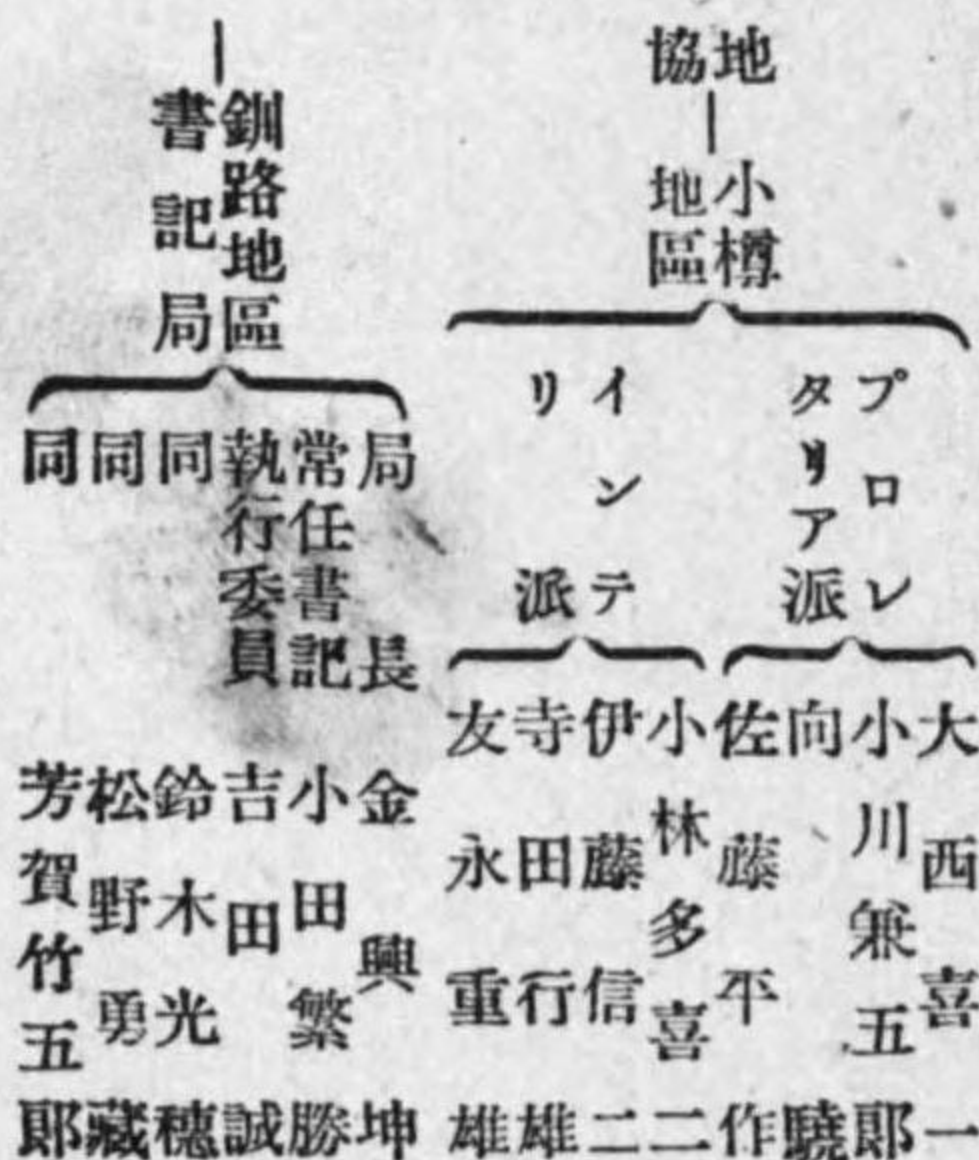
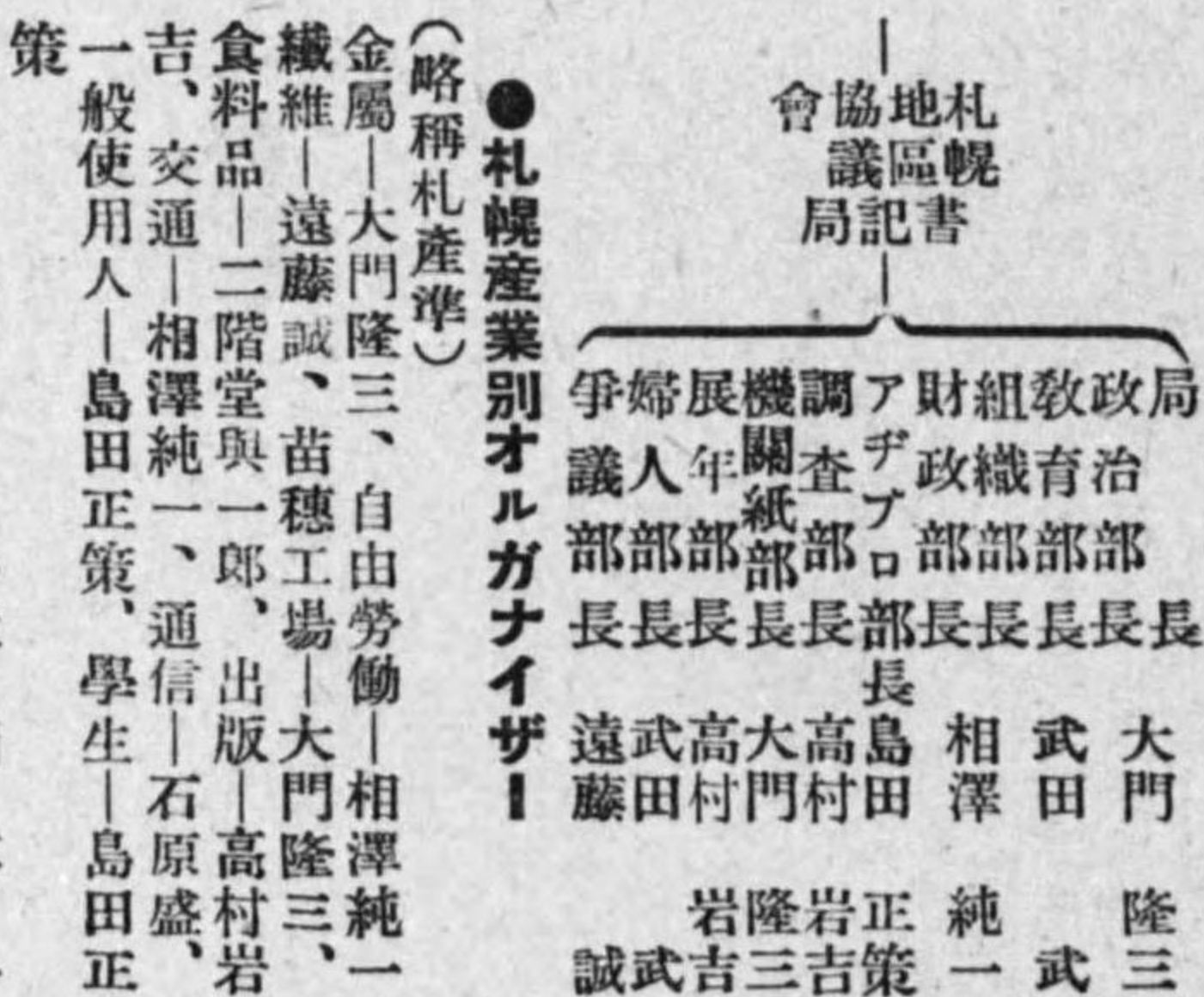
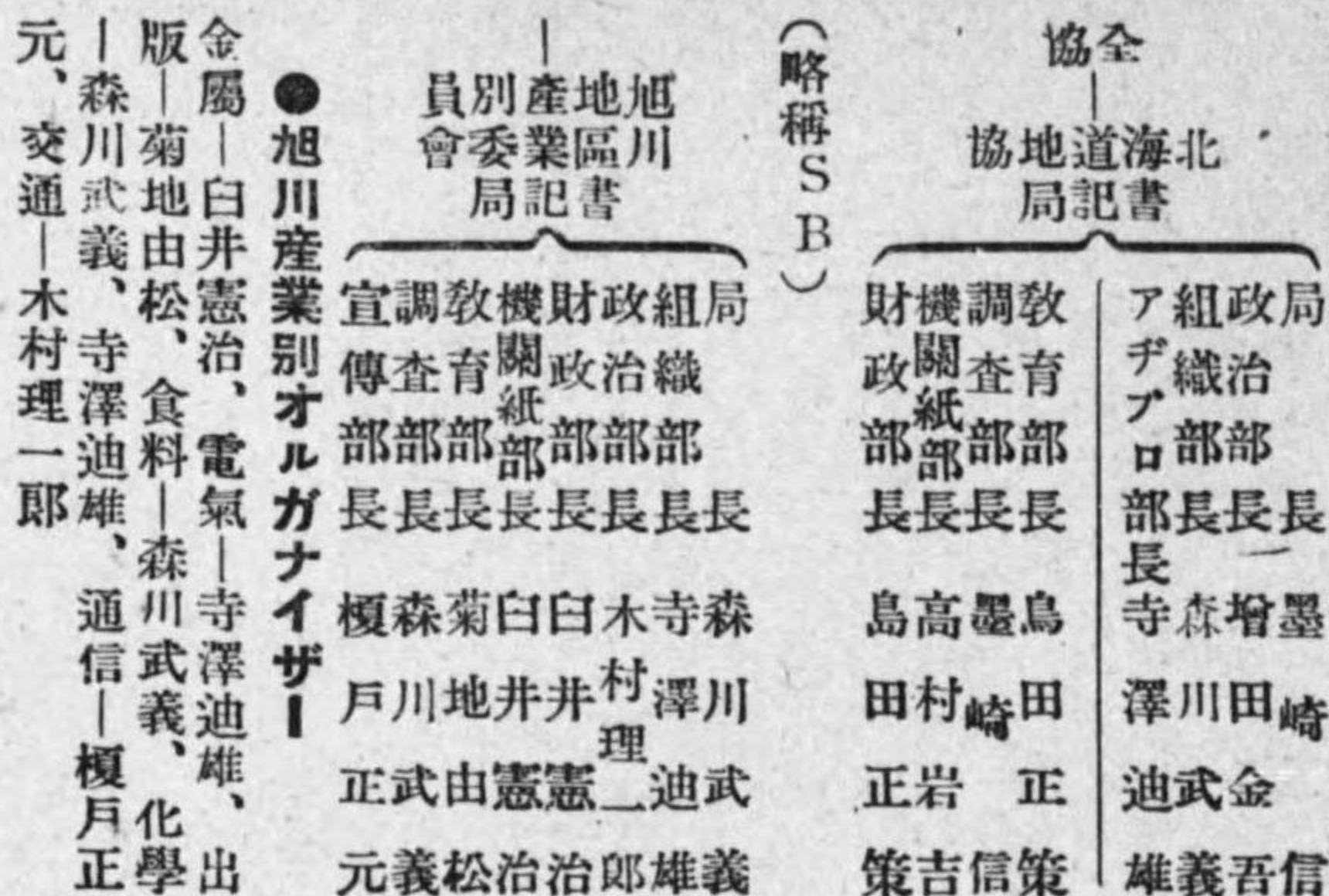
動たるや實に巧妙で極左獨特の新戦術により暗躍してゐたものであつた。而してオルガナイザーたる墨崎信が本道地協組織のため前年五月上旬上京したる爾來在京極左團體と連絡して秘かに同年十月上旬歸道し札幌市内北一條東四丁目袋小路になつてゐる三浦政治方に潜伏し地協擴大のため大努力を拂ひ近く第五回大會を企圖し大會に附議すべき議案を作成しつゝあつた、即ちこの議案は具體的闘争方針としての規約及びスロガンの中に

- 一、全協擴大強化萬歳
一、労働者農民の政府樹立
一、ソビエト同盟を守れ
一、共産黨共産青年同盟の組織行動の自由外數十項目

にわたつてゐる、しかして同年十月二十日これを脱稿し、それをアドレスの方法によつて各地區責任者に密送かくて十月二十七、八の兩日札幌市南三條西四丁目常盤湯二階に間借りしてゐる島田正策の部屋と、二十八日は中島公園上の幌平橋附近において墨崎を初め、島田、相澤(札幌)森川(旭川)寺島、高村、大門(札幌)増田(小樽海上)等八名出席し緊密な統制下にスパイを警戒しながら具體的運動方針を確立した、その内容は即ち地協の統制、小樽、札幌、旭川に各地區の設置、地區には産業別労働組合準備會を設

け、この準備會には各産業別の部門を置く、役員選舉地協及地區の機關紙發行等ここにおいて北海道地區組織の完全なる結成を見るに至つた、メンバーは次の如くソヴェト・プロフインテルン(國際赤色労働組合)の組織にならつたものである(別項組織系統圖を同じ)

組織系統圖



●釧路産業別オルガナイザ 金屬―松野勇藏、通信―鈴木光穂、鐵道―島田清、自由―金興坤、炭礦―芳賀村五郎、印刷―小田繁勝 検査状況 十月上旬墨崎の歸道以來その潜在的地下運動の急激の變化を見、しかも露骨にアザプロをなすに至つたので、早くもこれを探知して道廳警察部特高課では地協の正體につき極力偵察の歩を進めた所運動方法は全く共産主義社會の實現をはかる大陰謀なること明瞭となつたので、昭和五年十二月一日午前五時を期し全道一齊に關係各警察署は所轄地方裁判所検事局と聯絡の下に水も洩らさぬ準備を整へ實に疾風迅雷的活動をなし一味を盡く検査したが、六市二町一村に亘り容疑者として検査されたものは七十八名で、これ等容疑者をめぐり参考人として召喚取調をうけたもの二百餘名の多きに達した。また豫審判事の強制處分によつて家宅捜査を行つた所は實に八十個所であつた。各署別に検査がら起訴された數を見るに

Table with 2 columns: Name and Status. Includes names like 小川、佐藤、伊藤、寺田, etc., and their respective legal status (e.g., 起訴, 検束).

國館 一三
深川 三三
由仁 三二
合計 七八
二十七名は起訴豫審に附されてゐたもので、その他は起訴猶豫となつた(うち二名は函館戦艦事件に連坐)
起訴された被告 起訴された者は函館の二名を除き二十五名で、之を年齢別に見れば二十歳至十九名、三十歳至五名、四十歳至一名である。尙住所、職業、氏名、年齢、略歴左の通り
本籍旭川市五條通十五丁目右六號戸主平三郎長男、當時札幌市北一條東四丁目三浦正治方、無職(東京商工半退) 信(二八)
本籍札幌市南六條西十三丁目一三三九、當時札幌市北五條東七丁目、日本生命保險會社外交員(樽商卒) 島田正策(三一)
本籍樺太豊原町大通北四丁目一四、當時札幌市白石三條一丁目、札幌一般労働組合内、無職(高小卒) 高村岩吉(三三)
本籍勇拂郡若小牧町王子社宅二區五號、戸主武吉長男、當時札幌市白石三條一丁目札幌一般労働組合内、無職(秋田工一半退) 大門隆三(四〇)

本籍小樽市稻穂町西二丁目七戸主龜吉長男、當時札幌市豊平一條一丁目二日井貞次郎方、無職(明大專卒) 柏澤純一(三七)
本籍札幌市北九條東三丁目戸主育彌弟、當時同上元鐵工(高小卒) 遠藤誠(二九)
本籍札幌市南十五條十四丁目一四〇〇戸主、當時札幌市白石三條一丁目札幌労働組合内、無職(高小卒) 寺島儀藏(三三)
本籍福島縣田村郡都路村大字前田一〇四戸主、當時札幌市南大通西九丁目一、無職(尋小卒) 武田武(二八)
本籍岩手縣盛岡市仁王第四割字大澤河原小路六三戸主知時三男、當時札幌市白石村大字上白石三九通信事務員(高小卒) 石原盛(三二)
本籍小樽市色内町二丁目三戸主、當時小樽市花園町西三丁目二、樺太日々新聞小樽支局外交員(中四退) 大西喜一(三六)
本籍秋田縣南秋田郡北浦町西水口四九戸主兼治長男、當時小樽市末廣町二三、日雇(尋小卒) 小川兼五郎(三五)
本籍小樽市稻穂町西六丁目五、當時小樽市緑町一丁目十一、著述業(樽中二退) 伊藤信二(二五)

本籍岩手縣美禰郡大田町戸主染三長男、當時小樽市花園町西二丁目一、北日本汽船株式會社員(帝大卒) 友永重雄(二七)
本籍小樽市奥澤町四丁目三二、當時同市緑町三丁目一五、新聞記者(高商卒) 寺田行雄(二七)
本籍石狩國雨龍郡深川町字蓬萊町、當時小樽市奥澤町五丁目小樽育成院内同院事務員(瀧中卒) 向野雄(二六)
本籍小樽市若竹町一四、當時同上、小樽郵便局事務員(通信講習) 上野馨(三二)
本籍函館市寶町三五、當時小樽市奥澤町一丁目三三、小樽貯金支局事務員(高小修) 因藤莊助(三九)
本籍雨龍郡深川町蓬萊町一五、當時旭川市五條通十五丁目右十元建具職(高小卒) 森川武美(二九)
本籍長野縣下高井郡中野町一一二當時旭川市五條通十五丁目右十、無職(高小卒) 寺澤建雄(三五)
(以上札幌地裁審理)
本籍朝鮮慶尙南道北西鐵里六一九戸主金水景三男、當時札幌市西幣舞町七釧路労働組合事務所内、無職(高小卒) 金興坤(二四)
本籍大分縣南海郡米水津村浦代六〇〇戸

主藤吉二男、當時前同上、靴工(高小卒) 小田茂勝(三二)
本籍釧路市入舟町十七戸主榮三方、當時釧路市浦見町市營住宅、無職(釧中四退) 鈴木光穂(二〇)
本籍釧路市採採戸主、當時釧路市茂尻矢十二、鑄物職工(高小修) 松野勇藏(二〇)
本籍秋田縣鹿角郡尾吉澤村字畑一五戸主一二三弟、當時釧路茂尻矢番外八號、無職(高小卒) 莖澤勘三郎(二七)
本籍北見國紋別郡紋別町大字藻龍村戸主新五郎二男、當時室蘭市千歳町六八、無職(尋小卒) 長屋錠太郎(三五)
(以上釧路地裁審理)
公判の結果 右は札幌地方裁判所及び釧路地方裁判所の二ヶ所で公判に附されたが、釧路は本年九月二十八日、札幌は十月十九日それぞれ判決言渡があつた即ち左の通り(括弧内は檢舉求刑)
釧路地裁關係
懲役三年(二年六月) 金興坤
同二年(同前) 四年間執行猶豫 小田茂勝
同二年(同前) 四年間執行猶豫 長屋錠太郎
同二年(同前) 四年間執行猶豫 鈴木光穂
同二年(同前) 四年間執行猶豫 松野勇藏

同二(二年) 莖澤勘三郎
札幌地裁關係
懲役五年(五年) 黒崎正信
懲役四年(四年) 島田岩吉
懲役三年(三年六月) 大門隆三
同(三年六月) 相澤武
懲役二年(二年六月) 武田武
懲役二年(二年) 遠藤誠
懲役二年(二年) 石原盛
懲役三年(三年六月) 森川武義
懲役二年六月(三年) 寺澤迪雄
懲役三年(二年六月) 大西喜一
懲役二年(二年) 小川兼五郎
懲役二年(二年) 伊藤信二
懲役二年(二年) 友永重雄
懲役二年(二年) 寺田行雄
同(二年六月) 向野雄
同(二年六月) 上野馨
同(二年六月) 因藤莊助
尙執行猶豫のついた七名は直に服罪した
本道第四次共産黨事件
札幌・地協を中心に結成 本道の極左運動の分子は前記の如く昨年十二月一日の大檢舉によつて中心を掃落されて以

來一時影を潜めてゐるが根絶の域に至らず本年三月ごろ札幌、小樽、岩見澤その他における急進分子が密に相呼應して極左陣營の結成を謀議し日本共産黨日本共産青年同盟等の綱領政策を無産大衆にアジ・プロし赤い主義の意識昂揚に努め同志の獲得をはかると共に全協と連絡をとり地下的活動を開始するに至つた。これが本年八月頃から益々尖鋭化し戦旗支局第二無産者新聞支局無産青年支局委員會等の名において秘密出版物並に不穩文書の配付網の確立のため會社、工場、鐵山、通信、鐵道等に潜入し研究會讀書會等を催し巧みに學生青年勤人を誘導一面労働者獲得のため全協札幌地協協力を組織し通信交通出版自由等の産業別労働組合を組織するに至りこの札幌地協が漸次各地に刺激を與へ小樽、岩見澤、室蘭、釧路、旭川、深川、伊達、野付牛等へ赤い思想が飛火したもので昨年十二月の第三次共産黨よりは地域が非常に擴大してゐることは見のがすことが出来ない。
札幌の運動 札幌に於ては石井事菊地恵一がオルガナイザーとなり最初無産青年の各支局を設けこれが配付をなし讀者網の擴大に努めてゐたが八月頃に至りこれでは目的が達せられないことを知り労働者の獲得によつて黨の擴大強化をはかるべく全協指導下に地協を組織し執行委員長 菊地 恵一